山形県埋蔵文化財センター調査報告書第174集

天矢場遺跡発掘調査報告書

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

天矢場遺跡

発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 174 集

２００９

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

天矢場遺跡

てんやば

発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第174集

平成21年

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

遺跡全景（北から）

石製品57・58、木柱54

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した天矢場遺跡の調査成果をまとめたものです。

天矢場遺跡は、山形県南部の米沢盆地北東部に位置する南陽市にあります。南陽市は、開湯900年余りの伝統ある赤湯温泉を柱に、歴史と観光のまちとして栄えてきました。歴史的遺産として有名なものに、県内最大で東北地方でも６番目の規模を誇る国指定史跡の稲荷森古墳があります。また、県内でも有数の「果樹栽培のまち」として知られており、遺跡周辺の土地も宅地とともにサクランボ・ブドウ・ラフランスなどの果樹栽培地として利用されています。

この度、一般国道13号上山バイパス改築事業（中川工区）にかかわり、天矢場遺跡の発掘調査を実施しました。調査では、縄文時代の陥穴をはじめとする各種の土坑が検出され、それらの遺構に伴って縄文時代早期末葉から後期後葉にわたる多様な縄文土器や土製品等が出土しています。また、中世・近世の掘立柱建物跡や井戸跡・溝跡等が多数検出され、これに関連する陶磁器および石製品等も出土しています。これらの調査成果は、本格的な発掘調査がこれまでほとんどなされてこなかったこの地域の歴史を究明していく際に、貴重な資料となることでしょう。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を保護するとともに、祖先の歴史を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちに課された重要な責務と考えます。その意味で本書が文化財保護活動の啓蒙や普及、学術研究や教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりますが、調査において御支援、御協力いただいた関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

平成21年３月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

理事長　山口常夫

凡　　例

1　本書は、一般国道13号上山バイパス改築工事（中川工区）に係る「天矢場遺跡」の発掘調査報告書である。

2　既刊の年報、現地調査説明会資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。

3　調査は、国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

4　本書の執筆は、須藤孝宏（第Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ章）、氏家信行（第Ⅲ・Ⅵ章）が担当し、柏倉俊夫、小笠原正道、佐東秀行、安部実、長橋至、伊藤邦弘、黒坂雅人が監修した。

5　遺構図に付す座標値は、平面直角座標系第Ｘ系（世界測地系）により、高さは海抜高で表す。また、方位は座標北を表す。

6　本書で使用した遺構・遺物の分類記号は、下記の通りである。

ＳＢ…掘立柱建物　ＳＤ…溝　ＳＥ…井戸　ＳＫ…陥穴、土坑　ＳＰ…柱穴

ＳＸ…性格不明遺構　Ｐ……土器　Ｓ……礫　Ｗ……木製品

7　遺構・遺物実測図の縮尺・網点の用法は、各図に示した。なお、遺構配置図中の破線はＡ・Ｃ区及びＢ・Ｄ区の境界を表し、遺物実測図中の断面図の▲は胎土に繊維が混入していることを表す。

8　基本層序および遺構覆土の色調記載については、2005年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版基準土色帖」によった。

9　発掘調査および本書を作成するにあたり、下記の方々から御協力・御助言をいただいた。（敬称略）

富山県埋蔵文化財センター　狩野睦

会津若松市教育委員会　小島克則　近藤真佐夫

弘前大学　関根達人

新発田市教育委員会　鶴巻康志

阿賀野市教育委員会　中山俊道　古澤妥史

小松市立博物館　宮下幸夫

新潟県埋蔵文化財調査事業団　山本肇

調 査 要 項

遺　跡　名	天矢場（てんやば）遺跡					
遺 跡 番 号	平成18年度登録					
所　在　地	山形県南陽市大字川樋字天矢場					
調査委託者	国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所					
調査受託者	財団法人山形県埋蔵文化財センター					
受 託 期 間	平成19年４月１日～平成20年３月31日（現地調査・整理作業）					
	平成20年４月１日～平成21年３月31日（整理作業）					
現 地 調 査	平成19年５月10日～７月17日					
	平成19年10月１日～11月６日					
調査担当者	平成19年度	調　査　課　長	長橋至			
		整　理　課　長	野尻侃			
		主任調査研究員	須藤孝宏（調査・整理主任）			
		調　　査　　員	伊藤純子			
	平成20年度	整　理　課　長	安部実			
		調　査　課　長	長橋至			
		課　長　補　佐	黒坂雅人			
		主任調査研究員	氏家信行（整理主任）			
		調　　査　　員	伊藤純子			
調 査 指 導	山形県教育庁教育やまがた振興課文化財保護室（平成19年度）					
	山形県教育庁文化遺産課（平成20年度）					
調 査 協 力	南陽市教育委員会					
	山形県教育庁置賜教育事務所					
委 託 業 務	基準点測量業務　株式会社横山測量設計事務所					
	地形・遺構測量業務　株式会社パスコ					
	自然科学分析業務　パリノ・サーヴェイ株式会社					
発掘作業員	安達勤	阿部悦子	安部孝	大木千恵子	小沼孝	鏡広子
	柏倉賢助	川合昭一	木村弘一	草刈多喜	草刈利男	今野孝一
	酒井秀雄	佐藤茂	佐藤昌一	佐藤由美子	澤口與助	鈴木晴夫
	武田武夫	藤丸ますみ	皆川泰	山口秀男	吉田重夫	渡邊みゆき
	寒河江美代子	（五十音順）				
整理作業員	荒木由里子	竹田節子	永井利子	（五十音順）		

目　次

Ⅰ　調査の経緯……1
Ⅱ　遺跡の概観……4
Ⅲ　検出された遺構……12
Ⅳ　出土した遺物……19
Ⅴ　自然科学分析……23
Ⅵ　調査のまとめ……34

報告書抄録……巻末
天矢場遺跡遺構配置図……付図

表

表１　掘立柱建物観察表（１）…… 74
表２　掘立柱建物観察表（２）…… 75
表３　掘立柱建物観察表（３）…… 76
表４　掘立柱建物観察表（４）…… 77
表５　掘立柱建物観察表（５）…… 78
表６　遺物観察表　縄文土器・土製品 …… 79
表７　遺物観察表　石器 …… 80
表８　遺物観察表　須恵器 …… 80
表９　遺物観察表　陶磁器（１）…… 80
表10　遺物観察表　陶磁器（２）…… 81
表11　遺物観察表　木製品 …… 81
表12　遺物観察表　石製品 …… 81

図　版

第１図　調査区概要図 …… 3
第２図　地形分類図 …… 5
第３図　遺跡位置図 …… 6
第４図　天矢場遺跡層序 …… 11
第５図　遺構配置図の割付図 …… 36
第６図　遺構配置図１ …… 37
第７図　遺構配置図２ …… 38
第８図　遺構配置図３ …… 39
第９図　遺構配置図４ …… 40
第10図　遺構配置図５ …… 41
第11図　遺構配置図６ …… 42
第12図　遺構配置図７ …… 43
第13図　遺構配置図８ …… 44
第14図　遺構配置図９ …… 45
第15図　遺構配置図10 …… 46
第16図　遺構配置図11 …… 47
第17図　遺構配置図12 …… 48
第18図　遺構配置図13 …… 49
第19図　遺構配置図14 …… 50
第20図　遺構配置図15 …… 51
第21図　ＳＫ７・８・11・98陥穴、ＳＢ99掘立柱建物 …… 52
第22図　ＳＢ100・1500掘立柱建物…… 53
第23図　ＳＢ1777・1781掘立柱建物 …… 54
第24図　ＳＢ1782・1783掘立柱建物 …… 55
第25図　ＳＢ1784・1785掘立柱建物 …… 56
第26図　ＳＢ1786・1788掘立柱建物 …… 57
第27図　ＳＢ1787掘立柱建物 …… 58
第28図　ＳＢ1789・1791掘立柱建物 …… 59
第29図　ＳＢ1790掘立柱建物 …… 60
第30図　ＳＢ1792・1794掘立柱建物、ＳＰ1265柱穴 …… 61
第31図　ＳＢ1793掘立柱建物 …… 62
第32図　ＳＥ９・151・420・935・1023・1110井戸…… 63
第33図　ＳＫ12・34・395・433・530・531・439・471土坑 …… 64
第34図　ＳＫ515・516・522・635・1088・1089土坑 …… 65
第35図　ＳＫ1120・1433・1446・1629・1672土坑、
ＳＸ588・1451・1648性格不明遺構…… 66

第36図　ＳＤ1014・1054溝 …… 67
第37図　ＳＤ1090・1091・1460溝 …… 68
第38図　ＳＤ1676～1680・1699溝他 …… 69
第39図　縄文時代の遺物１ …… 70
第40図　縄文時代の遺物２ …… 71
第41図　奈良・平安時代、中世、近世の遺物 …… 72
第42図　その他の遺物 …… 73

写真図版

巻頭写真１　遺跡全景
巻頭写真２　石製品57・58、木柱54
写真図版１　Ａ区、Ｂ区完掘状況
写真図版２　Ｃ区、Ｄ区完掘状況
写真図版３　層序、ＳＫ７・11・98
写真図版４　ＳＫ７・８・11・98
写真図版５　ＳＢ99
写真図版６　ＳＢ100
写真図版７　ＳＢ1500・1793
写真図版８　ＳＥ９
写真図版９　ＳＥ151
写真図版10　ＳＥ420
写真図版11　ＳＥ935
写真図版12　ＳＥ1110
写真図版13　ＳＥ1023、ＳＫ12・34
写真図版14　ＳＫ395・439・471
写真図版15　ＳＫ433・530・531・515・516・522
写真図版16　ＳＫ632・635・1088
写真図版17　ＳＫ1089・1120・1629
写真図版18　ＳＫ1446・1672・1433、ＳＸ1648
写真図版19　ＳＸ1451・588、ＳＤ1675～1680他
写真図版20　ＳＤ1014・1054
写真図版21　ＳＤ1090・1091・1460、ＲＰ１・３、ＲＱ４・５
写真図版22　縄文時代の遺物１
写真図版23　縄文時代の遺物２
写真図版24　縄文時代の遺物３
写真図版25　縄文時代の遺物４
写真図版26　奈良・平安時代、中世の遺物
写真図版27　中世・近世の遺物
写真図版28　近世の遺物
写真図版29　近世、その他の遺物
写真図版30　その他の遺物

Ⅰ　調査の経緯

1　調査に至る経緯

天矢場遺跡の発掘調査は、国道13号の南陽市中川・山形市蔵王飯田間の交通混雑解消、安全性向上、沿道環境改善のための整備を目的とする、一般国道13号上山バイパス改築事業（中川工区）に伴って実施されたものである。

本遺跡は、平成18年度に行われた山形県教育委員会による遺跡詳細分布調査によって確認され、登録された。調査では、道路予定地内に係わる旧畑地・水田等を対象として、重機を用いて試掘トレンチ（ＴＴ１～７）を設定し、そこでの遺構･遺物の分布や包蔵状況を確認した。その結果、設置トレンチ３ヶ所（ＴＴ３～５）において柱穴などの遺構が検出された。遺跡の時期は遺構に係わる遺物がないため判然としないが、表採できる土器類の大半が平安時代のものであることから、平安時代の集落跡として天矢場遺跡が新規登録されることとなった。遺跡詳細分布調査の成果をもとにした、県教育委員会と国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所との協議の結果、記録保存を目的とした緊急発掘調査を実施することとなり、発掘調査は財団法人山形県埋蔵文化財センターが受託した。

2　調査の経過

（１）現地での発掘調査

天矢場遺跡の発掘調査は、平成19年５月10日から７月17日までの前期調査と、平成19年10月１日から11月６日までの後期調査の２期にわたり、合計72日間で終了した。各週の作業内容は、以下の通りである。

◇第１週（５月10日～11日）

始めに、調査する前の遺跡近景写真を撮影し、その後事業予定地内に調査区を設定する。並行して、調査事務所の環境整備を行う。

◇第２週（５月14日～18日）

重機による表土除去を５月14日に開始する。調査区南側（Ｂ区）は完了、その後北側（Ａ区）に移行。Ｂ区から遺構検出作業を開始し、完了後に遺構検出面の写真を撮影する。

◇第３週（５月21日～25日）

重機による表土除去を、５月24日に完了する（実質９日間）。Ａ区の遺構検出作業を完了させ、遺構検出写真を撮影する。並行してＢ区の遺構配置図（１/100縮尺）を平板測量によって作成する。また５月25日には、基準点および水準点を設置し（業務委託）、10m×10mのグリッドを設定することで、遺構および遺物の記録・登録の際に利用できるようにした。

◇第４週（５月28日～６月１日）

Ｂ区の遺構精査を開始。各遺構を半裁した後、断面写真撮影および断面図作成を行う。これと並行して、Ａ区の遺構配置図（１/100縮尺）作成を開始する。

◇第５週（６月４日～８日）

Ｂ区の遺構精査および遺構図面作成・写真撮影を完了し、６月６日からＡ区の遺構精査に移行する。

◇第６週（６月11日～15日）

Ａ区南側の遺構精査を行い、特徴的な遺構の図面作成・写真撮影を行う。

◇第７週（６月18日～22日）

Ａ区中央の遺構精査を行い、特徴的な遺構の図面作成・写真撮影を行う。

◇第８週（６月25日～29日）

Ａ区中央から北西側にかけての遺構精査を行い、特徴的な遺構の図面作成・写真撮影を行う。

◇第９週（７月２日～６日）

Ａ区東側の遺構精査を行い、特徴的な遺構の図面作成・写真撮影を行う。

◇第10週（７月９日～12日）

Ａ区の遺構精査および遺構図面作成・写真撮影を完了し、７月12日に前期調査分（Ａ・Ｂ区）の空撮・写真図化測量業務（業務委託）を行う。

◇第11週（７月17日）

Ａ区の井戸跡の遺構図面作成および完掘状況写真撮影

を行う。最後に、国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所の加藤建設監督官に調査成果を報告するとともに、前期調査区の引渡しを行い、前期調査の全工程を終了する。

◇第12週（10月１日～４日）

後期調査区上に敷設されていた中川小学校児童の通学路を、調査終了済みの前期調査区に付け替える工事が完了するのを待って、後期調査を開始する。後期調査区を設定して、重機による表土除去を10月２日に開始する。これに並行して、排水路の草刈・ドブさらい等の排水対策を施す。

◇第13週（10月９日～12日）

重機による表土除去を、10月11日に完了する（実質６日間）。調査区南側（Ｄ区）から遺構検出作業を開始して、遺構検出状況写真を撮影する。同様に、調査区南側（Ｄ区）から平板測量による遺構配置図（１/100縮尺）作成を開始する。また、10月11日には、前期調査に準じて基準点および水準点を設置した（業務委託）。

◇第14週（10月15日～19日）

Ｄ区の遺構精査・遺構図面作成を完了させ、完掘状況写真を撮影した後、調査区北側（Ｃ区）の遺構精査・遺構配置図作成に移行する。

◇第15週（10月22日～26日）

Ｃ区南半の遺構精査を行い、特徴的な遺構の図面作成・写真撮影を行う。

◇第16週（10月29日～11月２日）

Ｃ区の遺構精査および遺構図面作成・写真撮影を完了し、10月31日に後期調査分（Ｃ・Ｄ区）の空撮・写真図化測量業務（業務委託）を行う。11月２日に、天矢場遺跡調査説明会を開催し、18名の参加を得る。なお、同日国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所安齋建設監督官と後期調査区の引渡しについての確認を行う。

◇第17週（11月５日～６日）

調査区の埋め戻しおよび現場事務所の撤去作業を行い、11月６日をもって発掘調査の全日程を終了する。

（２）整理作業・報告書作成

報告書作成のための整理作業は、平成19年度と平成20年度の２ヵ年にわたり作業を実施した。

◇平成19年度整理作業

前期調査終了間際の平成19年７月13日に開始する。作業開始から約２ヶ月半は、現場で撮影した遺構写真や作成した遺構図面の整理および下図作成などの作業をおこなった。

後期発掘調査の開始日と同じ平成19年10月１日から、作業員２名を入れて本格的に遺構・遺物整理作業を開始した。整理対象となった遺構は、掘立柱建物18棟、陥穴・土坑等25基、井戸６基、溝11条で、遺物は縄文土器・須恵器・陶磁器・石器・石製品・木製品等あわせて整理箱10箱分である。

10月第１週から11月第２週まで、断続的に前・後期調査分を合せた出土遺物の洗浄・注記・復元等の基礎整理を行った。基礎整理と並行して、10月第３週から拓本作成および遺物実測作業を開始し、１月第５週までに終了する。その後、２月第１週から遺構・遺物の実測図トレース作業を開始し、３月第４週までに終了する。その間、２月第５週に遺物の写真撮影を行った。

その後は、年度末まで各種図版の作成・版組み作業と並行して本文執筆を進め、平成19年度分の整理作業を終了する。なお、自然科学分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に業務委託している。

◇平成20年度整理作業

９月から12月の期間で、図版作成、版組み、原稿執筆などの、報告書作成作業を行った。

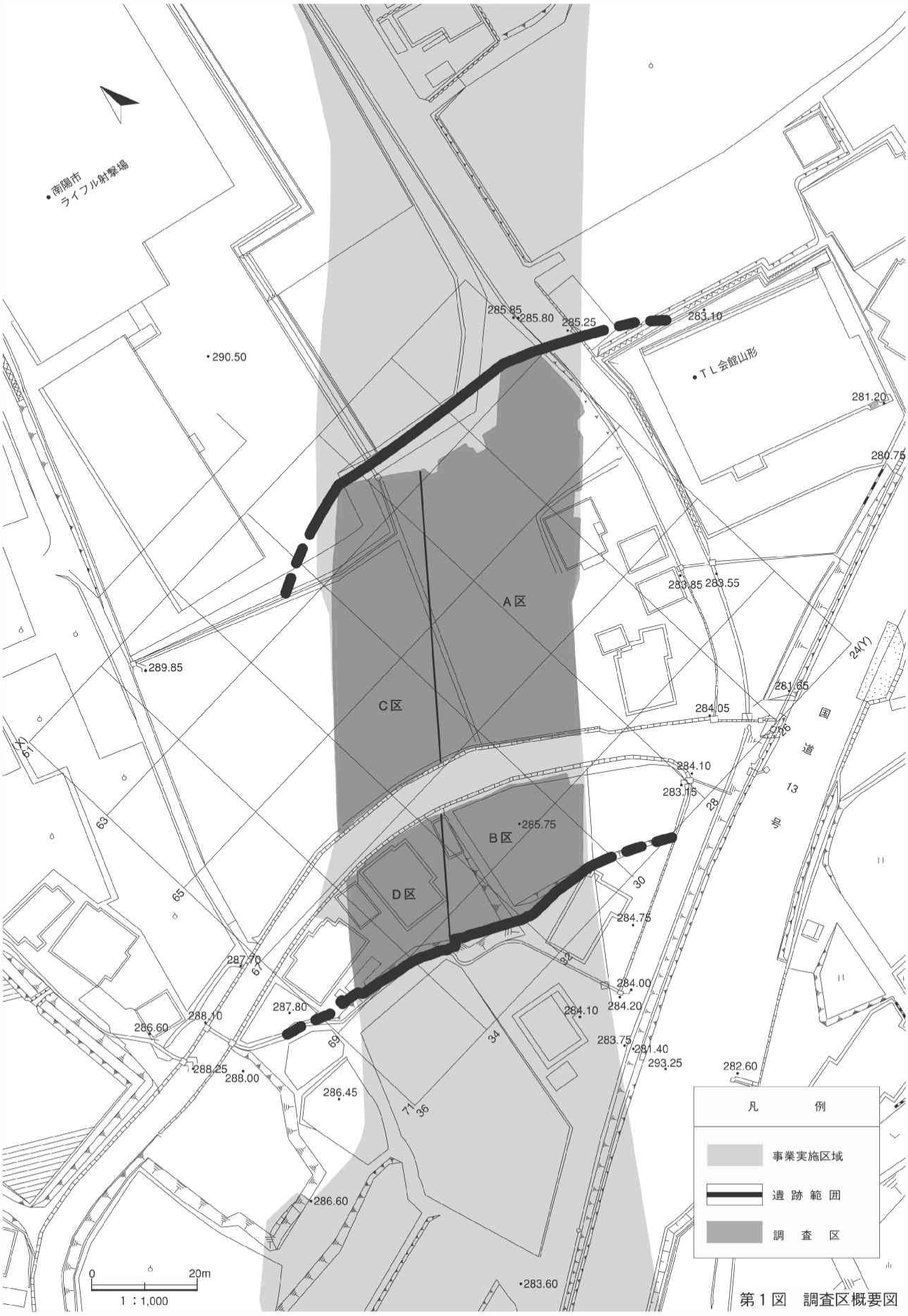
遺構図は、未作成だった図をデジタルデータから作成した。

遺物図は、細部の見直しを行い再選出を実施した。

写真図版は、撮影したものから報告書に掲載するものを選出した。

その後、遺構図･遺物図･写真図版の版組みを順次行っていった。

報告書の掲載図作成や版組みと並行して本文執筆を行った。


南陽市
ライフル射撃場
TL会館山形
A区
B区
C区
D区
国道13号
凡　例
事業実施区域
遺跡範囲
調査区
0
20m
1：1,000

第１図　調査区概要図

Ⅱ　遺跡の概観

1　地理的環境

遺跡の所在する南陽市は山形県の南東部に位置し、北端の白鷹山（標高994ｍ）から南端は吉野川･屋代川合流地点の大橋まで、東端は小岩沢、南西部は最上川に限られた範囲で、東西15㎞･南北24㎞の三角状の市域をなす。米沢盆地の北東部を占め、北は山形市および山辺町、北東は上山市、南東は高畠町、南西は川西町、西は長井市、北西は白鷹町に接する。面積は約160k㎡で、このうち北部の山地が70％を占める。南部に広がる段丘部・平野部の割合はそれぞれ６％・24％である。三角形の頂点（北端）が白鷹山で、ここから発する吉野川が市域中央を南北に貫流し、南端部を北西に流れる最上川（松川）に合流している。西部の織機川も同じく南流して最上川に注ぐ。北部丘陵地帯では、吉野川に沿って集落が点在し、標高は最北の小滝集落で430ｍ、最低は最上川に沿った南端の関根地区で209ｍとなっている。北部が山地で南に沃野が開けるこの地は、日照条件等に恵まれ気候も温暖なため、米・野菜・果樹などの栽培に適している。耕地面積が3,790ha、耕地率は24％である。気候は内陸性を呈し、年平均気温は10～11℃前後であるが、夏冬の温度差は大きい。

天矢場遺跡のある中川地区は南陽市東部に位置する。南陽市域のほとんどが最上川本流に沿う米沢盆地に属するのに対し、中川地区は最上川支流の須川よりさらに上流にある前川の水系に属している。地形的には西側に白鷹山丘陵、東側に奥羽山脈に連なる大洞山等の丘陵群がそびえ、その間を前川が北流して小盆地を形成する。中川地区は、これらの丘陵群によって南陽市中心部から隔絶される感がある。しかし、この地域は古くから交通の要衝としての機能があったことから、すでに戦国時代から周辺の山頂付近に多くの城館が設置されていた。特に江戸時代以降は米沢街道の宿駅として、人々の往来もさらに増えたと思われる。現在も、その中央には山形県を縦断するＪＲ奥羽本線・一般国道13号が通っている。

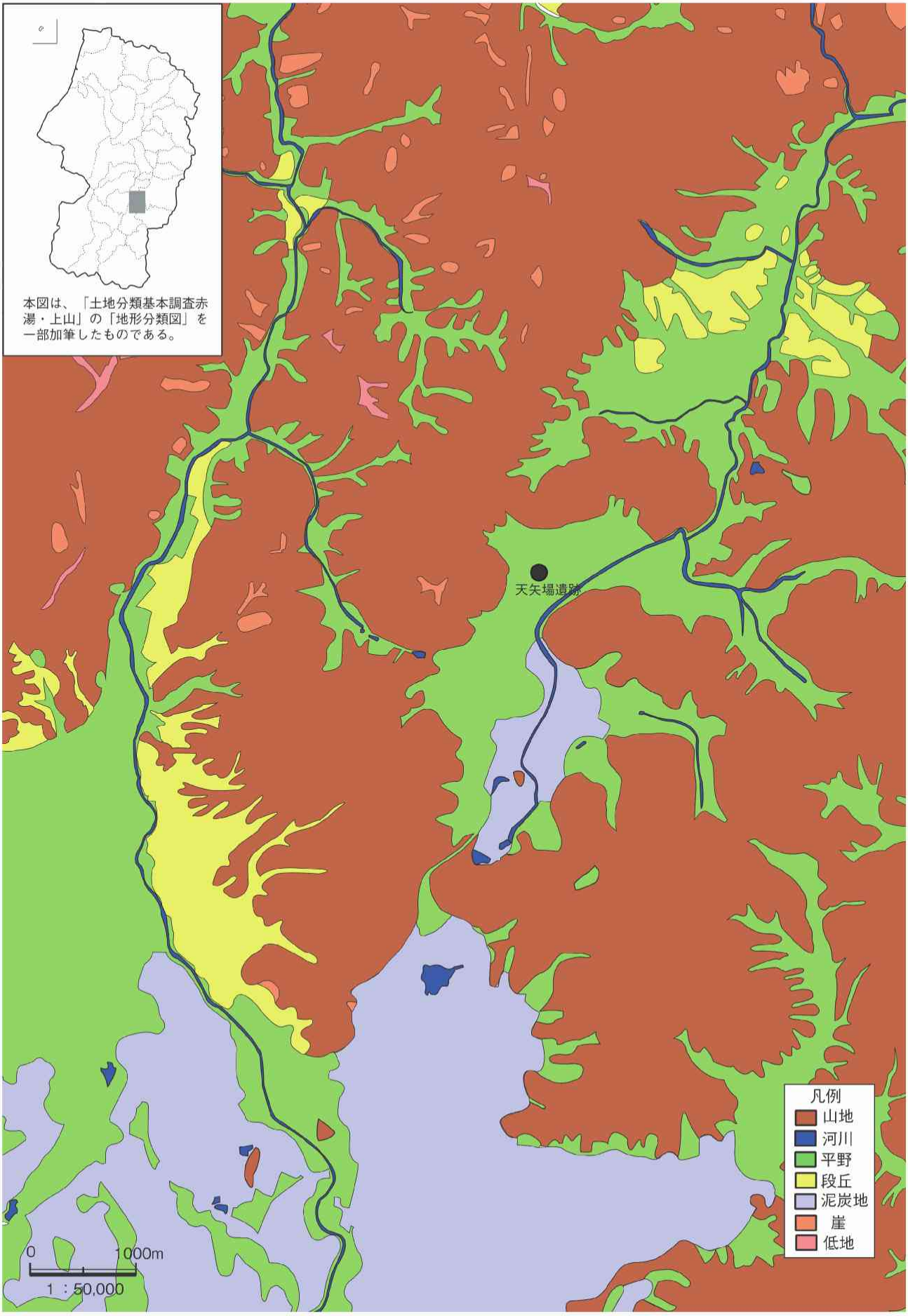
天矢場遺跡は、前川左岸の中山段丘と川樋低地の境界付近に立地する。標高は285～288ｍを測り、地形は西から東に向けて緩やかに傾斜している。本遺跡周辺の中山丘陵・中山段丘・川樋低地等は、山地と小河川の接点が多いため、太古より狩猟および採集等に適していた地域であると考えられる。

2　歴史的環境

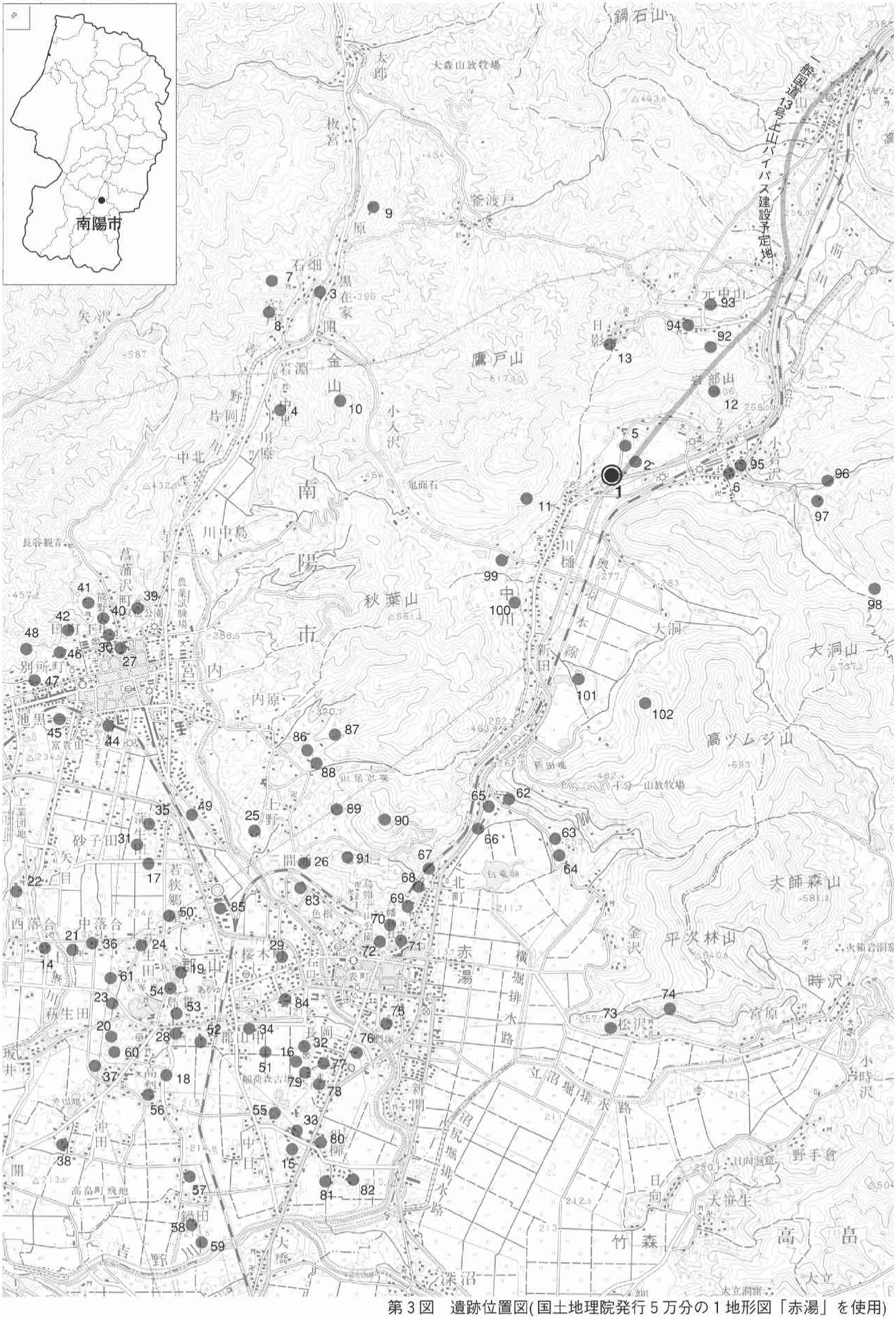
南陽市では、旧石器時代の遺物については、細石刃が長岡山遺跡から採取されている事例があるに過ぎないが、縄文時代の遺跡は米沢盆地北東縁に集中的に発見されている。特に吉野川の下流東部一帯は、泥炭層が広がる低湿地で大谷地と呼ばれ、これを囲むように遺跡が分布している。天矢場遺跡の所在する中川地区については、諏訪原Ａ～Ｃ・元中山日陰・小岩沢・日向・長次郎・一ノ倉山・岩谷堂の各遺跡が知られており、縄文中期および後期を中心に縄文の集落が形成されていたと思われる。

古墳時代の遺跡についても、縄文時代の遺跡と同様な分布が見られ、すでに消滅したものも含めて10箇所の古墳・古墳群が発見されている。５世紀のものとされる全長96ｍに及ぶ前方後円墳の稲荷森古墳（国史跡）や、５世紀末のものと推定され置賜地方では唯一の竪穴式石室を持つ赤石山古墳などが代表例である。他の８箇所は古墳群で、うち７箇所が赤湯市街地の北方丘陵に集中している。いずれも山腹・山麓の自然斜面を利用した同一形式の古墳で、形状および二色根２号墳から出土した和銅新銭から、８世紀のものと推定されている。蒲生田古墳群と狸沢古墳群・上野山古墳群からは蕨手刀３振が出土した。こうした古墳文化の盛行は、古代における当市域が置賜郡の政治・文化の中心地であったことを物語っており、特に終末期古墳群の集中的分布は奈良時代集落遺跡との関連性をうかがわせる。

律令制下の南陽市域は、「和名抄」に見える置賜郡７郷のうち置賜郷に属していたとする説が有力である。置賜郷は置賜郡の中心をなした地域と考えられ、南陽市域に郡山の地名が残ることから、この地を置賜郡衙跡に比定するのが通例となっている。また、先に述べた北部の



第２図　地形分類図（山形県「赤湯・上山」）



第３図　遺跡位置図(国土地理院発行５万分の１地形図「赤湯」を使用)

番号	遺跡名	時代	種別	番号	遺跡名	時代	種別
1	天矢場	縄文・中世・近世	集落跡	52	間々ノ上	奈良	散布地
2	加藤屋敷	縄文・古墳・奈良・平安・中世・近世	集落跡	53	郡山中堀	奈良・平安	散布地
3	石畑	縄文（中期）	集落跡	54	島貫	古墳～奈良・平安	集落址
4	三入山	縄文（前期）・平安	散布地	55	中ノ目下	奈良・平安	散布地
5	岩谷堂	縄文（晩期）	集落跡	56	前小屋	縄文	散布地
6	小岩沢	縄文（中・後期）	集落跡	57	大屋敷	平安	散布地
7	金座館	中世	楯跡	58	畿内田	平安	散布地
8	天狗山館	中世	楯跡	59	窪田尻	平安	散布地
9	御獄山物見	中世	砦跡	60	将監屋敷	奈良・平安	散布地
10	地蔵岩物見	中世	硝堡・物見	61	梅ノ木	奈良・平安	散布地
11	虚空蔵山館	中世	館跡	62	十分の一山	縄文	集落址
12	岩部山館	中世	館跡	63	金沢山ノ神	縄文	集落跡
13	日影館	中世	城砦・砦	64	七両坂古墳	古墳	古墳
14	檜原	平安・中世・近世	集落跡	65	月ノ木Ａ	平安	散布地
15	鵜の木館跡	中世	館跡	66	月ノ木Ｂ	縄文・弥生	集落跡
16	稲荷森古墳	旧石器・縄文・古墳	散布地・古墳	67	夷平	縄文・中世	散布地
17	当時作	縄文・奈良・平安	散布地	68	北町	縄文	散布地
18	百刈田	縄文・古墳	集落跡	69	稲荷前	縄文	散布地
19	沢田	弥生・古墳・奈良・平安	集落跡	70	上ノ山	縄文	散布地
20	西中上	平安	散布地	71	烏帽子山経塚	平安	経塚
21	中落合	奈良・平安	集落跡	72	烏帽子山古墳	古墳	古墳
22	庚壇	縄文～平安	集落跡	73	松沢	縄文	散布地
23	大塚	古墳～平安	集落跡	74	松沢古墳群	古墳	古墳群
24	荻生田	弥生・奈良	集落跡・散布地	75	椚塚館	中世	館跡
25	上野	縄文・中世・近世	集落跡	76	太子堂	平安	散布地
26	二色根古墳群	古墳	古墳群	77	長岡山東	縄文・平安	散布地
27	久保	縄文	集落跡	78	長岡南森	縄文・古墳	散布地
28	沢口	奈良・平安	集落跡	79	長岡西田	縄文	散布地
29	諏訪前	縄文・古墳・平安	散布地・集落跡	80	水上	奈良・平安	散布地
30	宮内小学校敷地内	縄文・平安	集落跡	81	東畑Ａ	奈良・平安・近世	集落跡
31	南館館ノ内	縄文・奈良・平安	散布地	82	東畑Ｂ	平安	散布地
32	長岡山	旧石器・縄文・古墳	集落跡	83	横沢	縄文・奈良	散布地
33	内城館	中世	館跡	84	東六角	縄文・平安	集落跡
34	矢の目館953他	中世	館跡	85	唐越	縄文・奈良・平安	散布地・集落跡
35	蒲生田館	中世	館跡	86	蒲生田古墳群	古墳	古墳群
36	中落合館	中世	館跡	87	山居沢山Ａ	平安	散布地
37	将監屋敷館	中世	館跡	88	山居沢山Ｂ	平安	散布地
38	沖田館	中世	館跡	89	狸沢山古墳群	古墳	古墳群
39	慶海山館	中世	館跡	90	上野山古墳群	弥生・古墳	散布地・古墳群
40	宮沢城	戦国期	館・城跡	91	二色根館	中世	城跡
41	北館	室町	館跡	92	諏訪原Ａ	縄文	集落跡
42	宮内南館	戦国期	館跡	93	諏訪原Ｂ	縄文	散布地
43	笹子平	縄文	散布地	94	諏訪原Ｃ	縄文	集落跡
44	大清水	縄文・平安	散布地	95	小岩沢墳墓	平安・鎌倉	墳墓
45	富貴田	縄文・奈良	集落跡	96	日向	縄文	散布地
46	別所Ａ	平安	散布地	97	長次郎	縄文	散布地
47	別所Ｂ	縄文	散布地	98	一ノ倉山	縄文	散布地
48	別所山経塚	平安	経塚	99	川樋館	中世	館跡
49	観音堂	縄文・平安	散布地	100	館平館	中世	館跡
50	西田	平安	散布地	101	中野森館	中世	館跡
51	早稲田	奈良	散布地	102	大洞山館	中世	館跡

山麓における８世紀頃のものとみられる墳墓の集中的分布も、古代郡衙の存在の証明と考えられる。一方、古社寺の創建伝承を見ると、二色根薬師寺・宮内熊野神社・別所皇太神社・三堀寺など、赤湯・宮内方面の古社寺がいずれも９世紀の創建と伝えられている。社寺に付加するかのごとく経塚や須恵器窯跡なども発見されている。天矢場遺跡周辺では、隣接する加藤屋敷遺跡の２度に亘る発掘調査において、河跡から大量の土師器・須恵器・木製品が出土しており、当地の奈良・平安時代の歴史を解明する貴重な資料となっている。

中世の置賜郡には、屋代荘・成島荘・北条荘などの荘園があったことが知られる。南陽市域の大半は北条荘に属したが、屋代荘など近隣の荘園・公領に含まれる地域もあった。北条荘は、北条時政の庶子（北条相模坊臨空）がこの地を支配したことに始まると伝えられるが、詳細は不明である。大江広元の次男時広に始まる長井氏が、北条荘の地頭であったと推測される。長井氏は、代々将軍の要職に連なり、荘の経営はその被官の手に委ねられたとされる。鎌倉御家人の当地支配は鎌倉文化の地方流入を促し、室町期にかけて板碑を中心とする石造文化が開花した。南陽市域にも、県内最古の板碑である正元元年（1259）銘の大日板碑をはじめとする数多くの板碑・磨崖碑・六面幢などが残されている。

伊達氏が長井氏を攻めて置賜郡内を領有するのは、康暦２年（1380）であるが、北条荘にはそれ以前から伊達氏の息がかかっていたことが宮内熊野神社伝承記録等から読み取れる。伊達氏の置賜経営は、稙宗のとき（16世紀）になってほぼ形を整えた。北条荘内には、荘内に28郷を領していたといわれる懸田氏をはじめ、宮内郷を知行した大津氏、中山郷を知行した小国氏などの有力豪族がいたことが知られる。地頭と呼ばれる家臣は、村落の居屋敷に館を構え、在家･浮免の様態で所領を支配した。在家とは、家と田畑と百姓権の三つを揃えた百姓で、浮免は請作者不定の土地である。「采地下賜録」には北条荘におけるこうした在家の存在が証明されている。

天矢場遺跡周辺には、虚空蔵山館（星見ヶ城）･岩部山館（月見館）・日影館・川樋館・館平館（平井城）・中野森館・大洞山館等の中世城館が存在する。このうち、川樋館・館平館・中野森館は戦国期のものらしいが、その他の館の築城時期は不明である。館平館は伊達の家臣竹田喜五右衛門の居城であり、北の中山城と赤湯との連絡に当たっていた（『赤湯町史』）。また、中野森館は文明３年（1471）に伊達氏との確執の末に没落したと伝えられる粟野氏（粟野十郎藤原義広の子孫である粟野十郎左衛門尉宗次杢頭が父）の隠館であるという（『東置賜郡史』）。中世末期の天正２年（1574）には、最上氏の軍勢が天矢場遺跡のある川樋にまで侵攻したという記録が残っているが、領土紛争の最前線という性格を持つ地域であったからこそ、多くの城館が構えられたのであろう。

置賜地域には、天正19年（1591）伊達氏にかわって蒲生氏が入部し、文禄３年（1594）に検地を実施したが、慶長３年（1598）には上杉氏の支配するところとなり、それ以降南陽市域は米沢藩領として幕末期を迎えることとなる。近世以降、天矢場遺跡周辺は米沢街道の宿駅としての機能を持つようになる。川樋と小岩沢は、半月交代で宿駅業務を勤めたという。18世紀に入ると、輸送コストを低く抑えることができる小滝街道や釜渡戸道等の脇街道を利用した物資流通が増加し、これに伴う本街道・脇街道間の抗争が展開された。こうした資料から、時間の経過とともに、宿駅としての権威や収益が下がったことが看取されるが、当地が本街道沿いの宿駅業務を勤めたことで、多くの人々が往来し多様な文物に触れる機会を得たということは確かであろう。さらに当地は、金山開発でも有名であり、中世初めからすでに川樋金山・大洞金山の名が文献資料に登場する。最盛期は寛永年間（17世紀前半）で、「大洞千軒・萱場（新田）千軒・娼妓二百名」の口伝も残されている。寛永19年（1642）には、農村衰微の理由で藩内各鉱山とともに廃止を命ぜられたが、金山開発の歴史は当地の成り立ちを考える上で重要であると思われる。なお、天正３年（1575）開山と伝えられる曹洞宗松林寺が当地の中核寺院である。天矢場遺跡の北東方向にそびえる岩部山の三十三観音は、この寺の16世である独狐金毛和尚が、天保年間（18世紀前半）の凶作の際に、飢餓に苦しむ人々を救う目的で彫刻したものであると言う。

3　調査の方法

天矢場遺跡の調査では、遺構・遺物の位置関係を記録するために、国土座標平面直角座標系第Ｘ系を基準にした方眼座標（グリッド）網を設定した。測量基準杭と水

準点の移動にあたっては、株式会社横山測量設計事務所に業務委託した。基準点に関しては、公共測量に基づいて設置された工事用の３級基準点のうち３点を視準点として、調査区内に公共座標杭を設置し、本遺跡のグリッド設定の基準杭とした。各グリッドは、X：-211620・Y：-56240を基点に、座標値の下３桁目と下２桁目の数値を採り、北から南に向かって62、63、64～と付した算用数字と、東から西に向かって24、25、26～と付した算用数字の組み合わせによって表示し、「62-24」グリッドと呼称した。グリッドは、遺物の出土位置や遺構の大まかな位置を表示するためのものであり、遺構の平面および断面の測量・記録作業の基準になるものでもある。水準点に関しては、基本測量により設置された一等水準点を与点として、３級水準測量手法に準じて、調査区外周に３点設置した。

天矢場遺跡の調査区には、ほぼ東西および南北に延びる２つの道路が十字に交差する状態で敷設されていた。このうち、調査区を南北に横切る道路は、中川小学校児童の通学路として利用されていたために、すぐに取り壊すことができなかった。ゆえに発掘調査は、調査区を南北に横切る道路を境に、道路よりも東側の部分とこの道路を含む西側の部分の２区画に分け、中断期間を挟んで実施することとなった。児童の通学に支障が出ないよう、中断期間に道路の付け替え工事を完了させるという計画である。もう一方の、東西に調査区を横切る道路は現状維持することとされ、調査対象から外された。そこで便宜上、調査区は東西に横切る道路を境にして、北からそれぞれ前期調査区をＡ区・Ｂ区、後期調査区をＣ区・Ｄ区と呼称することにした。出土遺物の注記の際には、このＡ～Ｄ区の呼称を用いた。

遺構の掘り込みにあたっては、遺構の大きさや重複関係を考慮して、セクションベルトを随時設定し写真撮影や実測図等の作成を行った。土層注記の際には、新版標準土色帖（2005年版）を参照し、目視による観察を行っている。また、遺構から出土した遺物には遺構名や登録遺物番号を記載し、遺構外から出土した遺物にはグリッド名や基本土層を記載して取り上げている。

記録写真については、調査の進捗に合せて随時６×７フィルムと35㎜フィルム、さらにデジタルカメラを使用して撮影した。フィルムは、６×７カメラに関してはモノクロームとリバーサルカラーの２種、35㎜カメラに関してはリバーサルカラーのみの１種を使用し、遺構の検出・土層の断面・完掘状況の他、遺物の出土状況の撮影を適宜行った。なお調査の最後には、株式会社パスコに業務委託して、上空からの俯瞰撮影を行っている。

遺構の断面図については1/20縮尺を基本として採録し作成した。平面図は遺構検出直後に、平板測量で1/100縮尺の遺構配置図を作成した他、掘立柱建物や井戸等の特徴的な遺構については、遺構完掘後にも平板測量などで１/20または１/40縮尺で実測図を作成した。調査区内のすべての遺構を網羅した実測図の作成については、株式会社パスコに業務委託し、空中写真撮影・図化測量の手法を用いて行った。

これらの発掘調査で得られた出土品・実測図・写真等の資料と記録は、当センターの整理基準に準拠して整理を進め、デジタル処理した遺構・遺物の実測図については、画像校正や図面編集を行い、報告書作成に活用した。発掘現場で作成した遺構実測図や整理作業で作成した遺物実測図などは専用ケースに収納し、データ編集した記録類はＣＤ－Ｒに保存した。

なお、調査期間が限られた中で当初の予想を遥かに上回る数のピットが検出されたものの、限られた調査期間中に発掘現場で検出できた掘立柱建物は３棟（Ｂ区北側ＳＢ99および中央ＳＢ100・Ｃ区西側ＳＢ1500）に過ぎなかった。本報告書に記されたその他の掘立柱建物については、発掘調査終了後に遺構配置図や空撮写真をもとにして推定したものである。従って、一部に図面・写真等の記録が十分できなかった箇所があることをお断りしておく。

4　遺跡の基本土層

天矢場遺跡における堆積土は、調査区全域を通じてほぼ一様である。大きく５層に分層されるため、Ⅰ～Ⅴ層と表記した。土層観察は、標高の高い調査区西壁面を利用した。なお、細長い調査区の形状を勘案し、Ａ区北壁で２ヶ所、Ｃ区西壁で２ヶ所、Ｄ区西壁の１ヶ所で記録を行っている。基本堆積層の状態については、主に色調・土質・層厚を記し、観察時の所見を簡潔に付け加えた。第４図にそれぞれの土層断面図を示している。以下に、各層の特徴を述べる。

Ⅰ層：黒褐色土層または砂層。層厚５～25㎝。Ａ区北側は造成時の盛土が堆積したものと思われる。Ａ・Ｃ区南側は畑地であり、植物根を含む耕作土が堆積する。Ｄ区西端は住宅が撤去された区域である。破壊された基礎コンクリート等を含む砂層となっている。重機による点圧のため、非常に硬くしまっている。それぞれ性格を異にするため、土質・層厚に差異があるが、本来はいずれの区域もＡ・Ｃ区南側同様の耕作土が堆積していたと考えられる。

Ⅱ層：黒色土層。層厚５～20㎝。耕作土の深層土と考えられる。よく締まり、粘性がやや強い。内包物は、ほとんどない。

Ⅲ層：にぶい黄褐色または暗褐色砂質土層。層厚20～40㎝。よく締まり、粘性は弱い。上層に直径２～３㎜ 大のにぶい黄褐色風化礫と植物根由来の酸化鉄を少量含む。下層になるに従い、Ⅳ層の影響を受けて砂質度が高まる。火山性岩石に由来する礫質褐色森林土壌である。縄文時代および中世・近世の遺構検出面および、遺構外遺物出土面はともにⅢ層上面である。

Ⅳ層：黒色粘質土層。層厚５～23㎝。よく締まり、粘性はやや強い。Ａ・Ｃ区北側および南側ではこの層から湧水が浸み出してきた。規模の大きな遺構は、おおよそこの面まで掘り込まれている例が多い。

Ⅴ層：黒色粘土層。層厚３㎝以上。しまり・粘性ともに強い。Ｂ・Ｄ区においては、この層から湧水が染み出してきた。湧水が認められるのは、地下の伏流水が浸み出すためだと思われる。

5　遺構と遺物の分布

（1）遺構の分布

今回の調査で検出された遺構は、陥穴４基、掘立柱建物18棟、井戸６基、土坑、溝、ピット群等である。今回の調査で検出された遺構の総数は1700基以上で、柱穴が大半を占める。遺跡全体の遺構配置については、付図として掲載した。またこれとは別に、隣接する遺構同士の関係や地形を明確にするため、区域毎の遺構配置を第６図～第20図として掲載している。検出した遺構の分布を概観すると、遺跡内全体に散在しているようであるが、特に遺構が密集するのはＡ区の中央から北西部及びＣ区の北側である。一方、Ｄ区の南側、Ａ区の北東角は遺構がやや希薄である。また、Ｃ区およびＤ区の一部では、通学用道路敷設に伴う撹乱が見られ、遺構が完全に失われていた。その他の区域でも、畑地や果樹園の造成にあたり、一部遺構が破壊されたり、遺物が掘り出されたりしたことが十分想定される。

検出された遺構の大半は、中世から近世の柱穴群であると思われるが、遺物を共伴しないものが多く、時代の特定は難しい。従ってここでは、時代を特定しやすい特徴的な遺構の分布について述べるに留める。

縄文時代の遺構と特定できるものは、Ｂ区東側の陥穴４基のみである。４基とも同一方向に傾き（Ｎ-45°-Ｗ）、３～４ｍの等間隔をおいて構築されていることから、陥穴と判断した。

中世から近世の遺構は遺跡全体に分布する。検出されたのは、掘立柱建物18棟、井戸６基、土坑、溝などである。

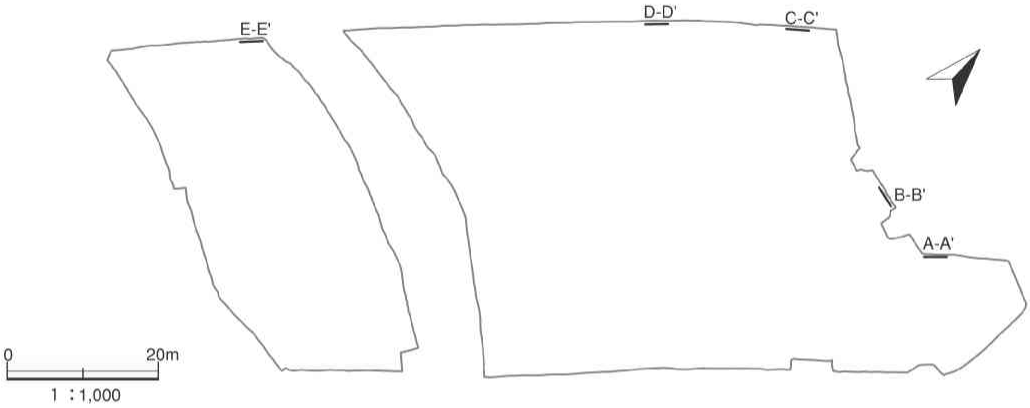
掘立柱建物は、Ｂ区南東角とＡ・Ｃ区北西角を結ぶ遺跡の中央対角線上に多く検出されている。主軸方向はほぼ南北軸に沿うＮ-10°-Ｅ、Ｎ-20°-Ｅと、ほぼ東西軸に沿うＮ-75°-Ｅの傾きの３種に大別される。

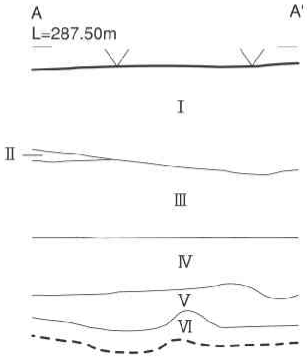
溝は、標高の低いＡ区東側に多く分布する。Ｄ区西側・Ｃ区北側に若干見られる溝も含め、ほとんどの溝がＮ-20°-ＥまたはＮ-60°-Ｅの傾きである。掘立柱建物と関連する構築物であることを推測させる。恐らく、掘立柱建物群と同一時期に構築されたものであろう。

井戸は、溝と同様に標高の低い調査区の東側に多く分布する。掘立柱建物群の間に構築されており、重複することがないことから、これも掘立柱建物群と同一時期に構築されたものと推測される。

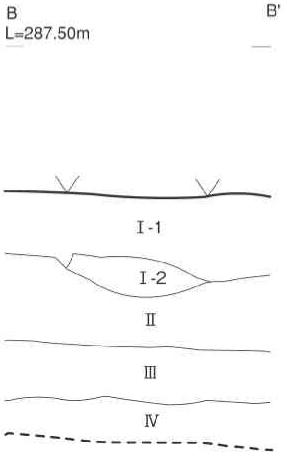
（2）遺物の分布

遺物は、整理箱で10箱出土している。縄文時代と中世・近世のものが主で、遺跡全体に散在するが密度は低い。最も点数が多かったのは縄文時代の遺物で、縄文土器・石器・石製品が出土している。ただし、覆土上層から出土したものも多く、遺構の所属時期とは断定しがたいケースが多かった。

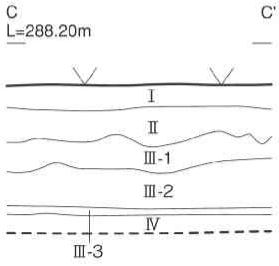




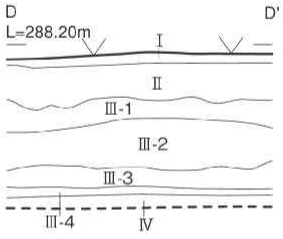
Ⅰ 10YR2/3黒褐色シルトしまり中程度。粘性中程度。小石(Φ３mm程度)を含む。
Ⅱ 10YR2/2黒褐色シルト しまり中程度。粘性やや強い。10YR3/4暗褐色シルト粒含む。
Ⅲ 10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルト しまりやや弱い。粘性中程度。Ⅰ-2層土がブロック状に入る。礫(Φ15cm程度)を含む。
Ⅳ 10YR2/2黒褐色シルト しまり強い。粘性やや強い。Ⅱ層土粒を若干含む。
Ⅴ 10YR3/4暗褐色あら砂 しまり強い。粘性やや弱い。
Ⅵ 10YR3/4暗褐色粘土 しまり強い。粘性強い。



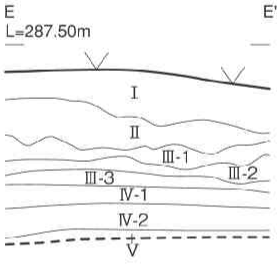
Ⅰ-1 10YR2/3黒褐色シルト しまり、粘性中程度。小石を含む。
Ⅰ-2 10YR2/3黒褐色砂 しまり強い。粘性弱い。
Ⅱ 10YR2/2 黒褐色シルト しまり中程度。粘性やや強い。10YR3/4暗褐色シルト粒含む。
Ⅲ 10YR3/4暗褐色あら砂 しまり強い。粘性やや弱い。
Ⅳ 10YR3/2黒褐色粘土



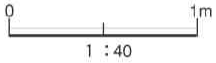
Ⅰ 10YR2/2黒褐色シルト しまり中。粘性中。植物根含む。
Ⅱ 10YR1.7/1黒色シルト しまり強い。粘性やや強い。
Ⅲ-1 10YR3/3暗褐色砂質シルト しまり強い。粘性弱い。風化礫少量含む。
Ⅲ-2 10YR3/4暗褐色砂まじりシルト しまりやや強い。粘性弱い。
Ⅲ-3 10YR3/3暗褐色砂 しまり中。粘性弱い。
Ⅳ 10YR2/1黒色粘質シルト しまり中。粘性やや強い。



Ⅰ 10YR3/1黒褐色砂 しまり強い。粘性弱い。(造成土)
Ⅱ 10YR2/1黒色シルト しまり強い。粘性中。
Ⅲ-1 10YR4/3にぶい黄褐色風化礫粒 しまり強い。粘性弱い。
Ⅲ-2 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト しまりやや強い。粘性弱い。
Ⅲ-3 10YR4/3にぶい黄褐色砂 しまりやや強い。粘性弱い。
Ⅲ-4 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト しまり強い。粘性弱い(荒い)。
Ⅳ 10YR1.7/1 黒色粘質シルト しまり強い。粘性やや強い。



Ⅰ 10YR2/2黒褐色シルト しまり非常に強い。粘性中。
Ⅱ 10YR2/1黒色シルト しまり強い。粘性中。
Ⅲ-1 10YR2/3黒褐色シルト しまり強い。粘性中。風化礫(Φ２～３cm)を含む。
Ⅲ-2 10YR3/3暗褐色砂まじりシルト しまり中。粘性やや強い。
Ⅲ-3 10YR3/3暗褐色砂 しまり中。粘性弱。
Ⅳ-1 10YR1.7/1黒色粘質シルト しまり強い。粘性やや強い。
Ⅳ-2 10YR2/1黒色砂まじり粘質シルト しまり強い。粘性強い。
Ⅴ 10YR1.7/1黒色粘土 しまり強い。粘性強い。



第４図　天矢場遺跡層序

Ⅲ　検出された遺構

今回の調査で検出された遺構は、縄文時代の陥穴、中世、近世の掘立柱建物、井戸、土坑、溝、柱穴などである。その分布は、調査区全体に散在しているようであるが、特に遺構が密集するのはＡ・Ｃ区の中央からやや北側の区域である。一方、Ｂ・Ｄ区の南西部・Ａ区の北東角およびＣ区北西角は遺構がやや希薄である。また、Ｂ区およびＤ区の一部では、通学用道路敷設に伴う攪乱が見られ、遺構が完全に失われていた。以下に主な遺構の概略を述べる。

1　陥　　穴

今回の調査で検出された陥穴は４基である。全てＢ区の南東に分布し、東西方向に３～3.5mの間隔を置き、ほぼ直線状に配置される。平面プランは楕円形を呈し、深さは後世に削平を受けたと考えられ、約30～70cmと浅い。遺物の出土は無いが縄文時代の所産と考えられる。

ＳＫ７陥穴（第21図）

Ｂ区の69-32Ｇで検出された。平面形は長径2.2m、短径1.0mを測る楕円形を呈する。確認面からの深さは45cmを測り、断面形は開口部より底面が広くなるフラスコ状の形態となる。底面中央及び西寄りに４ヶ所の窪みが検出された。覆土は２層に分かれるが、概ね黒色砂混じりシルトとなる。

ＳＫ８陥穴（第21図）

Ｂ区69-31Ｇで検出された。平面形は長径2.0m、短径1.0mを測る楕円形を呈する。確認面からの深さは70cmを測り、断面形は開口部より底面が広くなるフラスコ状の形態となる。底面の中央西寄りに逆茂木の跡と考えられる径40cm、深さ30cmを測る穴が検出された。覆土は２層に分かれるが、概ね黒色砂混じりシルトとなる。

ＳＫ11陥穴（第21図）

Ｂ区69-31Ｇで検出された。平面形は長径1.9m、短径1.0mを測る楕円形を呈する。確認面からの深さは35cmを測り、断面形は底面が弧状で、壁が緩やかに立ち上がるレンズ状となる。覆土は２層に分かれるが、概ね黒色砂混じりシルトとなり、１層目がかたくしまる。

ＳＫ98陥穴（第21図）

Ｂ区69-31Ｇで、ＳＥ９井戸の精査途中で検出された。南側をＳＥ９井戸に切られる。平面形は、長辺2.0m、短辺約1.1mを測る不整形と考えられる。断面形は、底面が緩やかに弧を描き、東壁は緩やかに立ちあがり、西壁はフラスコ状になる。

2　掘立柱建物

掘立柱建物は、Ａ・Ｃ区に16棟、Ｂ・Ｄ区に２棟の合計18棟検出された。調査終了後に図上で推定したものが大半を占め、調査中に確認できたのはＳＢ99・100・1500の３棟のみであった。遺物の出土は無いが、柱間の距離や構造、柱穴の規模などから中世や近世の所産と考えられる。

ＳＢ99掘立柱建物（第21図）

Ｂ区北側68-32Ｇで検出された。柱穴は６基確認できた。北西隅と北東隅の柱穴は検出されなかったが、梁行１間、桁行３間の東西棟の建物と考えられる。主軸方向はＮ-80°-Ｗである。建物の規模は東西桁行6.5m、南北梁行約4.1mを測り、面積は26.65m²となる。柱間距離は南側桁行が西から2.1m、2.3m、2.1mで北側桁行は中柱距離で2.3mを測る。掘り方の平面形は20～26×17～23cmを測る楕円形や隅丸方形を呈し、深さは10～16cmである。覆土は黒褐色のシルトで、小礫を混入する。

ＳＢ100掘立柱建物（第22図）

Ｂ区中央69-32Ｇ、ＳＢ99の南側で検出された。柱穴は８基確認できた。東側の中柱穴は検出されなかったが、梁行２間、桁行２間で中央にも柱を持つ総柱の建物と考えられる。主軸方向はＮ-18°-Ｅとなる。建物の規模は梁行が3.3m、桁行は約3.3mを測り、面積は11.88m²となる。柱間距離は南側桁行が西から1.8m、1.8mで北側桁行は1.7m、1.7mとなり、西側梁行は南から1.7m、1.4mを測る。掘り方の平面形は25～55×25～40cmを測る円形や楕円形を呈し、深さは16～33cmである。覆土は黒褐色のシルトとなる。

ＳＢ1500掘立柱建物（第22図）

Ｃ区西端の中央63-31Ｇで検出された。柱穴は７基確認できた。北西隅の柱穴は、調査区外で検出できなかった。梁行１間、桁行３間の南北棟の建物である。主軸方向はＮ-14°-Ｅとなる。建物の規模は梁行が3.4m、桁行は6.3mを測り、面積21.42㎡となる。柱間距離は南側梁行が3.4m、西側桁行が南から2.0m、2.5m、東側桁行は南から1.9m、2.4m、2.0mを測る。掘り方の平面形は30～40×20～34cmを測る円形を呈し、深さ５～32cmである。覆土は、１層と２層の堆積がみられ、１層は黒色シルトで、２層は黒色シルトに黒褐色砂混じりシルトが混入する。

ＳＢ1777掘立柱建物（第23図）

Ｃ区の西隅66-33Ｇで検出された梁行１間、桁行３間の東西棟の建物で、北側に廂を有すると考えられる。柱穴は11基確認できた。主軸方向はＮ-81°-Ｗとなる。建物の規模は、梁行が1.6m、桁行が5.9mを測り、面積は9.44㎡となる。また、廂を含む面積は13.10㎡である。柱間距離は、梁行が東西ともに南から1.6m、0.6m、南側桁行は西から1.8m、1.9m、2.2mで、北側桁行は西から1.7m、4.4mで、廂は西から1.9m、4.2mを測る。掘り方の平面形は20～53×17～40cmの円形や楕円形を呈し、深さは９～25cmである。

ＳＢ1781掘立柱建物（第23図）

Ａ区南西の67-30Ｇで検出された梁行１間、桁行２間の南北棟の建物で、西側に廂を有すると考えられる。柱穴は８基確認できた。主軸方向はＮ-５°-Ｅとなる。建物の規模は梁行が1.8m、桁行は5.7mを測り、面積は10.26㎡となる。廂を含む面積は15.39㎡である。柱間距離は、北側梁行は西から0.9m、1.8m、東側桁行北から2.4m、3.3mを測る。掘り方の平面形は24～32×24～32cmの円形や楕円形を呈し、深さは17～37cmである。

ＳＢ1782掘立柱建物（第24図）

Ａ・Ｃ調査区の南西部66-31Ｇで検出された。ＳＢ1781の北西側に位置する。梁行１間、桁行３間の南北棟の建物である。柱穴は７基確認できた。主軸方向はＮ-11°-Ｅとなる。建物の規模は、梁行が2.7m、桁行が6.5mを測り、面積17.55㎡となる。柱間距離は、西側の梁行が2.7m、東側が2.6m、南側桁行は西から2.0m、3.2m、1.3mを測る。掘り方の平面形は22～90×27～67cmの円形や不整形を呈し、深さは15～35cmである。

ＳＢ1783掘立柱建物（第24図）

Ｃ区南東側中央の65-30ＧでＡ・Ｃ区に渡って検出され、東側４～５mの位置にＳＢ1788・1789が位置している。梁行２間、桁行３間の南北棟の建物である。柱穴は７基確認された。近世の水路のため、北西隅と東側の中柱は削平されたと考えられる。また、南側梁行の中柱は検出されなかった。主軸方向はＮ-12°-Ｅとなる。建物の規模は、梁行3.6m、桁行約6.6mを測り、面積23.76㎡となる。柱間距離は、梁行が約1.6～1.7m、桁行が約2.1～2.2mと考えられる。掘り方の平面形は、30～45×28～32cmの円形や楕円形を呈し、深さ６～38cmである。

ＳＢ1784掘立柱建物（第25図）

Ａ区やや南側66-29Ｇで検出された。北側にＳＢ1785、東側にＳＢ1787が隣接する。梁行１間、桁行３間の南北棟の建物で西側に廂をもつ。柱穴は12基検出された。主軸方向はＮ-27°-Ｅとなる。建物の規模は、梁行が3.8m、桁行は6.5mを測り、面積は24.32㎡となる。また、廂を含む面積は30.08㎡である。柱間距離は、北側梁行で3.8m、西側桁行は北側から2.1m、2.2m、2.1mを測る。廂の柱間距離は、建物から0.9m離れ、北側から2.1m、2.3m、2.0mを測る。掘り方の平面形は21～33×18～30cmの円形を呈し、深さは７～38cmとなる。

ＳＢ1785掘立柱建物（第25図）

Ａ区の67-29Ｇで検出された。南側にＳＢ1784が隣接する。梁行２間、桁行３間の南北棟の建物と考えられる。柱穴は８基確認された。但し、東西の中柱はＳＫ312土坑とＳＫ522土坑に削平されたとも考えられる。主軸方向はＮ-19°-Ｅとなる。建物の規模は、梁行3.7m、桁行は約6.9mを測り、面積は25.53㎡である。柱間距離は、梁行が北側で東から1.9m、1.8mで、南側は東から1.8m、1.9mを測る。掘り方の平面形は17～42×14～30cmの円形または楕円形を呈し、深さは８～26cmとなる。

ＳＢ1786掘立柱建物（第26図）

Ａ区南東隅67-29Ｇで検出され、北側にＳＢ1787が一部重複する。梁行２間、桁行３間の南北棟の建物である。柱穴は７基確認された。南西の隅柱が水路で切られ、東側の中柱穴はＳＫ439に、南側梁行の中柱穴、南東隅柱は近世の溝に削平されたと考えられる。主軸方向はＮ-40°-Ｅとなる。建物の規模は梁行3.2m、桁行6.7mを測り、面積は21.44㎡である。柱間距離は、北側の梁行

が西から1.5m、1.7m、桁行は東側で北から2.7m、2.5m、1.5mを測る。掘り方の平面形は20～55×18～26cmの円形や隅丸方形を呈し、深さは12～21cmとなる。

ＳＢ1788掘立柱建物（第26図）

Ａ区西側中央64-29Ｇで検出された。北側でＳＢ1789と一部重複する。梁行１間、桁行３間の南北棟の建物である。柱穴は７基確認された。主軸方向はＮ-28°-Ｅとなる。建物の規模は梁行2.6m、桁行5.1mを測り、面積は13.26㎡である。柱間距離は梁行が2.6m、桁行は、西側が北から1.7m、1.9m、1.5mを測る。掘り方の平面形は16～32×16～25cmの円形や楕円形を呈し、深さ６～18cmとなる。

ＳＢ1787掘立柱建物（第27図）

Ａ区南東隅66-28Ｇで検出され、南側にＳＢ1786が一部重複する。梁行２間、桁行６間の南北棟の建物で、西側に廂を有すると考えられる。柱穴は20基確認された。南側梁行の中柱穴は検出されず、南東隅柱の位置は調査区外となる。主軸方向はＮ-11°-Ｅとなる。建物の規模は梁行4.7m、桁行13.2mを測り、面積62.04㎡で、廂を含む面積は69.84㎡である。柱間距離は、北側梁行が西から0.6m、2.4m、2.3m、西側桁行が、南から2.4m、2.5m、2.6m、2.4m、2.4m、0.9mを測る。廂の柱間距離も、桁行の柱間距離とほぼ同じである。掘り方の平面形は16～48×10～36cmの円形や楕円形を呈し、深さ８～41cmである。

ＳＢ1789掘立柱建物（第28図）

Ａ区西側中央の64-29Ｇで検出された。南側でＳＢ1788と一部重複する。梁行１間、桁行３間の南北棟の建物と考えられる。柱穴は７基確認されたが、北西隅柱は検出されなかった。主軸方向は、Ｎ-20°-Ｅとなる。建物の規模は、梁行3.4m、桁行5.2mを測り、面積17.68㎡である。柱間距離は、南側梁行が3.4mで、東側桁行が北から1.6m、1.8m、1.8mを測る。掘り方の平面形は、22～37×10～26cmの円形か楕円形を呈し、深さ８～31cmである。

ＳＢ1791掘立柱建物（第28図）

Ａ区中央西寄りの64-28Ｇで検出された。西側にＳＢ1792が隣接する。梁行２間、桁行３間の南北棟の建物と考えられるが、北西の隅柱と南側梁行の中柱は検出されなかった。西側に廂を有する。主軸方向はＮ-26°-Ｅとなる。

建物の規模は梁行2.4m、桁行6.1mを測り、面積14.64㎡で、廂を含む面積は21.96㎡である。柱間距離は西側桁行が北から1.4m、2.7m、2.0mを測る。梁行は北側の隅柱及び南側の中柱が検出されず不明である。掘り方の平面形は26～52×26～42cmの円形か楕円形を呈し、深さは19～40cmである。

ＳＢ1790掘立柱建物（第29図）

Ａ区西側中央付近の64-29Ｇで検出され、ＳＢ1792と重複する。梁行２間、桁行３間の南北棟の建物である。柱穴は10基確認された。主軸方向はＮ-19°-Ｅとなる。建物の規模は梁行4.2m、桁行8.4mを測り、面積35.28㎡である。柱間距離は、北側梁行が西から1.8m、2.4m、南側梁行は西から2.0m、2.1mで、西側桁行は南から2.5m、3.1m、2.6mで、東側桁行は南から2.6m、3.1m、2.6mを測る。掘り方の平面形は24～70×23～50cmの円形または楕円形を呈し、深さは７～43cmである。

ＳＢ1792掘立柱建物（第30図）

Ａ区西側中央付近64-29Ｇで検出され、ＳＢ1790と重複する。梁行１間、桁行３間の東西棟の建物である。柱穴は９基確認された。主軸方向はＮ-76°-Ｗとなる。建物の規模は梁行7.2m、桁行4.0mを測り、面積は28.80㎡である。柱間距離は、西側梁行が4.0m、東側梁行は4.1m、北側桁行が西から2.4m、2.7m、1.9m、南側桁行は西から2.6m、2.1m、2.5mを測る。掘り方の平面形は25～38×25～38cmの円形を呈し、深さ６～44cmを測る。

ＳＢ1794掘立柱建物（第30図）

ＳＢ1794はＡ区北東側の64-26Ｇで検出された。梁行１間、桁行２間の南北棟の建物である。柱穴は６基確認された。主軸方向はＮ-21°-Ｅとなる。建物の規模は梁行2.5m、桁行4.1mを測り、面積10.25㎡である。柱間距離は南側と北側の梁行ともに2.5mで、桁行は東側が北から1.9m、2.1m、西側が北から2.1m、2.0mを測る。掘り方の平面形は29～95×24～95cmの円形か楕円形を呈し、深さ19～28cmである。

ＳＰ1265柱穴（第30図）

ＳＰ1265はＤ区北西隅で検出された柱穴である。柱材が出土し、掘立柱建物に付随する柱穴と考えられるが、建物を構成する他の柱穴は検出されなかった。掘り方の平面形は長径50cm、短径45cmを測る楕円形で、深さ40cmである。柱痕跡は径20cmのほぼ円形を呈する。覆土は、柱痕の覆土と埋土の２層で黒色粘質シルトとなる

が、２層には風化礫が混入する。

ＳＢ1793掘立柱建物（第31図）

Ａ区北西側の63-28Ｇで、Ａ・Ｃ区にわたって検出された。南側にＳＢ1790～1792が隣接する。梁行２間、桁行３間の東西棟の建物で、北、西、南の３方に廂を有する。今回の調査で検出された建物で最大のものである。主軸方向はＮ-77-°Ｗとなる。建物の規模は梁行5.4m、桁行8.6mを測り、面積46.44㎡で、廂を含む面積は73.24㎡である。柱穴は22基確認された。また、間仕切り柱と考えられる柱穴がＳＫ686とＳＫ632の間に検出された。柱間距離は、廂部で狭いところで0.8m、広いところで3.0mを測り、建物部では2.4～3.0mの範疇となる。建物部と廂部の柱穴距離は約1.0～1.2mを測る。

掘り方の平面形は16～105×14～97cmの円形や不整形などを呈し、深さは10～42cmである。

3　井　　戸

井戸はＡ区で５基、Ｂ区で１基の合計６基確認された。全て素掘りの井戸で、土層断面からは、覆土は自然堆積と一気に埋土されたと考えられるものがみられた。時期は、掘立柱建物と同時期の中世、近世と推測される。

ＳＥ９井戸（第32図）

Ｂ区69-31Ｇで検出された、北側で縄文時代のＳＫ98陥穴を切る。平面形は長径1.7m、短径1.6mを測る不整形を呈する。確認面からの深さは0.9mを測る。断面形は開口部が広く、掘り方途中に段を形成して斜めに掘り込まれ、底が狭くなる台形状の形態で、底面が平坦な素掘りの井戸である。覆土は自然堆積で、３層に分かれ、１層目に黒色シルト、２・３層に黒色粘質シルトが堆積し、１・２層には小礫や拳大の礫が混入する。出土遺物は無い。

ＳＥ151井戸（第32図）

Ａ区南西側66-30Ｇで検出された。東側で、ＳＫ206を切る。平面形は長径2.0m、短径1.8mを測る円形を呈する。確認面からの深さは0.8mを測る。断面形は、開口部が広く、底が狭くなる台形状の形態で、底面は平坦となる。素掘りの井戸で、底面に10～20cmの平らな形態の礫を敷いている。覆土は、１層で、黒色砂混じりシルトに茶褐色シルトや炭化物が混入し、一気に埋土されたと考えられる。出土遺物は、敷石や表面に媒が付着した石製品が出土した。

ＳＥ420井戸（第32図）

Ａ区南東側67-29ＧでＳＢ1786の西側に検出された。平面形は長径1.3m、短径1.1mを測る円形を呈する。素掘りの井戸で、確認面からの深さは0.7mを測る。断面形は、開口部が広く、底面がやや狭くなる台形状の形態となるが、壁面は急角度で掘り込まれる。底面は凹凸が認められた。覆土は、３層に分かれ１層目は一気に埋土された様相をしめす黒色シルトが堆積し、２層目は黒色粘質シルトがブロック状に堆積し、３層目は自然堆積と考えられる黒色砂質シルトとなる。出土遺物は無い。

ＳＥ935井戸（第32図）

Ａ区西側の中央63-27Ｇで検出された。平面形は長径1.9m、短径1.3mを測る楕円形を呈する。確認面からの深さは0.7mを測る。断面形は、開口部が広く壁面は緩やかに立ち上がり、底面が弧を描くレンズ状の形態となる。覆土は黒色シルトが３層に堆積し、３層目には、木片を混入する。覆土から流れ込みと考えられる縄文土器が出土した。

ＳＥ1110井戸（第32図）

Ａ区南側の中央65-27Ｇで検出された。長径1.7m、短径1.6mを測る隅丸方形を呈する。北側に溝状の掘り込みが認められたが詳細は不明。確認面からの深さは0.9mを測る。断面形は開口部が広く、掘り方途中に段を形成して斜めに掘りこまれ、底面が弧を描く形態となる。素掘りの井戸と考えられるが、壁面に崩れ防止の為とも思われる平らな礫が検出された。覆土は、自然堆積で、４層に分かれる。１層目は黒色シルトが薄く堆積し、２層目は黒褐色砂混じりシルトに風化礫が混入している。３層と４層は黒色シルトであるが、４層目には木片や植物が多く混入する。出土遺物は崩れ防止の礫のみである。

ＳＥ1023井戸（第32図）

Ａ区北東側64-26ＧでＳＢ1794の東側に検出された。平面形は、長径1.7m、短径1.2mを測る不整形を呈する。確認面からの深さは1.0mを測る素掘りの井戸である。掘り方は南側が大きく掘られ、段が付く。断面形は開口部が広く掘り方途中に段を形成してほぼ直角に掘りこまれ、底面は平坦に近い台形状の形態となる。覆土は黒色シルトが２層に堆積し、１層目に砂が混入する。２層目は一気に埋土された様相を示すが、１層目は自然堆積の可能性が考えられる。覆土から須恵器のこね鉢と礫が出

土した。

4　土坑、性格不明遺構

今回の調査では100基を超える土坑、性格不明遺構が検出された。大半がＡ・Ｃ区に分布し、西側に集中する傾向がみられた。円形や楕円形の平面プランを呈した比較的浅いものが多い。時期は、出土遺物などから中世、近世と考えられる。以下に主な土坑、性格不明遺構の概略を述べる。

ＳＫ12土坑（第33図）

Ｂ区69-31Ｇで検出された。平面形は長径0.9m、短径0.7mを測る、ほぼ円形を呈する。確認面からの深さは10cmを測り、断面形は底面が弧を描き、壁が緩やかに立ち上がるレンズ状の形態となる。覆土は１層で、黒色砂混じりシルトに暗褐色シルトが混じり、風化礫を多く含む。流れ込みと考えられる縄文土器片が出土している。

ＳＫ34土坑（第33図）

Ｂ区68-31Ｇで検出された。東側が調査区外となる。平面形は長径3.5m以上、短径1.5mを測る不整形を呈する。確認面からの深さは30cmを測り、断面形は底面が平坦となり、壁面が斜めに立ち上がる台形状の形態となる。覆土は３層で、１・２層は黒色の砂混じりシルトで、３層は黒褐色砂質シルトで薄く堆積する。

ＳＫ395土坑（第33図）

Ａ区66-28Ｇで検出された。平面形は長径1.5m、短径1.0mを測り、東側が張り出す不整形を呈する。確認面からの深さは20cmを測り、断面形は底面が平坦で、壁面が斜めに立ち上がる台形状の形態となるが、東側が約10cm深く掘り下げられている。覆土は２層で、１層目は黒色の砂混じりシルトで、２層目は黒褐色砂となる。覆土から円盤状石製品が出土した。

ＳＫ439土坑（第33図）

Ａ区67-29Ｇで検出された。長径1.4m、短径0.6mを測る楕円形を呈する。確認面からの深さは20cmを測り、断面形は底面が平坦で、壁面が斜めに立ち上がる台形状の形態となる。覆土は２層で、１層目が黒色砂混じりシルトで、２層目は黒褐色砂混じり粘質シルトになる。

ＳＫ471土坑（第33図）

Ａ区68-29Ｇで検出された。南側が調査区外になる。東西1.4m、南北1.3m以上を測る楕円形になると考えられる。確認面からの深さは50cmを測り、断面形は底面が平坦で、壁面が斜めに立ち上がる台形状の形態となる。覆土は２層で、１層目が黒色砂混じりシルトで２層目は黒褐色砂質シルトになる。

ＳＫ433・530・531土坑（第33図）

Ａ区67-29Ｇで３基が重複して検出された。ＳＫ531をＳＫ433と530が切る。

ＳＫ433は、長辺2.3m、短辺1.0mを測る不整形を呈する。確認面からの深さは30cmを測り、断面形は底面が弧を描き、南壁が急角度で、北壁が緩やかに立ち上がる台形状の形態となる。覆土は１層で、黒色砂混じりシルトに風化礫を混入する。流れ込みと考えられる縄文土器片と剥片が出土している。

ＳＫ530は、長辺2.0m、短辺0.7mを測る隅丸長方形を呈する。確認面からの深さは20cmを測り、断面形は、底面が狭く、壁面が斜めに立ち上がり逆三角形の形態となる。覆土は１層で、黒色シルトに風化礫を混入する。

ＳＫ531は長辺2.4m、短辺2.3mを測る不整形を呈する。確認面からの深さは30cmを測り、断面形は底面が平坦で、壁面が緩やかに立ち上がる台形状の形態となる。覆土は２層で、１層目が黒褐色砂で、２層目は黒褐色の砂混じり粘土となる。

ＳＫ515・516土坑（第34図）

Ａ区65-28・29Ｇで２基が重複して検出された。ＳＫ515がＳＫ516を切る。

ＳＫ515は長径2.8m、短径2.1mを測る楕円形を呈する。確認面からの深さは20cmを測り、断面形はレンズ状の形態となる。覆土は３層で、１層目は炭化物を混入する黒色砂質シルトで、２層目は１層の土を含む暗褐色砂、３層目は炭化物を混入する黒色シルトである。

ＳＫ516は南北方向が3.1m、東西方向が2.2m以上を測る不整形を呈し、東側をＳＫ515に切られる。確認面からの深さは90cmを測り、断面形は壁面が急角度で掘り込まれ、掘り方途中で段を形成し、底面が平坦となる台形状の形態となる。覆土は７層で、１・２層は黒色砂混じりシルトで、風化礫や黒褐色の砂を混入する。３・４層は暗褐色砂質シルトで、礫や暗褐色砂質シルトを混入する。５層は風化礫を多く混入する暗褐色砂で、６層も風化礫を多く混入する黒色シルト、７層は風化礫粒を多く含む黒褐色シルトになる。

ＳＫ522土坑（第34図）

Ａ区65-29Ｇで検出された。長径2.0m、短径0.6mを測

る隅丸長方形を呈する。確認面からの深さは50cmを測り、断面形は壁が急角度で掘り込まれ、底面が平坦になる台形状の形態となる。覆土は１層で、黒色砂混じりシルトで、小礫や風化礫を多く混入する。

ＳＫ635土坑（第34図）

Ａ区64-28Ｇで検出された。北側でＳＫ632を切る。長径1.9m、短径0.9mを測る楕円形を呈する。確認面からの深さは25～35cmを測る。断面形は、壁面は直角に掘り込まれ、底面は周縁部が深く、中央部が浅く掘られる凸状の形態となる。覆土は１層で、黒色シルトに風化礫が混入する。

ＳＫ1088土坑（第34図）

Ａ区65-27Ｇで検出された。長径2.3m、短径1.0mを測る楕円形を呈する。確認面からの深さは10～25cmを測る。断面形は、底面に段がつき北側が浅く、南側が深く掘られ、壁は緩やかに立ち上がる形態となる。覆土は１層で、黒色シルトである。

ＳＫ1089土坑（第34図）

Ａ区65-27Ｇで検出された。長径1.5m、短径0.6mを測る楕円形を呈する。確認面からの深さは50cmを測る。断面形は、壁面は急角度で掘りこまれ、底面は北側が深く、南側が浅くなる形態となる。覆土は２層に分かれ、１層目は風化礫を混入する黒色シルトで、２層目は黒褐色シルトになる。

ＳＫ1120土坑（第35図）

Ａ区66-28Ｇで検出された。長径1.0m、短径0.9mを測る円形を呈する。確認面からの深さは35cmを測る。断面形は底面が平坦で、壁面が急角度で掘りこまれる台形状の形態となる。覆土は２層で、１層目が風化礫粒を混入する黒色シルトで厚く堆積し、２層目は黒褐色砂で薄く堆積する。

ＳＫ1433土坑（第35図）

Ｃ区65-31Ｇで検出された。径1.1mを測る円形を呈する。確認面からの深さは80cmを測り、断面形は底面が平坦で、壁面が直角に掘りこまれる方形状の形態となる。覆土は３層で、１・２層は黒色シルトで、２層目に暗褐色粘土をブロック状に混入する。３層目は暗褐色砂混じりシルトになる。覆土から流れ込みと考えられる縄文土器片が出土した。

ＳＫ1446土坑（第35図）

Ｃ区65-31Ｇで検出された。長径0.9m、短径0.7mを測る楕円形を呈する。確認面からの深さは15cmを測り、断面形は壁面が緩やかに掘りこまれ、底面が弧を描くレンズ状の形態となる。覆土は２層に分かれ、１層が黒色シルト、２層は黒褐色砂混じりシルトで黒色シルトを混入する。覆土から流れ込みと考えられる縄文土器片が出土した。

ＳＫ1672土坑（第35図）

Ｃ区63-29Ｇで検出された。西側を柱穴に切られる。長辺1.1m、短辺0.6mの不整形を呈する。確認面からの深さは30cmを測り、断面形は西側の壁面に段が形成され、東側の壁面は緩やかに立ち上がり底面が平坦になる形態になる。覆土は４層に分かれるが、１～３層は黒褐色シルトで、４層目が暗褐色シルトになる。覆土から流れ込みと考えられる縄文土器片が出土した。

ＳＫ1629土坑（第35図）

Ｃ区64-31Ｇで検出された。長辺1.7m、短辺0.5mを測る隅丸長方形を呈する。確認面からの深さは25cmを測り、断面形は壁面が急角度で掘りこまれ、底面は平坦となる台形状の形態となる。覆土は２層に分かれるが１層目の黒色シルトが厚く堆積し、２層目の黒褐色シルトはブロック状の堆積となる。１・２層ともに風化礫を混入する。

ＳＸ1451性格不明遺構（第35図）

Ｃ区65-31Ｇで検出された。長径1.5m、短径0.5mを測る不整形を呈する。確認面からの深さは25～30cmを測る。断面形は、壁面が緩やかに掘りこまれ、底面は中央部が浅く西側が柱穴状に、東側がレンズ状に深く掘り込まれる形態となる。覆土は３層に分かれるが、２層目の黒褐色シルトが厚く堆積し、１層目の暗褐色シルトと３層目の暗褐色砂は小ブロックで堆積する。覆土から流れ込みと考えられる縄文土器の把手が出土した。

ＳＸ588性格不明遺構（第35図）

Ａ区66-28Ｇで検出された。長径2.7m、短径2.0mを測る不整楕円形を呈する。確認面からの深さは35cmを測り、断面形は底面が平坦で、壁面が緩やかに立ち上がるレンズ状の形態となる。覆土は３層に分かれ、１層目が黒褐色砂質シルト、２層目は少量の礫を混入する黒色シルト、３層目は黒褐色砂となる。

ＳＸ1648性格不明遺構（第35図）

Ｃ区63-29Ｇで検出された。長径2.9m、短径1.9mを測る楕円形を呈する。確認面からの深さは20cmを測るが、

底面に柱穴と見られる穴が９基（ＳＰ1748他）確認された。柱穴の深さはＳＸ1648の底面から15～20cmを測り、平面形は径10～30ｃｍの円形を呈する。覆土は、ＳＸ1648は１層で風化礫を混入する黒色シルトで、柱穴の覆土は黒褐色シルトで風化礫を少量混入する。覆土から流れ込みと考えられる縄文土器片が出土した。

5　溝

溝は、大小合わせて58条確認された。その分布状況はＡ・Ｃ区に多く検出され、Ｂ・Ｄ区は希薄となる。時期は、中世以降と考えられる。以下に主な溝の概略を述べる。

ＳＤ1014溝（第36図）

Ａ区64-26Ｇで検出された。南北方向の溝で、南側が調査区外に延びる。調査区内での長さ8.3m、幅0.2～0.3mで、確認面からの深さ20cmを測る。断面形は、壁面が直角に掘りこまれ、底面が平坦となる方形状になる。覆土は１層で、黒褐色砂混じりシルトになる。覆土から流れ込みと考えられる石器が出土した。

ＳＤ1054溝（第36図）

Ａ区63･64-25ＧでＳＤ1014の北側で検出された。南北方向の溝であるが、北側で西に直角に曲り、南側では東に直角に曲る。全長12.2m、幅0.1～0.4mで、確認面からの深さ５～10cmを測る。断面形は、北側では壁面が緩やかに立ち上がり、底面が弧を描くレンズ状で、南側は壁面が急角度で立ち上がり、底面が平坦となる台形状を呈する。覆土は南北両端部では１層で、中央部は２層になり、１層目は黒色シルトに黒褐色砂質シルトが混入し、２層目は黒色シルトである。覆土から流れ込みと考えられる縄文土器と近世の磁器が出土している。

ＳＤ1090・1091溝（第37図）

ＳＤ1090と1091はＡ区65-26・27Ｇで検出され、ＳＢ1794の南側に位置する。

ＳＤ1090は65-27Ｇでは南北方向に延び、65-26Ｇで東西方向に直角に曲る溝跡である。ＳＤ1091とほぼ平行に走ると考えられる。北東側は調査区外になり、南側の端部は削平により検出されなかった。屈曲部と南北方向の一部が近世の撹乱により削平を受けている。調査区内での長さ17.0m、幅0.2～0.6mで確認面からの深さ10cmを測る。断面形は、底面が弧を描き壁面は緩やかに立ち上がるレンズ状を呈する。覆土は２層に分かれ、１層目は黒色シルトで、２層目は暗褐色砂である。覆土から流れ込みと考えられる石器が出土した。

ＳＤ1091は、確認できたのが南北方向の一部と東西方向の一部のみだが、連続していた一連の溝と思われる。北西側と南側端部は削平により検出されなかったが、ＳＤ1090と同様に北側で直角に曲り、ＳＤ1090と平行に走ると考えられる溝である。確認された長さは南北方向が4.8m、東西方向が4.4mである。幅0.1～0.2m、確認面からの深さ７cmを測る。断面形は底面が平坦で壁面が急角度で立ち上がる台形状を呈する。覆土は１層で暗褐色砂を混入する黒色シルトである。

ＳＤ1460溝（第37図）

Ｃ区65-31Ｇで検出された南北方向の溝である。全長2.9m、幅0.2～0.7mで、確認面からの深さ６cmを測る。断面形は、底面が平坦で壁面が急角度で立ち上がる台形状を呈する。覆土は２層で、１層目は黒色シルト、２層目は地山土を混入する黒色シルトになる。覆土から流れ込みと考えられる縄文時代の土玉が出土した。

ＳＤ1676～1680・1699溝他（第38図）

Ｃ区北西側の62･63-28･29Ｇで検出された溝と土坑、柱穴の一群である。南側でＳＢ1793の柱穴をＳＤ1678・1679が切る。溝内にも柱穴が確認されたが、検出段階では両者の土色、土質ともに近似することから判別できなかった。

柱穴群は20～80×20～60cmを測る円形や楕円形を呈し、確認面からの深さ10～30cmを測る。

溝はＳＤ1676～1680が南北方向の溝で、ほぼ等間隔に並ぶ。確認面からの深さは５～10cmを測る。長さは、短いもので3.8m、長いものは10.4mであるが、深さが浅いことから、削平を受けている可能性が推測される。主軸方向はＳＤ1676・1677がＮ-16°-Ｅ、ＳＤ1678～1680はＮ-17°-Ｅとなる。

掘立柱建物ＳＢ100・1785・1789・1790・1794の主軸方向はＮ-18°～21°-Ｅの範疇に収まり、溝の主軸方向とほぼ一致すること、溝の周辺及び底面に柱穴の存在が確認された。このことから、柱穴の並び等からは建物を構成できなかったが、掘立柱建物あるいは、建物に伴う施設の存在が考えられる。

溝、柱穴の覆土は共に１層で、溝は風化礫を混入する黒褐色シルトで、柱穴は黒褐色、黒色のシルトや黒色砂質シルトである。

Ⅳ　出土した遺物

1　縄文時代の遺物

縄文時代の遺物は、縄文土器、土製品、石器・石製品などが出土した。土器は全体的に遺存状態が悪く、状態のよいものを抽出した。

縄文土器21点、土製品１点、石器・石製品11点を抽出して図示した。時期が判別できる遺物から、縄文時代中期中葉のものが中心であると考えられるが、早期・前期・後期のものも少しずつ出土している。

（１）縄文土器・土製品（第39図１～22）

１は、縄文時代早期後葉の条痕縄文土器の範疇に含まれる。頸部から緩やかに外反する形で、部位は口縁部に近いと思われる。細片であることから意匠の全体像を把握することは困難であるが、外面の文様は棒状工具で施文された３本１単位の沈線文による垂直な区画文の間に、同じく３本１単位の斜め沈線文をＸ字状に交差させるように配置している。内面にも、わずかに単節ＲＬの縄文を施文している。内・外面ともに地文を貝殻腹縁による条痕が描出している。黒褐色を呈する胎土中に植物繊維を多く含み、細砂も少量混じる。器厚は約８㎜である。

２・３は、ともに縄文時代前期前半の羽状縄文土器群の範疇に含まれる。２は口縁部片で、３の部位は細片のため不明である。両者とも異原体を結束させ結束部分を強調する傾向が見られる。２の羽状縄文は約２㎝幅の施文単位で、等間隔に３段以上にわたって施文していることが分かる。３は観察できる事項が限られるが、約１㎝幅の施文単位で、結束部のみを強調する。２は褐灰色、３は黒褐色の胎土色を呈するが、胎土に細砂・石英粒とともに繊維を混入させることで共通する。器厚は２が7.6㎜、３が６㎜である。

４～21は、縄文時代中期中葉の土器群の範疇に含まれる。

４は本遺跡で唯一完形に復元することができたもので、器形が鉢を示す。口径・底径比は２：１、横・縦比は７：４ほどである。底部の厚みが１㎝以上あるのに対し、体部の厚みは５～６㎜程である。器形は、体部から口縁部にかけて内湾するようになり、口唇部の内側で粘土を貼り付けて、屈曲するような形である。

文様は、体部には施されず、口縁部のみを装飾する。口縁部の内と外に粘土紐を貼付け、口唇部に外から器の中心に向かって棒状工具で刺突文を施している。体部は内・外面ともナデ調整が施されている。底部には明瞭な網代痕が残る。胎土は浅黄橙色で、細砂を少量混入している。

５～９は、すべてＢ区ＳＸ76（倒木痕）から出土したものである。この遺構からは、他にも遺物が出土しているが、どれも遺存状態が悪く磨耗が激しいため、特徴がわかりやすいもののみを限定して示した。

５は深鉢の口縁部付近と思われる。二本の粘土紐を貼り付けることで、横位の渦巻き文を描き出している。胎土はにぶい黄褐色を呈し、細砂・石英等を混入する。器厚は7.5㎜程である。

６も深鉢の口縁部付近と思われる。単節ＬＲ縄文を縦回転させて地文をつけた後に、粘土紐を貼り付けて装飾を施す。口唇部付近にはこれに沿うように二本の平行線を、また破片右下部分にはＳ字状文または渦巻状文を描いている。胎土は褐灰色を呈し、粗砂を多く混入する。器厚は8.6㎜程である。

７はキャリパー型深鉢の口縁部付近と思われる。単節ＲＬ縄文を縦回転または横回転させて地文をつけた後に、粘土紐を貼り付けて装飾を施す。隆線は粘土を貼り付けた後、上面と側面に棒状工具で渦巻状の沈線を描いている。粘土紐を二本貼付けていた痕跡があるが、剥落したと思われる。胎土は褐灰色を呈し、粗砂を多く混入する。器厚は９㎜程である。

８は深鉢の体部である。単節ＬＲ縄文を縦位回転させて地文をつけた後に、粘土紐を貼り付けて渦巻き文様の装飾を施す。胎土・施文方法が５と共通することから同一個体の可能性もあるが、判然としない。器厚は９㎜程である。

９は深鉢の波状口縁の波頂部である。文様は磨耗しているため不明である。形から類推すると、口径40㎝前後

の大型の深鉢になると思われるが、器厚は７㎜程と薄い。胎土はにぶい黄橙色を呈し細砂を含むが、同遺構から出土した他の破片に比べ、胎土質が細やかで緊密である。

10は、小型深鉢の口縁部から頸部にかけての破片である。口縁は四単位の波状口縁になると思われる。口唇部には沈線が描かれ波頂部で渦巻き文となる。この沈線文も４単位になるようである。頸部から体部にかけて単節ＬＲ縄文で地文を施す。頸部には二条の平行沈線文を描いて、体部には頸部とは異なり鋭角に屈曲する二条の平行区画文が描かれている。胎土は褐灰色を呈し、細砂を混入する。器厚は4.8㎜程である。

11は器種不明の口縁部である。単節ＬＲ縄文を縦回転させて地文をつけた後に、粘土紐を貼り付けることにより、口縁部に平行になる隆線を形成する。粘土紐の接着を緊密にするため、粘土紐の上下に棒状工具で抑えた痕跡が沈線文となっている。内面はナデ調整が施されている。胎土はにぶい橙色を呈し、細砂を混入する。器厚は８㎜程である。

12～14はともに粘土紐貼付け後、粘土紐の上面と両側縁に調整を加える施文方法で共通している。器種は小形のキャリパー型を示している。12・13は口縁部、14は体部の破片である。

12は外面に単節ＲＬ縄文を縦回転させて地文を付けた後に、粘土紐を貼り付けて渦巻き沈線文などを描いている。また、口唇部には二条の平行沈線文が描かれる。内面はナデおよびケズリ調整が施されている。胎土は緻密で灰黄褐色を呈し、細砂を混入する。器厚は７～10.5㎜程である。

13は外面に単節ＲＬ縄文の地文と粘土紐貼付けによる隆線および沈線文が描かれる。なお、口唇部付近に平行に貼り付けられていた一条の粘土紐が剥落した痕跡が看取される。内面はナデ調整が施されている。胎土は褐灰色を呈し、細砂を混入する。器厚は６～10㎜程である。

14は外面に単節ＬＲ縄文の地文を施す。粘土紐を貼り付けて、平行な三条の曲線を描く。内面は摩耗が激しく、調整の詳細は不明である。胎土はやや粗雑でにぶい黄褐色を呈し、粗砂を混入する。器厚は７㎜程である。

15は器種不明の口縁部である。単節ＬＲ縄文を横回転させて地文を施す。口縁部に平行になるような沈線を描く。沈線の上に粘土紐を貼り付けることにより、同じく口縁部に平行になる隆線を構成する。内面はナデ調整が施されている。胎土はにぶい黄褐色を呈し、細砂を混入する。器厚は6.7㎜程である。

16は小型深鉢の口縁部と思われる。内外面ともナデ調整が施されている。細片であるため、地文等の文様は不明である。胎土はにぶい黄橙色を呈し、粗砂を混入する。器厚は５㎜程である。

17は深鉢の口縁部付近から剥落した装飾体の一部と思われる。渦巻き文による隆線が描かれている。胎土は緻密で、にぶい黄橙色を呈し、細砂を混入する。

18～20は深鉢の底部と思われる。

18は粘土紐積み上げ部分から剥落している。底面には粗い縄文が施文されているが、磨耗および剥落のため詳細は不明である。また、底面内側には底部と体部を接合する際の押圧指頭痕が残る。底部になる粘土盤に、粘土紐を円形にして乗せた後、底部粘土板の外縁を引き上げて接合させたことがわかる。また、体部の外面は板状工具を使用したナデ調整が施されているようである。胎土は灰黄褐色を呈し、細砂を混入する。底部の器厚は７㎜程である。

19の体部には単節ＬＲ縄文を斜回転させて地文を施し、縦位などの沈線を描出していることが分かる。底面はよく研磨されているが、それに対して内面の調整はやや不十分である。中央部が窪んでいる。胎土は緻密であり、灰黄褐色を呈する。器厚は５～７㎜程である。

20は細片であり詳細は不明であるが、内外面ともに指によるナデ調整が施されている。胎土は粗砂を含み、にぶい黄橙色を呈する。器厚は８㎜程である。

21は縄文時代後期後葉の瘤付き土器群の範疇に含まれるもので、口縁部の破片である。平行沈線が三条にわたって施文されていることがわかる。最も口縁部に近い沈線に瘤が取り付けられる。内面にはナデ調整が施される。胎土は緻密で黒褐色を呈し、細砂を混入する。器厚は５㎜程でやや薄い。

22は土製品であるが、装飾用の土玉と思われる。魚網用の土錘の可能性も否定できないが、サイズが非常に小さく、重量も軽いことから、土錘としての用を満たさないのではないかと判断した。直径３㎜程の穴は通りが良く、あらかじめ棒状のものに粘土を巻き付けて成形したと思われる。胎土は緻密で、にぶい黄橙色を呈する。

（2）石　器（第40図23～33）

石器は質の良いものがなく、未完成品や剥片がほとんどである。

23は石鎄である。陵の峰が磨耗していることから、使い込まれたことがわかる。押圧剥離を行った痕跡が先端部および左側縁にあるが、裏面は打ち欠かれている。

24は押圧剥離による二次調整の痕跡が若干見られる剥片である。

25は石鏃である。先端部および基部をともに欠いているが、全面を丁寧に調整しているので、実際に使用されたものと思われる。

26～30はともに剥片である。いずれも明確な二次調整の痕跡は見られない。しかし、27・28は石質が良好なため実際に使用された可能性はあると思われる。

31は凹石の可能性がある。上面に３つ、下面に１つの凹みがあり、所々に研磨された痕跡が見られる。

32・33は磨石である。石材は32が多孔質安山岩、33がホルンフェルスと思われる。

2　奈良・平安時代の遺物

（1）須恵器（第41図34～36）

須恵器は以下の３点のみである。

34は甕の体部である。外面にタタキ痕、内面にアテ痕が残る。

35はこね鉢の体部である。ヘラナデによる調整が施されている。底部内面には、黒色化した部分があり、よく使われたことがわかる。

36は壺の肩部と思われる。内面にカキメ調整が施され、自然釉がかかっている。外面は磨耗が激しく調整の詳細は不明である。

3　中世の遺物

（1）瓷器系陶器（第41図37～39）

瓷器系陶器は37～39の３点であるが、胎土・器厚・調整等の状態から、すべて同一個体であると判断した。内面に成形または押印時に付いたと思われる指頭痕が同様に見られることから、３点ともに甕の頸部から体部にかけての破片と思われる。外面には複数方向からナデ調整を施した痕跡が見られ、胎土には比較的大粒の白色砂粒が混入する。また、39には複線形の格子目文に８角形の菊花文を組み合わせた押印が見られる。これらの特徴は新潟県五頭山麓古窯の製品と近似するものであるが、全く同じとは断言できない。しかし、五頭山麓古窯をはじめとする常滑系陶器の系譜をたどるものであることは確かであろう。13～14世紀頃のものと思われる。

（2）かわらけ（第41図40）

かわらけは40の口縁部片１点のみである。胎土はにぶい黄橙色を呈し、内外面ともにロクロナデ調整が施されている。15世紀代のものと思われる。

（3）青　磁（第41図41）

青磁は41の１点のみで、碗の底部である。高台は削り出しによって成形されており、高台内が盛り上がる兜巾高台になっている。内外面ともにオリーブ灰色の釉がかかっているが、畳付けおよび高台内は露胎である。胎土は緻密で黄灰色を呈する。15世紀代の龍泉窯産製品と思われる。

（4）青　花（第41図42）

青花は42の１点のみで、皿の底部である。外面には高台部に圏線が描かれている。内面にも見込み部分に圏線が描かれ、その中に文様が描かれているが、細片のため文様の詳細は不明である。内外面ともにロクロナデ調整が施されたのち、透明釉がかけられるが、畳付けは露胎である。高台内に削り出し成形時の痕跡が見られる。また、高台の内側には焼成時に付着したと思われる砂が多く見られる。器厚は３　程と薄い。16世紀後半の景徳鎮窯産製品と思われる。

4　近世の遺物

近世の遺物は、磁器が43～50の８点、陶器が51～53の３点、木製品が54の１点が出土している。以下に、個々の特徴をまとめる。

（1）磁　器（第41図43～50）

43は碗の体部から底部の資料である。高台内が盛り上がり、兜巾高台となる。内外面に釉が施されるが、畳付けと高台内は露胎である。外面に文様が描かれる。17世紀中頃の肥前磁器と思われる。

44は皿の口縁部で内外面に釉が施される。内面に鎬風の文様がみられる。17世紀初めの肥前磁器と思われる。

45～49は碗の破片資料である。

45は口縁部で、内外面に釉が施され、外面に二重圏線

と草花文が描かれる。17世紀末から18世紀前半の肥前磁器と思われる。

46も碗の口縁部片で、内外面に釉が施され、内面に網目文、外面に二重網目文が描かれる。18世紀の肥前磁器と思われる。

47は碗の体部で、内外面に釉が施され、外面に文様が描かれるが詳細は不明。

48も碗の体部資料で、内外面に釉が施され、外面に草花文が描かれる。47・48ともに18世紀の肥前磁器と思われる。

49は碗の底部資料で、内外面に釉が施され、内面には貫入と文様がみられる。17世紀の肥前磁器と思われる。

50も碗の底部で、内外面に釉が施され、内外面と高台に圏線が描かれる。19世紀の肥前磁器と思われる。

（２）陶　器（第41図51～53）

51は碗の底部である。ロクロ整形で、内面に銅緑釉、外面に灰釉が施される。見込み部に重ね焼き痕が残り、高台内は露胎である。17世紀末から18世紀初めの肥前陶器とおもわれる。

52は岸窯の香炉である。小片であるが、口唇部が扁平に仕上げられていることがわかる。内外面ともに黒褐色の鉄釉が施され、口唇部にはさらに黄褐色の灰釉が施される。胎土は緻密で灰褐色を呈する。17世紀半ば～18世紀半ばにかけてのものと思われる。

53は会津本郷の擂鉢の口縁部である。口縁部は外面に張り出しを持つ形状である。内外面ともロクロナデ調整が施されるとともに、暗赤灰色の鉄釉が施される。内面には卸目が入るが、詳細は不明である。胎土は細砂を混入するが緻密で、にぶい黄橙色を呈する。18世紀代のものと思われる。

5　その他の遺物

ここでは、建物の柱と考えられる木製品と年代特定が困難な石製品を取り上げる。

（１）木製品（第42図54）

54はＤ区ＳＰ1265から出土した柱材である。マツの丸太材で、柱の根元部分のみが残る。外皮を除去し、先端部を鋭利な道具で２方向から削り出して尖らせている。また、先端から20㎝程のところにほぞのように削られた部分がある。建物を構築する際に縄を巻きつけたりしたものか、建築部材を転用したものかは定かでない。出土した柱穴と建物を構成する組み合わせは検出されないが、13世紀末～14世紀末頃のものであるという年代測定結果が得られている（第Ⅴ章自然科学分析参照）。

（２）石製品（第42図55～59）

55は石墨状石製品である。断面が円形になるように加工されている。灰白色を呈する石材は滑石と思われる。

56は円盤状石製品である。両面を平坦に加工している。石材は多孔質安山岩と思われる。

57は小型の石鉢である。Ａ区ＳＰ342から出土した。加工は機能面の作出に限られ、外面全体を自然面とする。卵形の石材の中央を、球形に彫り込む。石材は多孔質安山岩と思われる。

58は石皿と思われる。57と同様、加工は機能面の作出に限られ、外面全体を自然面とする。石材は多孔質安山岩と思われる。

59は全面に炭が付着した石製品である。Ａ区井戸ＳＥ151底部から出土した。炉で使用された後、井戸の埋め戻しに転用されたものであろうか。石材は多孔質安山岩と思われる。

Ⅴ　自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

1　はじめに

各遺構から出土した木材・炭化材を対象としてＡＭＳ法による放射性炭素年代測定と樹種同定を実施する。また、土器胎土に関する情報を得るため、陶器片について薄片作製・観察を実施する。

2　木材等の年代測定・樹種同定

（1）試　　料

試料は、各遺構から出土した木材３点（試料番号3, 6, 11）と炭化材７点（試料番号1, 4, 5, 7, 8, 9, 10）である。このうち、試料番号3, 6には、合板状材とされる試料と分割材状の木片がある。年代測定は合板状材について実施し、樹種同定は合板状材と木片の各２点について実施する。また、炭化材はいずれも複数片が認められるが、実体顕微鏡で観察した範囲で複数種類が含まれる試料もある。そのため、年代測定試料は比較的大きく、年代測定に必要な重量が得られる破片を選択し、同じ試料から樹種同定用試料も分割した。また、確認のため、年代測定以外の炭化材についても樹種の確認を行う。

（2）分析方法

Ａ）放射性炭素年代測定

試料は、超音波煮沸洗浄と酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム１N, 塩酸1.2N）により、不純物を取り除いたあと、グラファイトを合成し、測定用試料とする。測定機器は、NEC製コンパクトAMS･1.5SDHを用いる。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.0（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

Ｂ）樹種同定

木材は、剃刀の刃を用いて木口（横断面）･柾目（放射断面）･板目（接線断面）の３断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴を現生標本と比較して種類を同定する。

炭化材は自然乾燥させた後、３断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴を現生標本と比較して種類を同定する。

同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東（1982）、Wheeler他（1998）、Richter他（2006）を参考にする。また、各樹種の木材組織については、林（1991）、伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

（3）結　　果

Ａ）放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果を表１、暦年較正結果を表２に示す。補正年代は、試料番号１が345±20BP、試料番号３が870±25BP、試料番号４が445±25BP、試料番号５が945±25BP、試料番号６が730±25BP、試料番号７が955±25BP、試料番号８が375±25BP、試料番号９が345±25BP、試料番号10が375±25BP、試料番号11が615±25BPを示す。また、測定誤差をσとして計算させた暦年較正結果は、試料番号１がcalAD1,488-1,630、試料番号３がcalAD1,158-1,213、試料番号４がcalAD1,434-1,450、試料番号５がcalAD1032-1,151、試料番号６がcalAD1,268-1,283、試料番号７がcalAD1026-1,150、試料番号８がcalAD1,455-1,616、試料番号９がcalAD1,490-1,631、試料番号10がcalAD1,454-1,616、試料番号11がcalAD1,300-1,393である。

暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、１年単位で表している。いずれ木材や炭化材を測定試料としていることから、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。

暦年校正は、測定誤差σ、２σ双方の値を計算する。σは統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、２σは真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、σ、２σの範囲をそれぞれ１とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

表１　放射性炭素年代測定結果

番号	台帳番号	地区	遺構	種類	補正年代 ＢＰ	δ13C (‰)	CodeNo.	MeasurementNo.
1	61	Ａ区	ＳＫ0515	炭化材	345±20	−27.82±0.17	9908－１	ＰＬＤ−9913
3	13・14	Ａ区	ＳＥ0935	木製品（合板状材）	870±25	−29.04±0.29	9908－２	ＰＬＤ−9914
4	43	Ａ区	ＳＤ0936	炭化材	445±25	−24.85±0.15	9908－３	ＰＬＤ−9915
5	37	Ａ区	ＳＤ1014	炭化材	945±25	−27.54±0.17	9908－４	ＰＬＤ−9916
6	18・90・91	Ａ区	ＳＥ1110	木製品（合板状材）	730±25	−25.64±0.13	9908－５	ＰＬＤ−9917
7	79	Ｂ区	ＳＰ0090	炭化材	955±25	−26.44±0.18	9908－６	ＰＬＤ−9918
8	88・97	Ｃ区	ＳＫ1672	炭化材	375±25	−26.36±0.21	9908－７	ＰＬＤ−9919
9	82	Ｃ区	ＳＤ1678	炭化材	345±25	−24.71±0.14	9908－８	ＰＬＤ−9920
10	85	Ｃ区	ＳＫ1685	炭化材	375±25	−27.53±0.17	9908－９	ＰＬＤ−9921
11	22	Ｄ区	ＳＰ1265	木製品	615±25	−28.28±0.12	9908−10	ＰＬＤ−9922

１）年代値の算出には、Ｌｉｂｂｙの半減期5568年を使用。
２）ＢＰ年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
３）付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

Ｂ）樹種同定

樹種同定結果を表３に示す。木材のうち、合板状材は２点ともイネ科の稈の集合したものであった。残る木片は針葉樹のマツ属複維管束亜属に同定された。一方、炭化材は、試料番号１に５種類、試料番号４に３種類、試料番号９に２種類、試料番号10に４種類が認められた。これらの炭化材は、保存が悪く種類の同定に至らなかった４点を除く16点が針葉樹１種類(マツ属複維管束亜属)と広葉樹８種類（ヤナギ属・カバノキ属・ブナ属・コナラ属コナラ亜属コナラ節・クリ・カエデ属・ミズキ属）に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複維管束亜属（*Pinus* subgen. *Diploxylon*）　マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、１-10細胞高。

・ヤナギ属（*Salix*）　ヤナギ科

散孔材で、道管は単独または２-３個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は、単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、単列、１-15細胞高。

・カバノキ属（*Betula*）　カバノキ科

散孔材で、道管は単独または２-４個が放射方向に複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は密に対列状～交互状に配列する。放射組織は同性、１-４細胞幅、１-30細胞高。

・ブナ属（*Fagus*）　ブナ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に２-３個が複合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管の分布密度は高い。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織はほぼ同性、単列、数細胞高のものから複合放射組織まである。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節（*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*）　ブナ科

環孔材で、孔圏部は１-３列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１-20細胞高のものと複合放射組織とがある。

表２　暦年較正結果

番号	補正年代 (BP)	暦年較正年代（cal）														相対比	Code No.
1	345±22	σ	cal	AD	1,488	－	cal	AD	1,523	cal	BP	462	－	427		0.389	9908-1
			cal	AD	1,559	－	cal	AD	1,562	cal	BP	391	－	388		0.018	
			cal	AD	1,571	－	cal	AD	1,604	cal	BP	379	－	346		0.350	
			cal	AD	1,608	－	cal	AD	1,630	cal	BP	342	－	320		0.243	
		2σ	cal	AD	1,467	－	cal	AD	1,530	cal	BP	483	－	420		0.392	
			cal	AD	1,539	－	cal	AD	1,635	cal	BP	411	－	315		0.608	
3	872±25	σ	cal	AD	1,158	－	cal	AD	1,213	cal	BP	792	－	737		1.000	9908-2
		2σ	cal	AD	1,047	－	cal	AD	1,089	cal	BP	903	－	861		0.158	
			cal	AD	1,121	－	cal	AD	1,139	cal	BP	829	－	811		0.044	
			cal	AD	1,149	－	cal	AD	1,223	cal	BP	801	－	727		0.798	
4	446±23	σ	cal	AD	1,434	－	cal	AD	1,450	cal	BP	516	－	500		1.000	9908-3
		2σ	cal	AD	1,423	－	cal	AD	1,467	cal	BP	527	－	483		1.000	
5	946±23	σ	cal	AD	1,032	－	cal	AD	1,049	cal	BP	918	－	901		0.242	9908-4
			cal	AD	1,084	－	cal	AD	1,124	cal	BP	866	－	826		0.557	
			cal	AD	1,137	－	cal	AD	1,151	cal	BP	813	－	799		0.202	
		2σ	cal	AD	1,027	－	cal	AD	1,059	cal	BP	923	－	891		0.256	
			cal	AD	1,063	－	cal	AD	1,155	cal	BP	887	－	795		0.744	
6	730±23	σ	cal	AD	1,268	－	cal	AD	1,283	cal	BP	682	－	667		1.000	9908-5
		2σ	cal	AD	1,251	－	cal	AD	1,294	cal	BP	699	－	656		1.000	
7	957±24	σ	cal	AD	1,026	－	cal	AD	1,047	cal	BP	924	－	903		0.329	9908-6
			cal	AD	1,088	－	cal	AD	1,122	cal	BP	862	－	828		0.518	
			cal	AD	1,138	－	cal	AD	1,150	cal	BP	812	－	800		0.154	
		2σ	cal	AD	1,022	－	cal	AD	1,059	cal	BP	928	－	891		0.314	
			cal	AD	1,066	－	cal	AD	1,072	cal	BP	884	－	878		0.021	
			cal	AD	1,075	－	cal	AD	1,155	cal	BP	875	－	795		0.665	
8	375±23	σ	cal	AD	1,455	－	cal	AD	1,499	cal	BP	495	－	451		0.669	9908-7
			cal	AD	1,503	－	cal	AD	1,512	cal	BP	447	－	438		0.106	
			cal	AD	1,601	－	cal	AD	1,616	cal	BP	349	－	334		0.225	
		2σ	cal	AD	1,448	－	cal	AD	1,523	cal	BP	502	－	427		0.676	
			cal	AD	1,560	－	cal	AD	1,561	cal	BP	390	－	389		0.002	
			cal	AD	1,572	－	cal	AD	1,630	cal	BP	378	－	320		0.322	
9	343±23	σ	cal	AD	1,490	－	cal	AD	1,524	cal	BP	460	－	426		0.364	9908-8
			cal	AD	1,558	－	cal	AD	1,564	cal	BP	392	－	386		0.047	
			cal	AD	1,570	－	cal	AD	1,603	cal	BP	380	－	347		0.358	
			cal	AD	1,609	－	cal	AD	1,631	cal	BP	341	－	319		0.230	
		2σ	cal	AD	1,469	－	cal	AD	1,532	cal	BP	481	－	418		0.378	
			cal	AD	1,537	－	cal	AD	1,635	cal	BP	413	－	315		0.622	
10	375±24	σ	cal	AD	1,454	－	cal	AD	1,512	cal	BP	496	－	438		0.778	9908-9
			cal	AD	1,601	－	cal	AD	1,616	cal	BP	349	－	334		0.222	
		2σ	cal	AD	1,448	－	cal	AD	1,523	cal	BP	502	－	427		0.665	
			cal	AD	1,559	－	cal	AD	1,562	cal	BP	391	－	388		0.007	
			cal	AD	1,571	－	cal	AD	1,630	cal	BP	379	－	320		0.328	
11	617±24	σ	cal	AD	1,300	－	cal	AD	1,324	cal	BP	650	－	626		0.410	9908-10
			cal	AD	1,345	－	cal	AD	1,368	cal	BP	605	－	582		0.401	
			cal	AD	1,381	－	cal	AD	1,393	cal	BP	569	－	557		0.189	
		2σ	cal	AD	1,295	－	cal	AD	1,334	cal	BP	655	－	616		0.393	
			cal	AD	1,336	－	cal	AD	1,398	cal	BP	614	－	552		0.607	

1）計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）を使用
2）計算には表に示した丸める前の値を使用している。
3）１桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、１桁目を丸めていない。
4）統計的に真の値が入る確率はσは68％、２σは95％である
5）相対比は、σ、２σのそれぞれを１とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

・クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）　ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は３-４列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１-15細胞高。

・カエデ属（*Acer*）　カエデ科

散孔材で、管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独または２-３個が複合して散在し、年輪界に向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列～交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、１-５細胞幅、１-40細胞高。木繊維が木口面において不規則な紋様をなす。

・ミズキ属（*Cornus*）　ミズキ科

散孔材で、管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、ほぼ単独で散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～交互状に配列する。放射組織は上下縁辺部が直立細胞となる異性、１-４細胞幅、１-30細胞高。

・イネ科（Gramineae）

原生木部の小径の道管の左右に１対の大型の道管があり、その外側に師部細胞がある。これらを厚壁の繊維細胞（維管束鞘）が囲んで維管束を形成する。維管束は柔組織中に散在し、不斉中心柱をなす。

表３　樹種同定結果

番号	台帳番号	地区	遺構	種類		樹種
1	61	A区	SK0515	炭化材	AMS	カエデ属
					その他	ブナ属
						ミズキ属
						コナラ属コナラ亜属コナラ節
						広葉樹（環孔材）
3	13・14	A区	SE0935	木製品（合板状材）	AMS	イネ科
				木片	その他	マツ属複維管束亜属
4	43	A区	SD0936	炭化材	AMS	カバノキ属
					その他	マツ属複維管束亜属
						広葉樹（散孔材）
5	37	A区	SD1014	炭化材	AMS	広葉樹（散孔材）
					その他	広葉樹（散孔材）
6	18・90・91	A区	SE1110	木製品（合板状材）	AMS	イネ科
				木片	その他	マツ属複維管束亜属
7	79	B区	SP0090	炭化材	AMS	コナラ属コナラ亜属コナラ節
					その他	コナラ属コナラ亜属コナラ節
8	88・97	C区	SK1672	炭化材	AMS	クリ
					その他	クリ
9	82	C区	SD1678	炭化材	AMS	カエデ属
					その他	ミズキ属
10	85	C区	SK1685	炭化材	AMS	ヤナギ属
					その他	ブナ属
						クリ
						ミズキ属
11	22	D区	SP1265	木製品	AMS	マツ属複維管束亜属

（４）考　　察

年代測定を実施した木材・炭化材は、暦年較正結果から、11-12世紀中頃（試料番号5,7）、12-13世紀初頭（試料番号３）、13世紀代（試料番号６）、14世紀代（試料番号11）、15世紀中頃（試料番号４）、15世紀後半-17世紀代（試料番号1, 8, 9, 10）に分けられる。

暦年較正で11-12世紀中頃の年代を示した試料番号５は溝跡から出土した炭化材で、樹種は種類不明の広葉樹、試料番号７は、コナラ節であった。コナラ節には、本地域の落葉広葉樹林を構成する種類（ミズナラ）が含まれており、木材は重硬で強度が高い材質を有する。周囲で入手可能な木材を利用したことが推定される。

12-13世紀初頭の年代を示す試料番号３は、合板状材と木片があり、合板状材は全てイネ科の稈（茎）が集合したものであり、萱材を束ねたような状態のものと考えられる。種類の同定には至らなかったが、比較的丈夫であり、大型で木質化するイネ科のうち、組織の特徴が異なるタケ亜科を除くススキ属やヨシ属等と考えられる。一方、木片は複維管束亜属であった。13世紀代の年代が

得られた試料番号６も、年代はやや異なるが、試料番号３と同様の状態を示す試料であり、イネ科の合板状材の他に複維管束亜属の木片が混在する点も類似する。

14世紀代を示す試料番号11は、分割加工された木製品であるが、用途などの詳細は不明である。複維管束亜属は、針葉樹としては比較的強度が高く、松脂を多く含むために保存性も良い。

15世紀中頃を示す試料番号４は、溝跡から出土した炭化材で年代測定用が広葉樹のカバノキ属、その他の炭化材に針葉樹の複維管束亜属と種類不明の広葉樹が認められた。カバノキ属は山地の落葉広葉樹林に生育し、重硬で強度の高い材質を有する種類が多い。複維管束亜属とは材質が異なっており、炭化材には材質の異なる複数の種類が混在していることが推定される。

15世紀後半-17世紀代を示した試料番号1, 8, 9, 10は、土坑、溝跡等から出土した炭化材である。試料番号１に５種類、試料番号９に２種類、試料番号10に４種類が認められ、複数の種類で構成されている。一方、試料番号８はクリ１種類で構成され、他の試料とは傾向が異なる。これらの炭化材に認められた種類は、全て落葉広葉樹であり、山地の落葉広葉樹林の主体をなすブナ属やコナラ節の他、それらと共に森林を形成するカエデ属、クリ、ミズキ属や河畔林を構成するヤナギ属等が含まれる。これらの種類が遺跡周辺において落葉広葉樹林を構成しており、そこから木材を入手、利用していたことが推定される。

3　土器の薄片作製・観察

（1）試　　料

試料は、天矢場遺跡で検出された柱穴（Ａ地区ＳＰ1087）より出土した中世とされる瓷器系陶器片１点（試料番号２）である。陶器片には、指頭痕とされる痕跡が認められている。発掘調査所見では、文様の類似性から、新潟県阿賀野市（旧笹神村）の五頭山麓古窯で製作された13～14世紀のものである可能性が指摘されている。

（2）分析方法

薄片は、試料の一部（粘土試料は樹脂による固化の後）をダイアモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製する。薄片は岩石学的な手法を用いて観察し、胎土中に含まれる砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を明らかにする。また、胎土の基質は、孔隙の分布する程度と砂の配列や孔隙などの方向性の確認や、基質を構成する粘土が焼成の結果、どの程度ガラス化してどの程度粘土鉱物として残存しているか、酸化鉄などの鉄分の含まれる程度について定性的に記載する。

表４　胎土薄片観察結果

番号	試料	砂粒			砂粒の種類構成											孔隙度	方向性	粘土残存量	含鉄量	長石の溶融度	ムライト化	備考
					鉱物片						岩石片				その他							
		全体量	淘汰度	最大径	石英	カリ長石	斜長石	黒雲母	ジルコン	不透明鉱物	チャート	流紋岩・デイサイト	多結晶石英	花崗岩類	海綿骨針							
2	瓷器系陶器片	○	△	1.5	△	△	＋	＋	＋	＋	＋	＋	＋	△	＋	△	△	＋	＋	△	△	石英には、高温クラックが発達する。カリ長石・斜長石は結晶表面部が溶融している。ムライトはきわめて微細で、結晶度は不良である。

量比　◎：多量　○：中量　△：少量　＋：微量　×：なし
程度　◎：強い　○：中程度　△：弱い　×：なし

（3）結果・考察

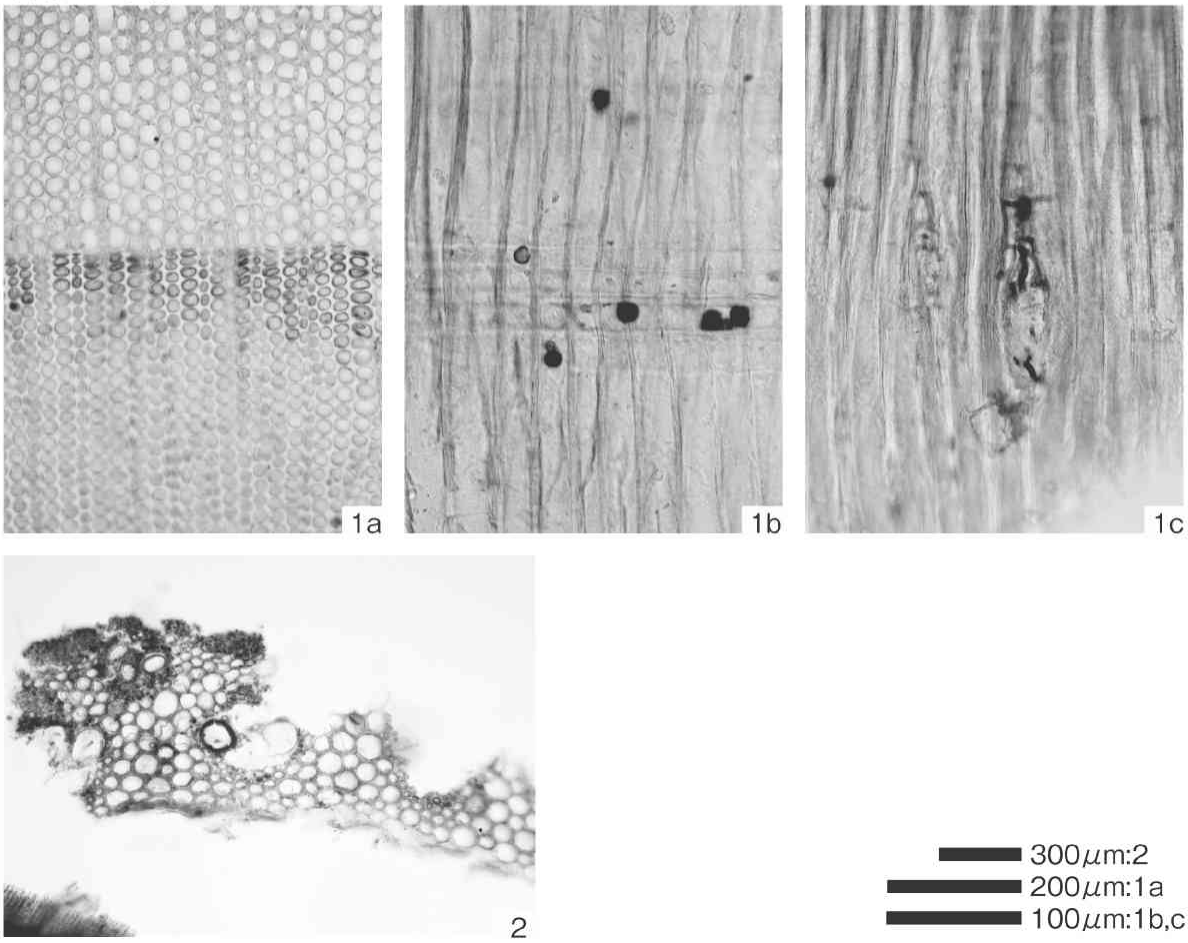
観察結果を表４に示す。砂粒を中量程度含み、その主体は石英とカリ長石の鉱物片と花崗岩類の岩石片から構成される。また、微量の斜長石や黒雲母、ジルコンなどの鉱物片やチャートおよび流紋岩・デイサイトの岩石片なども認められた。また、石英には、高温クラックが発達し、カリ長石・斜長石は結晶表面部が溶融している。

さらに、長石のムライト化も認められたが、結晶はきわめて微細で、結晶度は不良である。これらは、焼成時の高温による変化を示しており、五十嵐（2007）による基準に従えば、約1150℃ 程度の焼成温度が推定される。また、胎土から推定されるその素材（粘土や砂）の採取地は、花崗岩類の分布域を背景とする地域であることが考えられる。発掘調査所見により、その産地の可能性があるとされた五頭山麓古窯の地質学的背景である五頭山地は、白亜紀に貫入した花崗岩類により構成されている（新潟県, 1989）。したがって、今回の分析結果は、試料が五頭山麓古窯産であるとした場合には整合するものと言える。今後は、実際に窯跡出土試料の分析を行い、比較するなどの検討が必要と考えられる。

参考文献

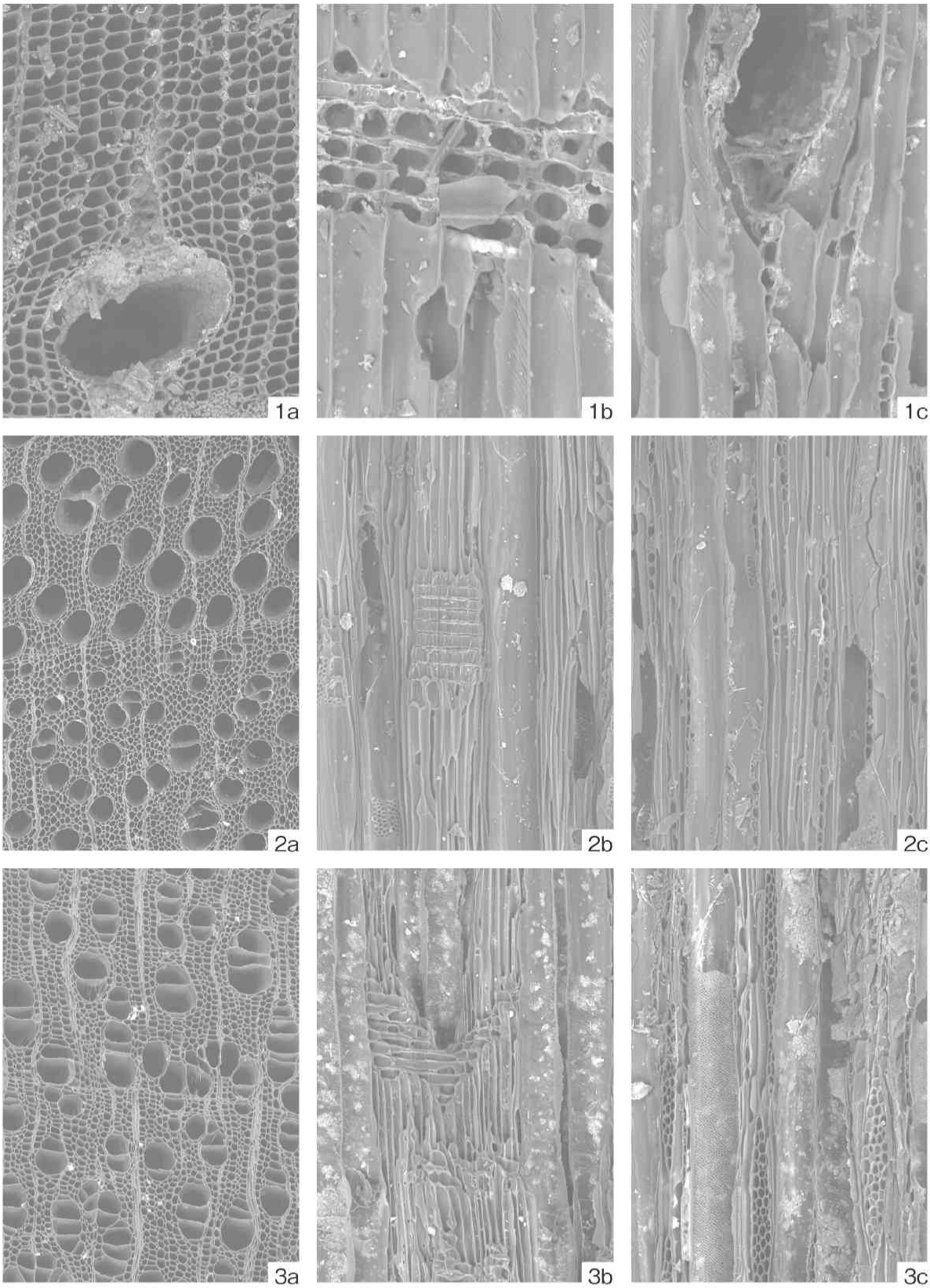
林昭三　1991　日本産木材　顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.
五十嵐俊雄　2007　土師器・須恵器等に関する焼成温度推定手法の開発.徳永重元博士献呈論集,パリノ・サーヴェイ株式会社, 281-297.
伊東隆夫　1995　日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
伊東隆夫　1996　日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所. 66-176.
伊東隆夫　1997　日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
伊東隆夫　1998　日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
伊東隆夫　1999　日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
新潟県商工労働部工業振興課　1989　新潟県地質図（20万分の１）および説明書.新潟県.
Richter　H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E.（編）　2006　針葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部久・内海泰弘（日本語版監修）, 海青社, 70 p.［Richter　H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E.（2004）*IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*］.
島地謙・伊東隆夫　1982　図説木材組織.地球社, 176 p.
Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P.E.（編）　1998　広葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊藤隆夫・藤井智之・佐伯浩（日本語版監修）, 海青社, 122 p.［Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E.（1989）*IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*］.

図版１　木材



1. マツ属複維管束亜属(試料番号6)　a：木口，b：柾目，c：板目
2. イネ科(試料番号6)　横断面

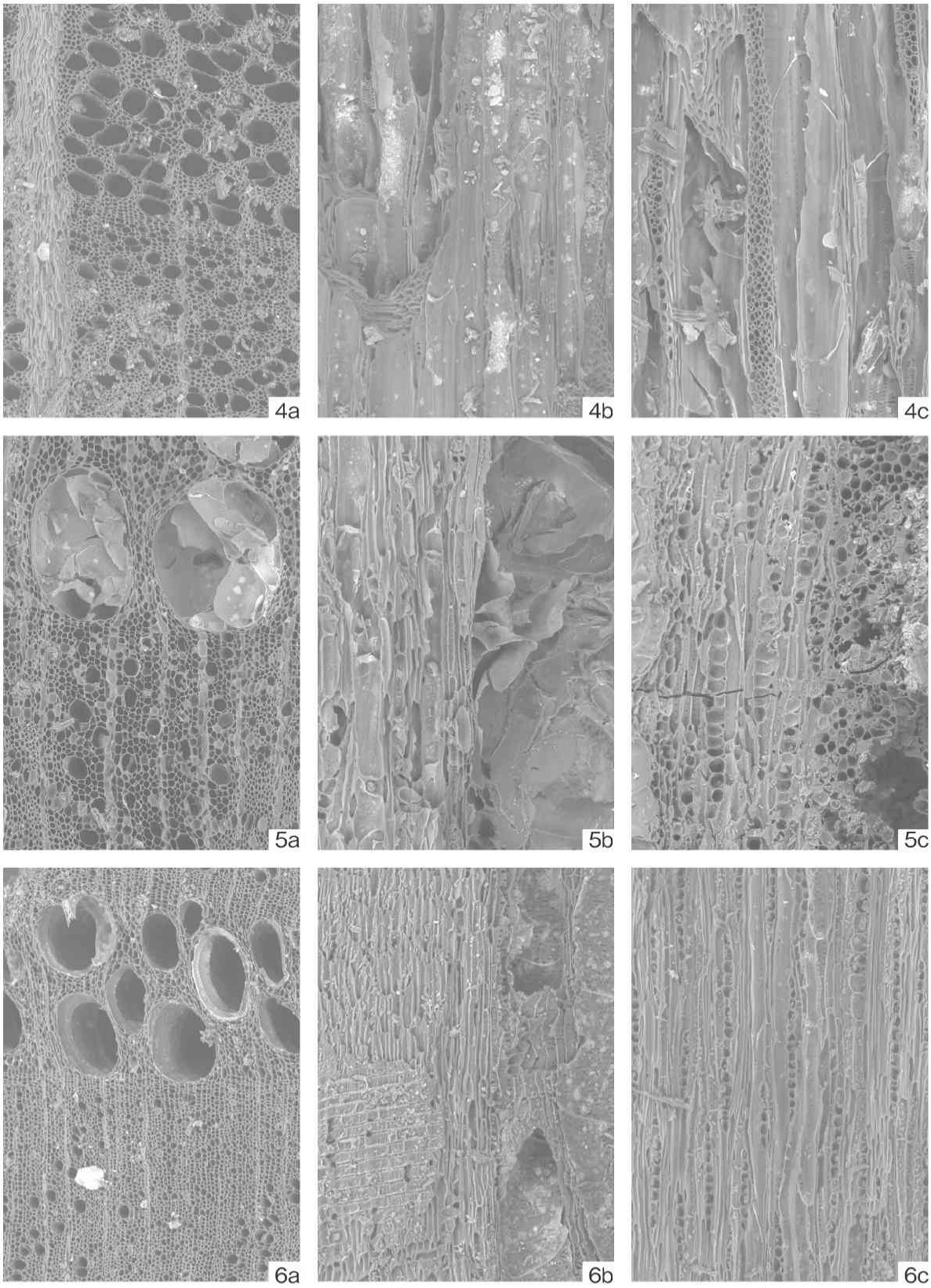
図版２　炭化材(1)



1. マツ属複維管束亜属(試料番号4)
2. ヤナギ属(試料番号10)
3. カバノキ属(試料番号4)
　a：木口，b：柾目，c：板目

200μm:2-3a
200μm:1a,2-3b,c
100μm:1b,c

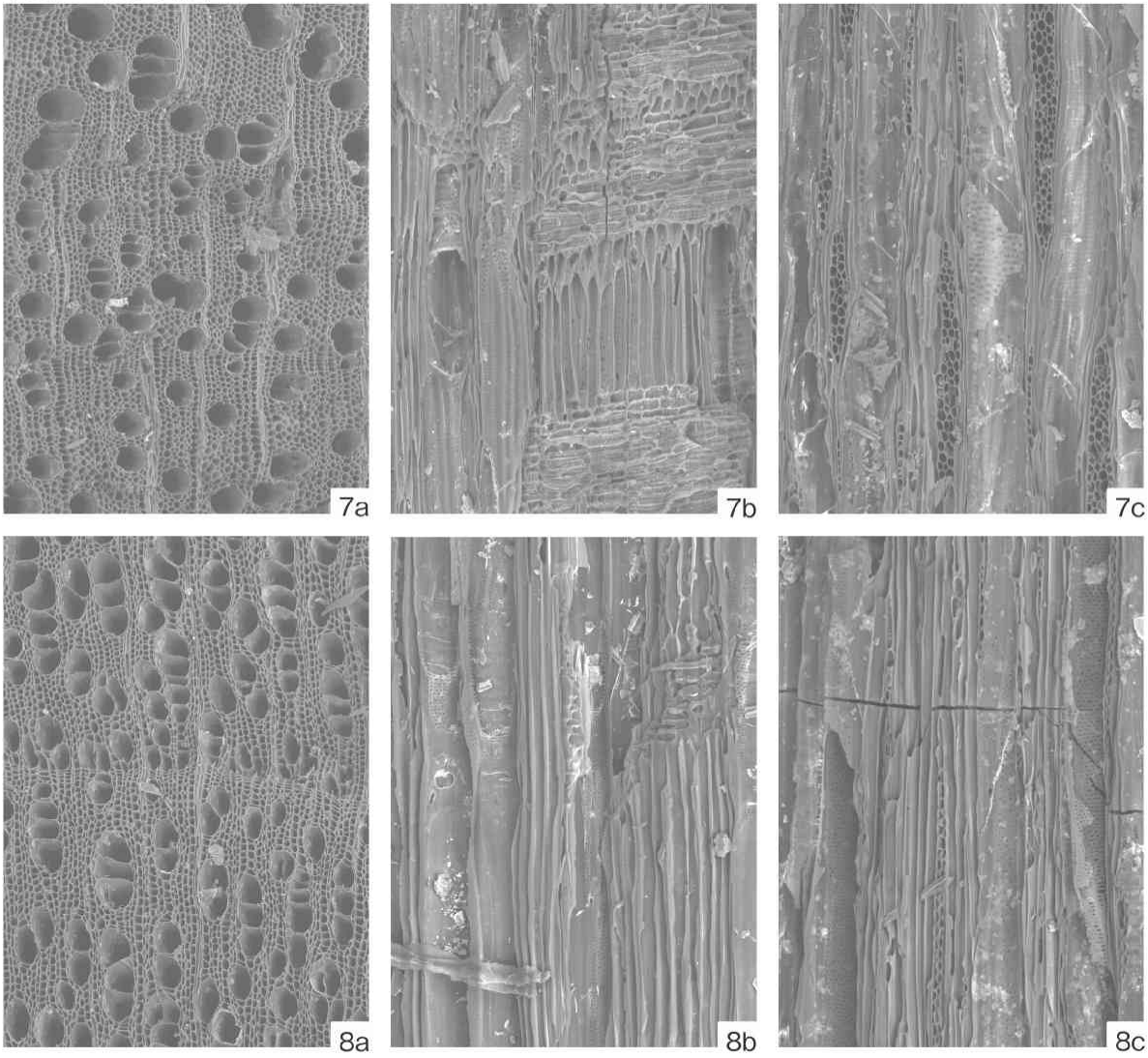
図版３　炭化材(2)



4. ブナ属(試料番号1)
5. コナラ属コナラ亜属コナラ節(試料番号7)
6. クリ(試料番号8)
　a：木口，b：柾目，c：板目

200μm:a
200μm:b,c

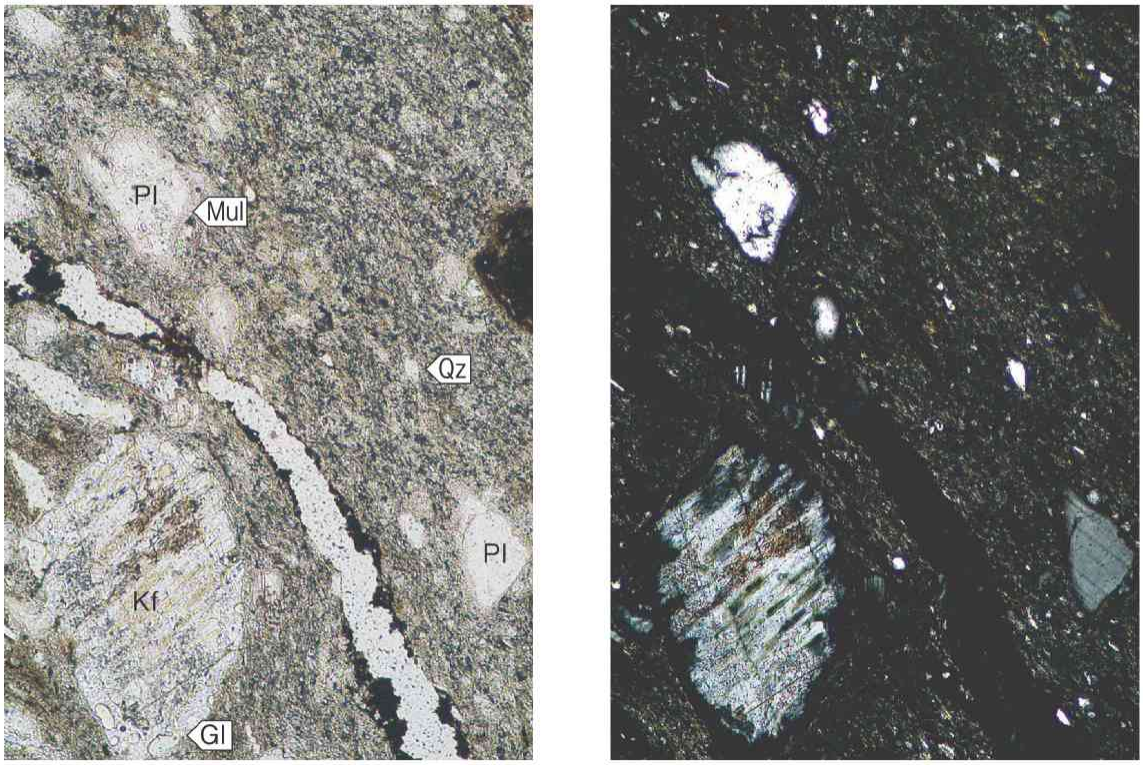
図版4　炭化材(3)



7. カエデ属(試料番号1)
8. ミズキ属(試料番号1)
　a：木口，b：柾目，c：板目

200μm:a
200μm:b,c

図版5　胎土薄片



1.SP1087瓷器系陶器片

0.2mm

Qz:石英.Kf:カリ長石.Pl:斜長石.Mul:ムライト.Gl:ガラス化.
写真左は下方ポーラー、写真右は直交ポーラー下

Ⅵ　調査のまとめ

今回の調査は、一般国道13号上山バイパス改築事業に伴う天矢場遺跡の発掘調査である。調査は、遺跡範囲内の遺跡にかかる事業実施部分約4,500㎡を対象に実施した。その結果、遺構は縄文時代の陥穴、中近世の掘立柱建物、井戸、土坑、溝などが検出され、出土遺物は縄文土器、土製品、奈良・平安時代の須恵器、中世・近世の陶磁器、木製品など整理箱にして10箱であった。以下にその成果を述べる。

天矢場遺跡は、山形県南陽市大字川樋字天矢場に所在し、白鷹丘陵と出羽山地に挟まれた谷状の地形西側に位置する。標高は258mを測る。

縄文時代の遺構は、陥穴がＢ区で４基確認された。東西方向に、３～3.5mのほぼ等間隔に直線状に配置されている。陥穴自体から遺物の出土は無かったが、周辺から縄文時代中期中葉のものを中心に、早期や後期に属すると思われる縄文土器片と石鏃、石篦などの石器が出土している。また、周辺には縄文時代晩期の遺跡と考えられている岩谷堂遺跡や縄文時代後期の住居が検出された加藤屋敷遺跡が存在する。このことから、天矢場遺跡を含む周辺には縄文時代の中期～晩期にかけての集落跡が存在していたものと考えられ、陥穴や石鏃から天矢場遺跡は当時の狩猟場の一部であったと推測される。

中世から近世の遺構は、掘立柱建物18棟、井戸６基、土坑、溝などが確認された。遺物は13～19世紀代のものが出土している。年代測定では炭化材は11～17世紀代、建物の柱材であるＳＰ1265出土の木柱は14世紀代の結果が得られている。

掘立柱建物はＡ区に14棟が集中し、Ｂ・Ｃ区に各２棟が分布するのみである。確認された建物規模と棟数は、１×３間が６棟、２×３間が４棟、１×３間＋廂は３棟、１×２間、２×２間、２×３間＋廂、２×６間＋廂、２×３間＋３面廂が各１棟であった。

これら建物の主軸方向や位置から、N-11°～12°-Eの主軸方向となるＳＢ1782・1783・1787と、それに対しほぼ直角の主軸方向のＳＢ99・1777・1793の構成となるＡ群。N-18°～21°-Eの範疇の主軸方向となるＳＢ100・1785・1789・1790・1794の構成となるＢ群。但し、位置関係からＳＢ1789とＳＢ1790間で建て替えがあったと思われる。N-26°～28°-Eの主軸方向となるＳＢ1784・1788・1791の構成となるＣ群。N-14°-Eの主軸方向のＳＢ1500と、それに対しほぼ直角の主軸方向となるＳＢ1792で構成されるＤ群。以上４群が想定される。

各群の新旧関係は、切り合いなどが無いため不明である。所属時期は遺物の年代や木柱の年代測定の結果から13～17世紀頃と考えられ、４時期に分かれると推定される。なお、ＳＢ1781・1786の２棟は主軸方向と位置からは構成される群が判断できなかった。

溝は、ほぼ軸線が掘立柱建物と一致するものが多く、井戸、土坑についても出土した炭化材の年代測定の結果は、一部古い年代を示したものもあるが、概ね13～17世紀代の範疇であることから、建物の時期と併行すると考えられる。

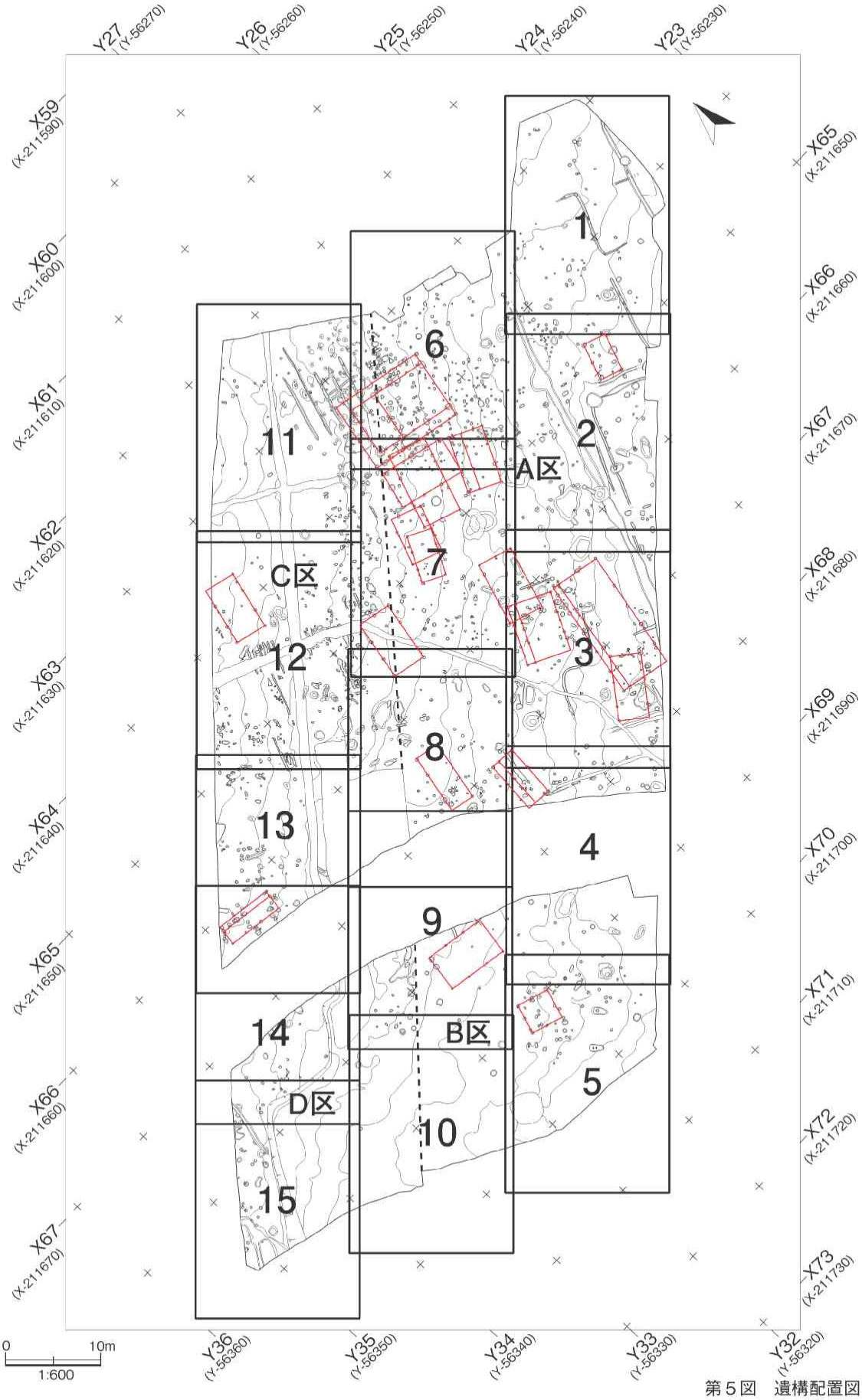
遺物は、13～16世紀代の中世陶磁器、かわらけ、17～19世紀代の近世陶磁器が多く出土した。

中世陶器には、複線形の格子目文に菊花文を組み合わせた押印がある瓷器系陶器がある。この特徴は、新潟県五頭山麗古窯の製品と類似することから常滑系陶器の系統であると考えられる。同窯製と思われる陶器は寒河江市三条遺跡、南陽市上野遺跡・檜原遺跡から出土している。磁器では龍泉窯産の青磁や景徳鎮窯産の青花などの輸入磁器が出土している。

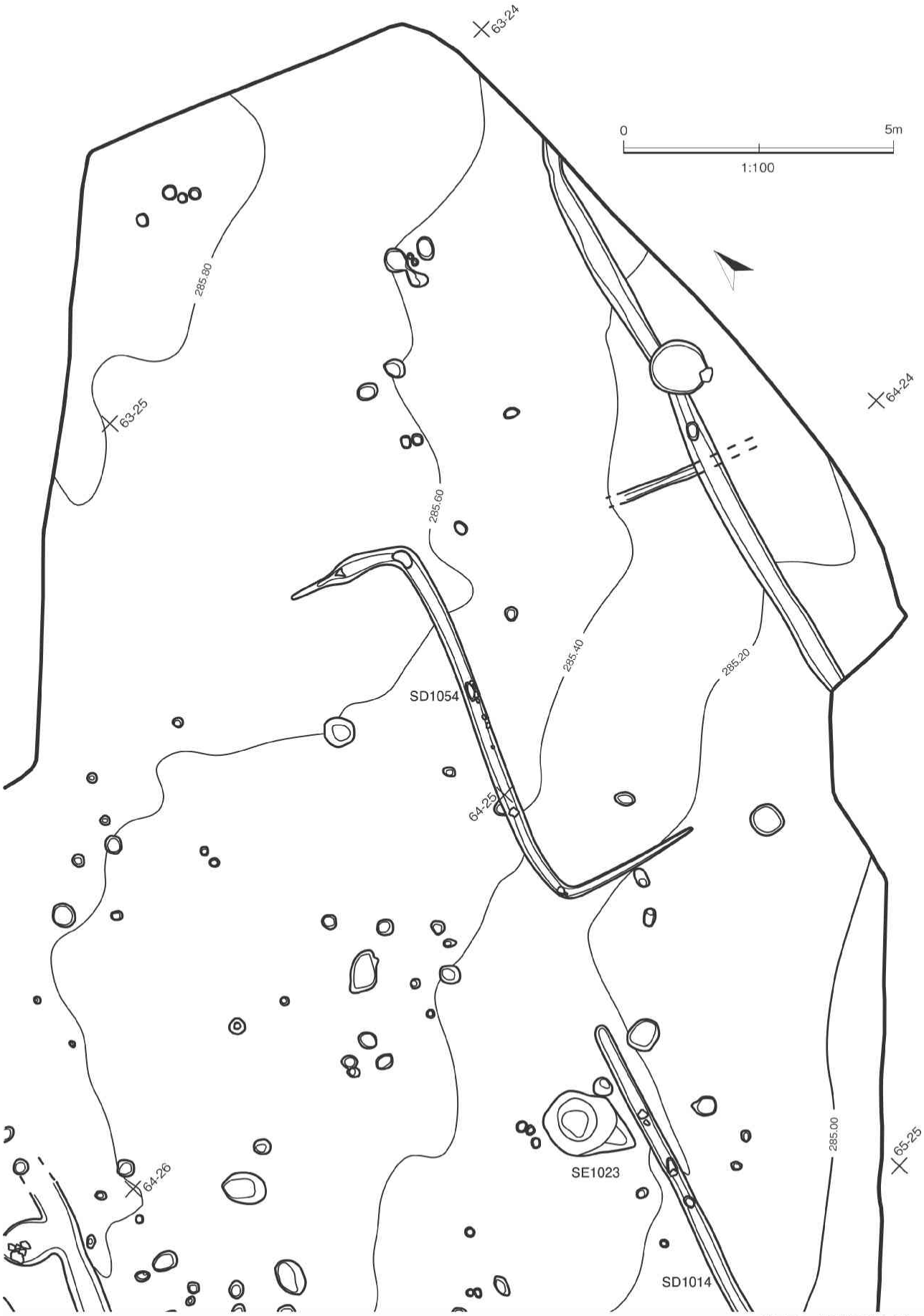
近世陶磁器では、17世紀中～18世紀にかけての伊万里や17世紀初の初期伊万里の磁器が多くみられ、他に17～18世紀の肥前、岸窯や会津本郷産の陶器がある。北陸地方や中国大陸、九州、福島地方などとの物資の交流の片鱗がうかがえる。但し、遺跡周辺の館跡との関連や、建物群の詳細な時期や変遷など、今後さらに検討していく必要がある。

引用・参考文献

阿古島功ほか　1983 『土地分類基本調査　赤湯・上山』 山形県
佐藤鎮雄ほか　1990 『南陽市史』 南陽市
佐藤鎮雄ほか　1986 『南陽市史　考古資料編』 南陽市
佐藤鎮雄ほか　1996 『南陽市史　年表』 南陽市
小野栄ほか　2001 『置賜の歴史』 郷土出版社
入間田宣夫ほか　1999 『山形県中世城館遺跡調査報告書　第１集』 山形県教育委員会
長井政太郎ほか　1968 『赤湯町史』 赤湯町史編集委員会
東置賜郡教育会　1938 『東置賜郡史』東置賜郡教育会
一志茂樹ほか　1990 『日本歴史地名体系６　山形県の地名』 平凡社
誉田慶恩ほか　1992 『角川日本地名大辞典６　山形県』 角川書店
谷口康浩　1989 「条痕文系土器様式」『縄文土器大観１』 小学館
阿子島香ほか　1999 『東北大学埋蔵文化財調査年報12』 東北大学埋蔵文化財調査研究センター
佐藤正俊　2008 『縄文式土器の見方・考え方-早期末葉から前期前半の土器を例示して-』 財団法人山形県埋蔵文化財センター談話会資料
黒坂禎二　1989 「羽状縄文系土器様式」『縄文土器大観１』 小学館
白鳥良一　1989 「前期大木式土器様式」『縄文土器大観１』 小学館
丹羽茂　1989 「中期大木式土器様式」『縄文土器大観１』 小学館
安孫子昭二　1989 「瘤付土器様式」『縄文土器大観４』 小学館
水澤幸一ほか　2003 『二軒茶屋遺跡』 中条町埋蔵文化財調査報告第27集　中条町教育委員会
柴田徹　1991 「考古学のための岩石鑑定ミニ図鑑」『東海大学校地内遺跡調査団報告書２』 東海大学校地内遺跡調査委員会・調査団
押切智紀ほか　2007 『檜原遺跡発掘調査報告書』 財団法人山形県埋蔵文化財センター
小林圭一　2007 『上ノ山館跡発掘調査報告書』 財団法人山形県埋蔵文化財センター
堀江格ほか　1998 『岸窯跡-近世窯跡の調査-』 福島県埋蔵文化財報告書第111集　福島市・福島市教育委員会・財団法人福島市振興公社
黒坂雅人ほか　1999 『城南一丁目遺跡発掘調査報告書』 財団法人山形県埋蔵文化財センター
伊藤元　1999 『睦合館跡発掘調査報告書』 財団法人山形県埋蔵文化財センター



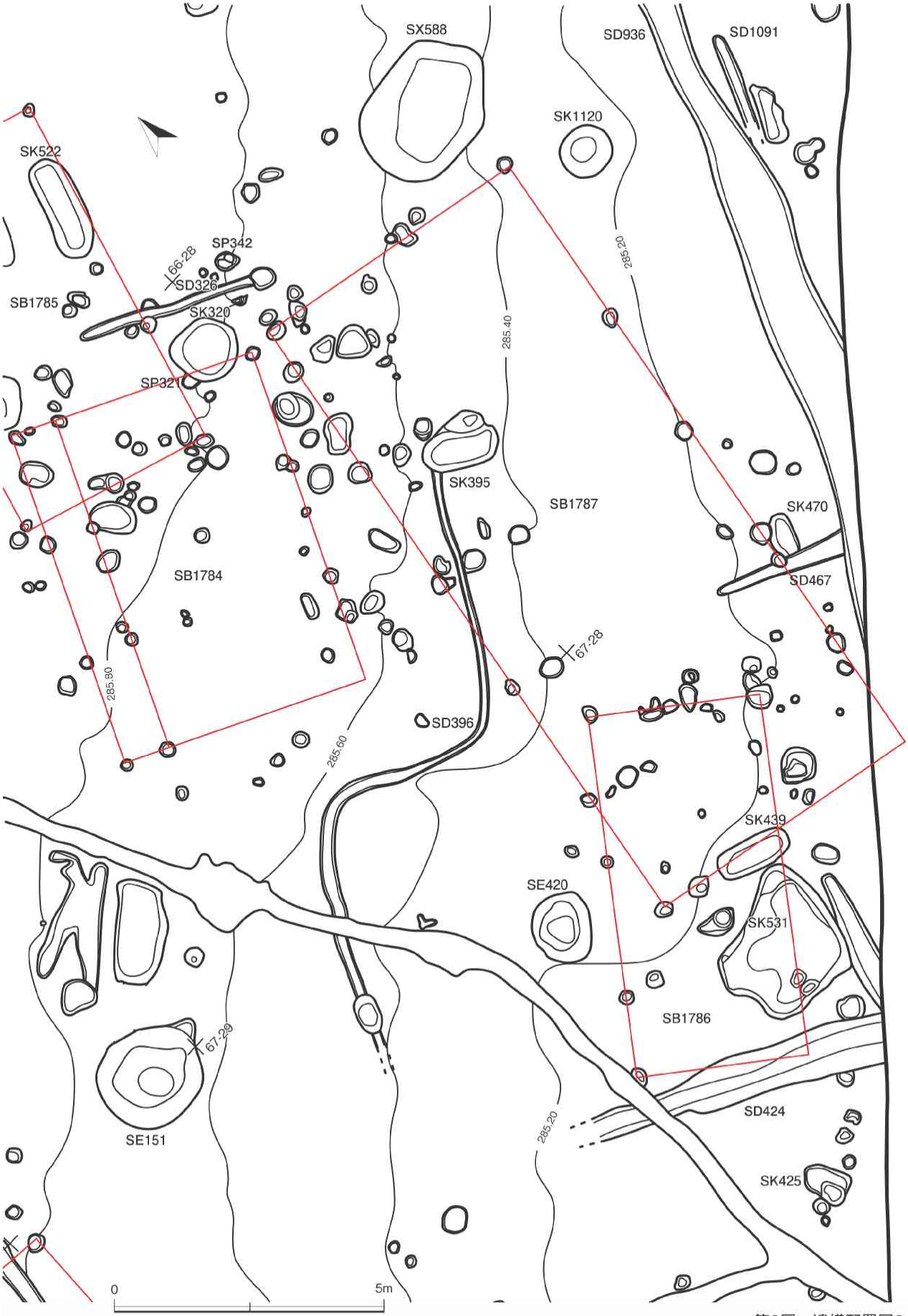
第５図　遺構配置図の割付図


63-24
0
5m
1:100
285.80
63-25
64-24
285.60
285.40
285.20
SD1054
64-25
SE1023
285.00
65-25
64-26
SD1014

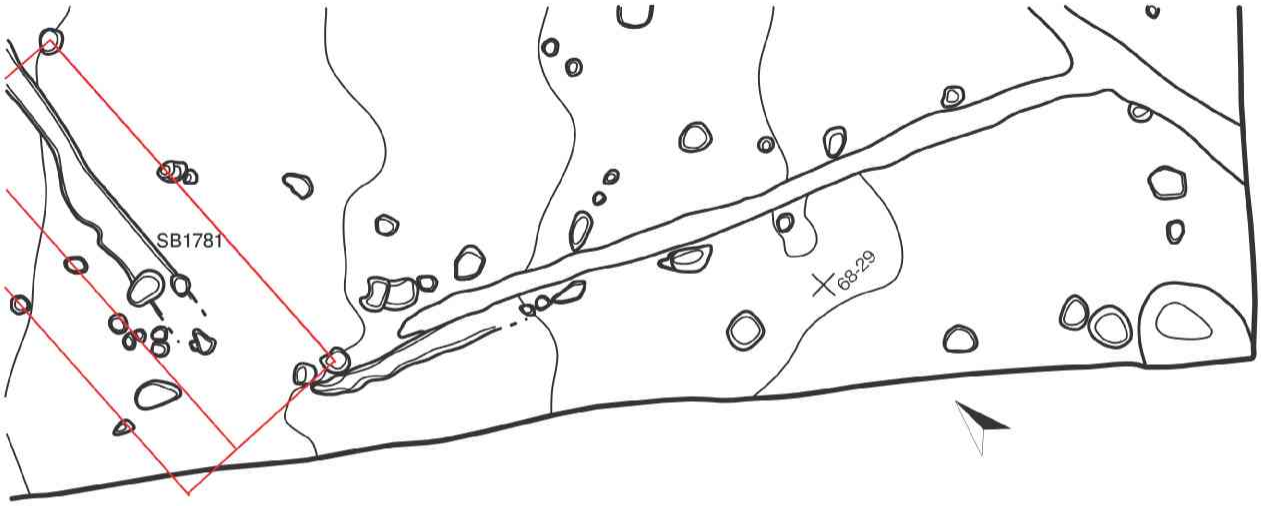
第6図　遺構配置図1

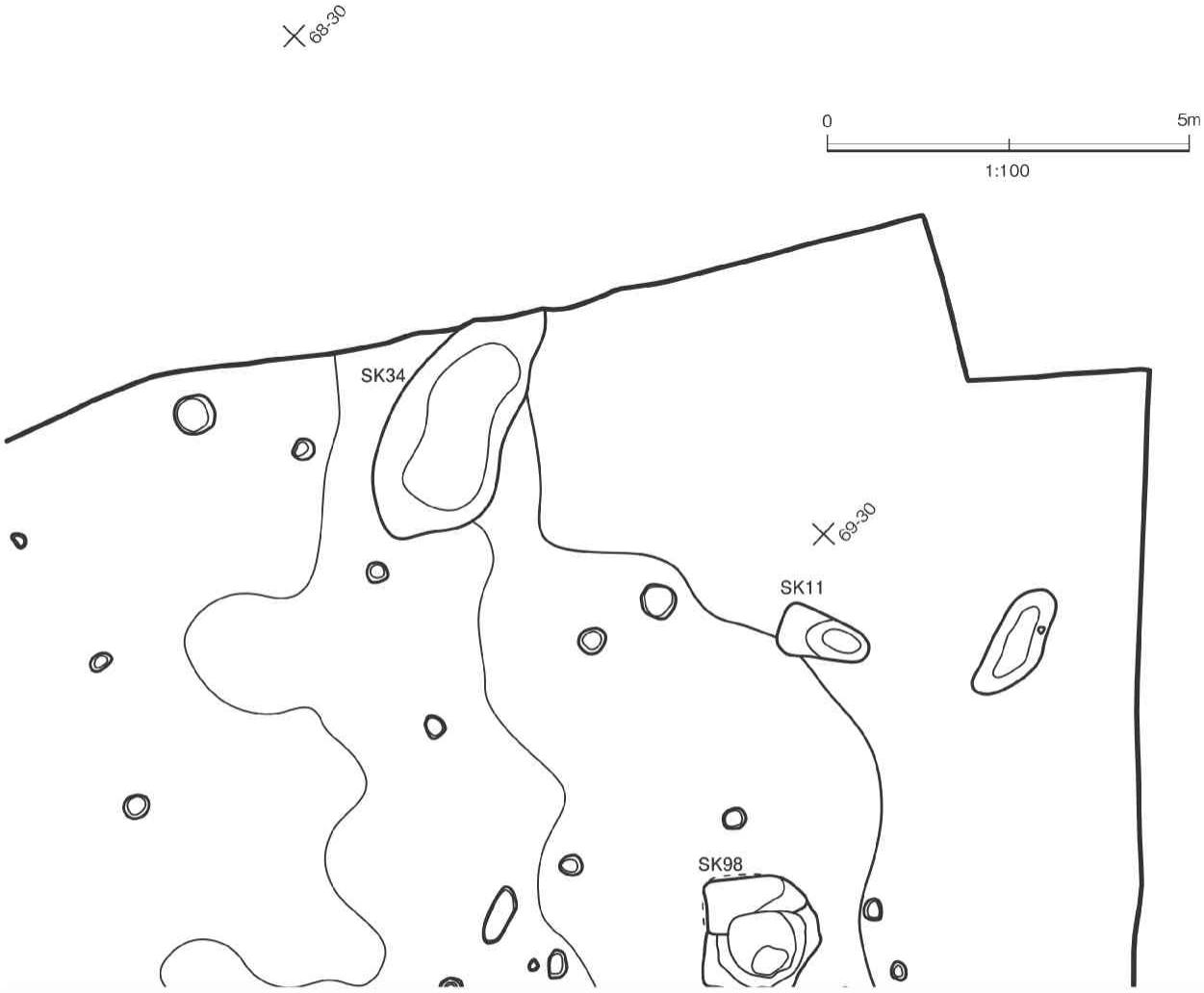
SD1014
SB1794
65-26
SD1091
SD1090
285.20
285.00
SK1088
66-26
SD1091
65-27
SP1087
SK1089
285.60
SX546
SP590
SX589
SE1110
66-27
SX588
SD936
SD1091
0
5m
1:100

第7図　遺構配置図2

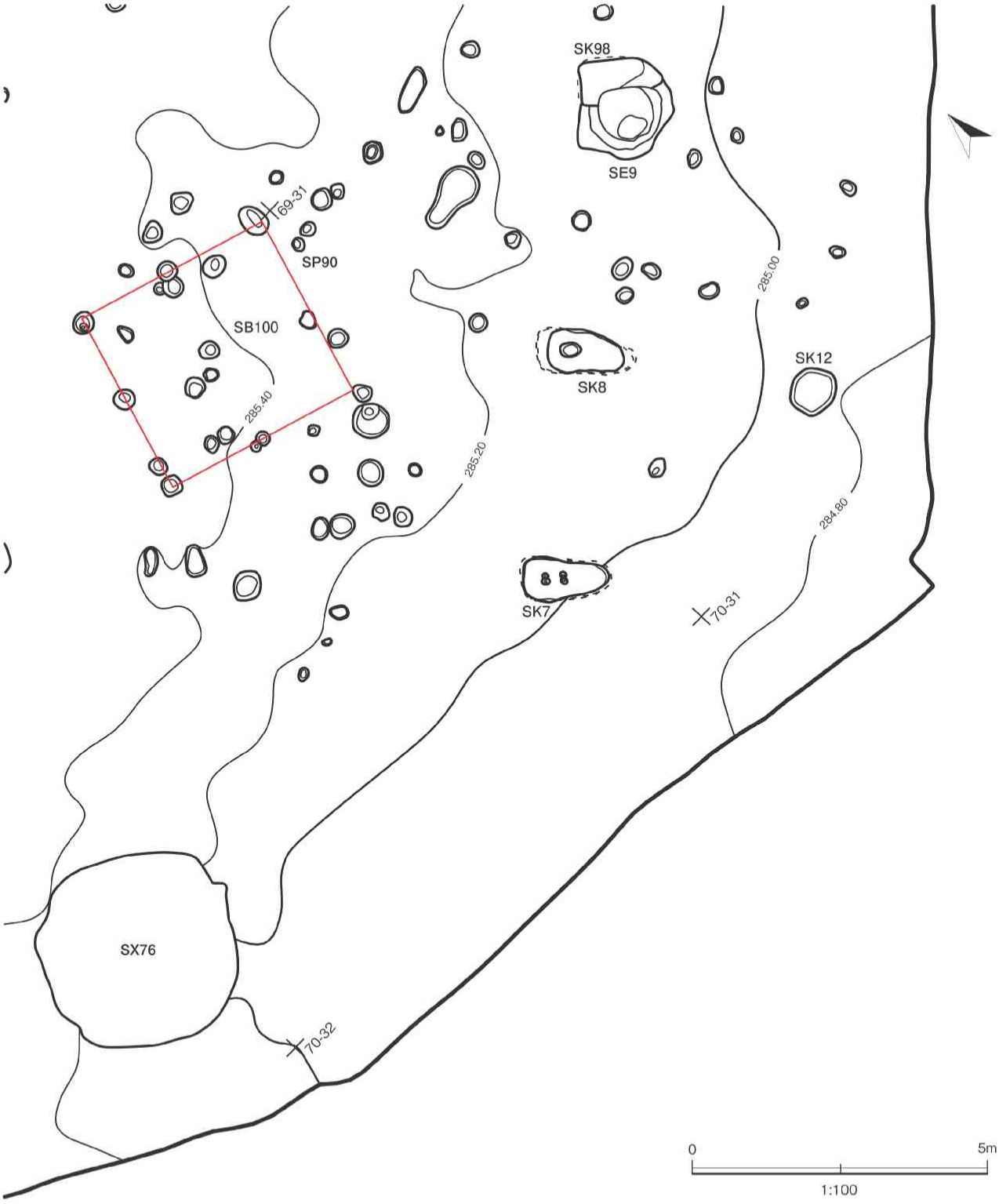

SX588
SD936
SD1091
SK1120
SK522
SP342
66·28
SD326
SB1785
SK320
SP321
285.40
285.20
SK395
SB1787
SK470
SD467
SB1784
67·28
285.80
SD396
285.60
SK439
SE420
SK531
SB1786
67·29
SE151
285.20
SD424
SK425
0
5m
1:100

第8図　遺構配置図3

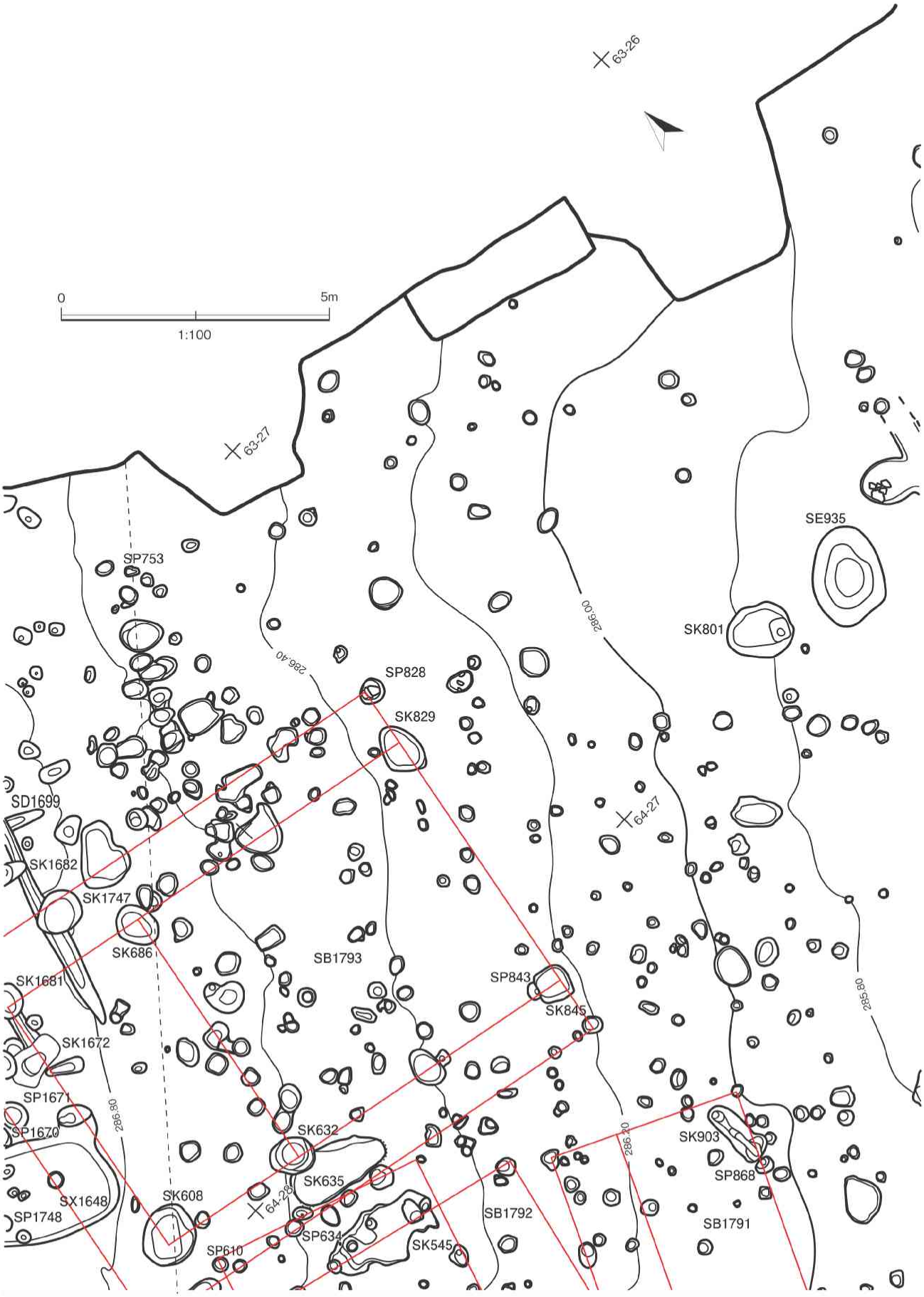




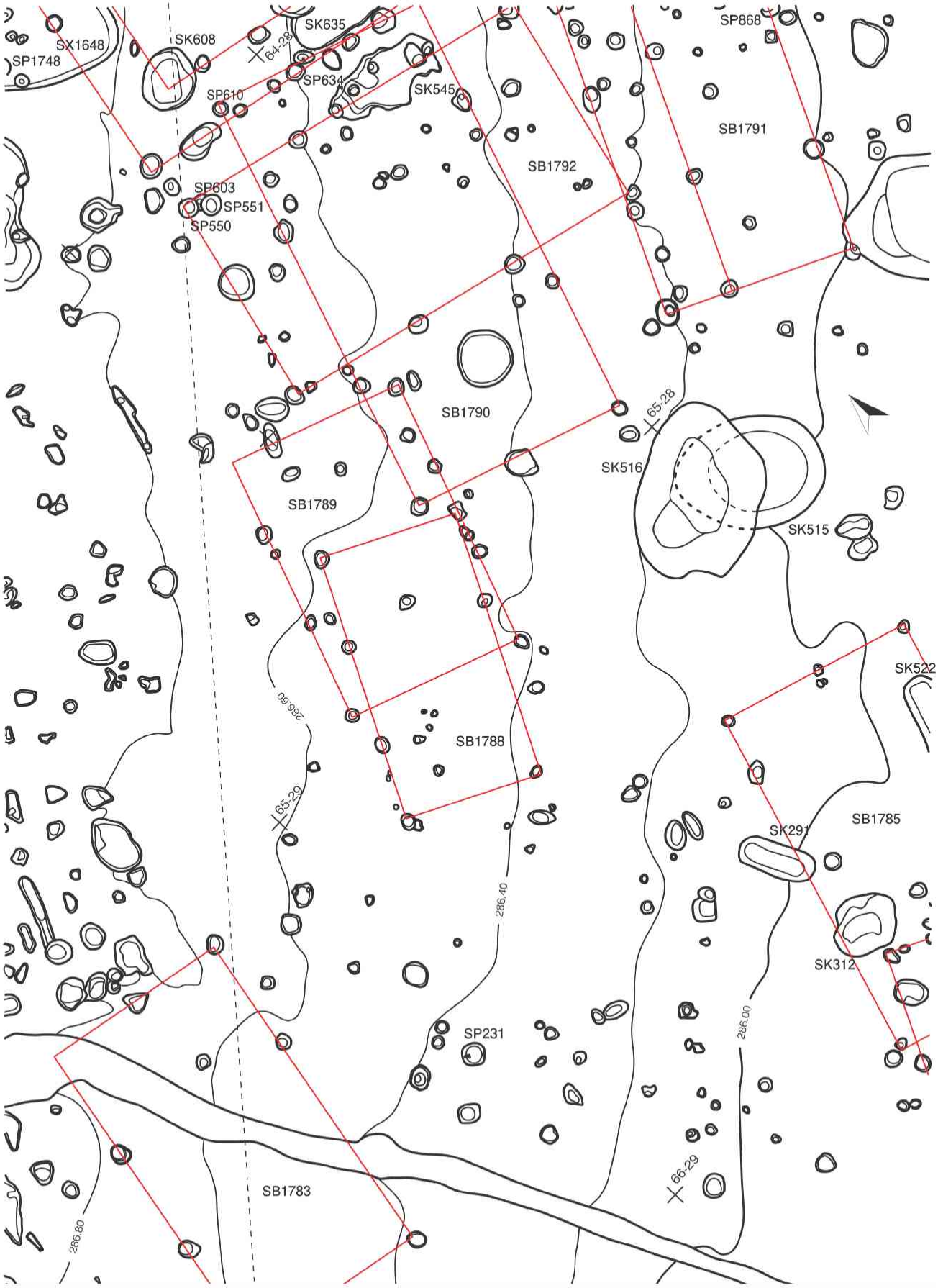
第9図　遺構配置図4


SK98
SE9
69.31
SP90
SB100
285.40
285.20
285.00
SK8
SK12
284.80
SK7
70.31
SX76
70.32
0
5m
1:100

第10図　遺構配置図5


0
5m
1:100
63.26
63.27
64.27
64.28
SE935
SK801
SP753
SP828
SK829
286.00
286.40
286.80
285.80
SD1699
SK1682
SK1747
SK686
SK1681
SK1672
SP1671
SP1670
SB1793
SP843
SK845
SK632
SK635
SK608
SX1648
SP1748
SP610
SP634
SK545
SB1792
SK903
SP868
SB1791

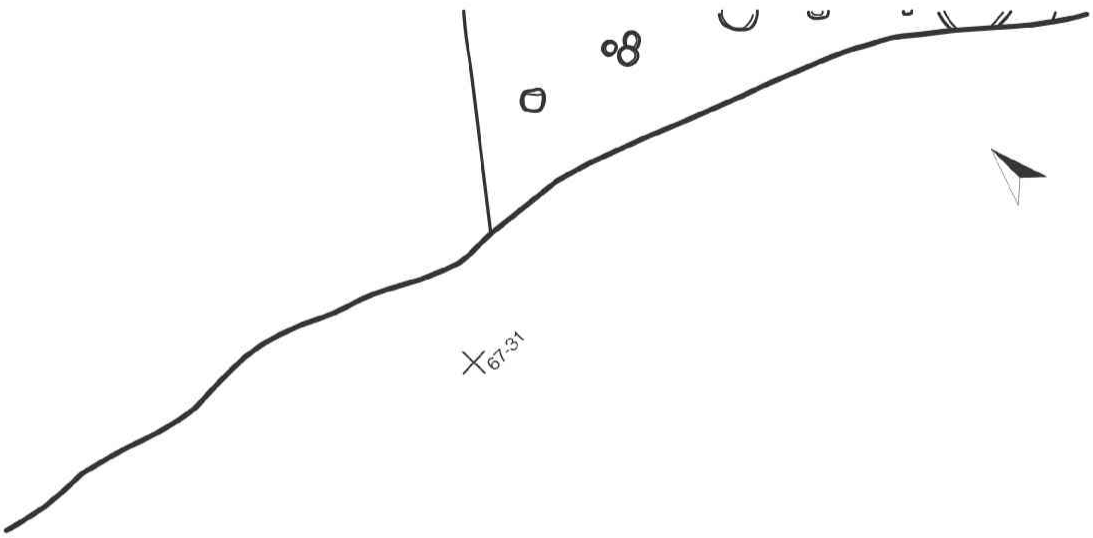
第11図　遺構配置図6

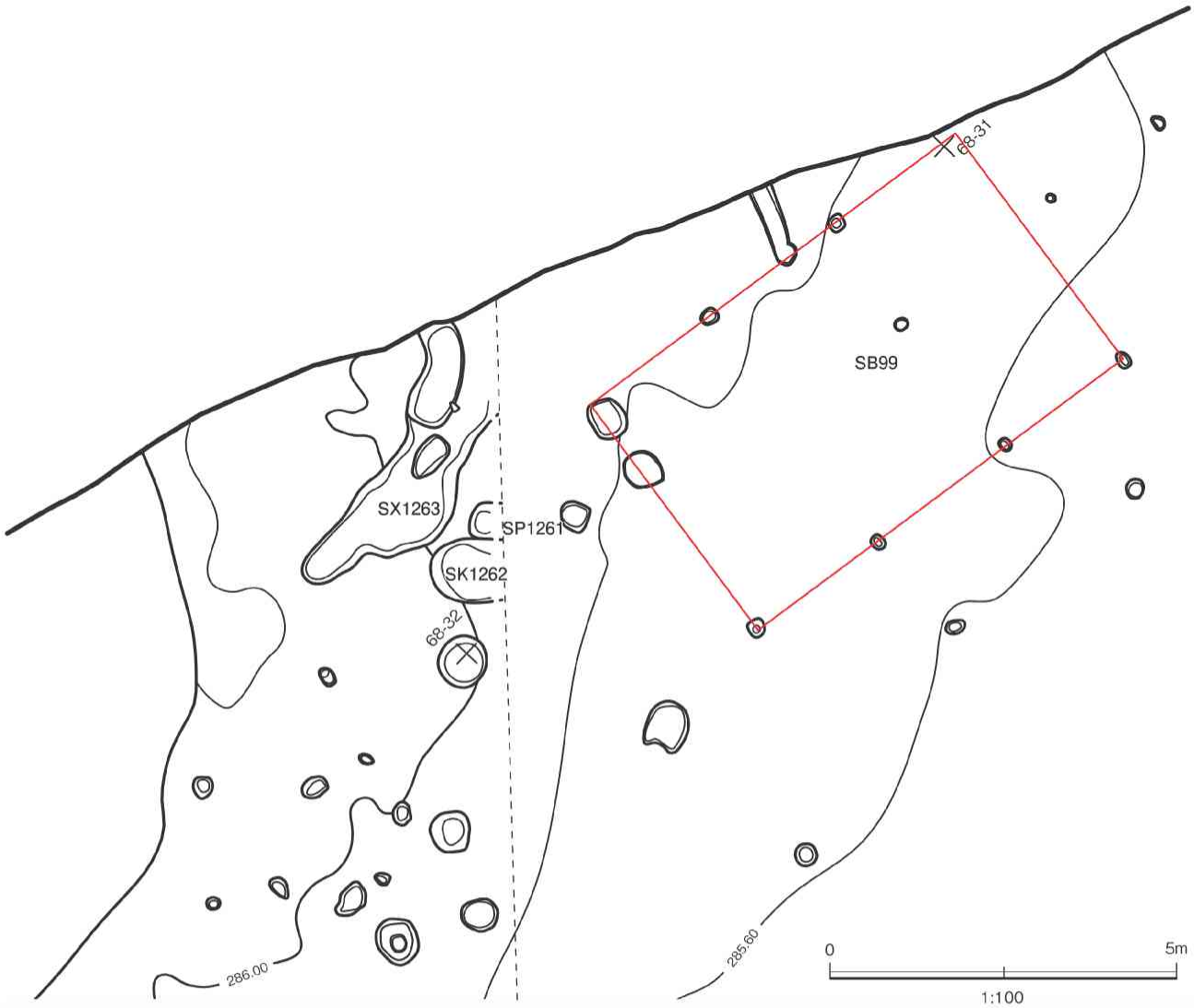

SX1648
SP1748
SK608
SK635
64-28
SP634
SP610
SK545
SP868
SB1791
SB1792
SP603
SP551
SP550
SB1790
65-28
SK516
SB1789
SK515
SK522
286.60
SB1788
65-29
SB1785
SK291
286.40
SK312
286.00
SP231
66-29
SB1783
286.80
0
5m
1:100

第12図　遺構配置図7

SB1783
286.80
286.60
286.40
66-29
SK295
66-30
SK1435
SK1434
286.20
286.00
SB1782
67-30
SK113
SP112
SK472
67-31
0
5m
1:100

第13図　遺構配置図8

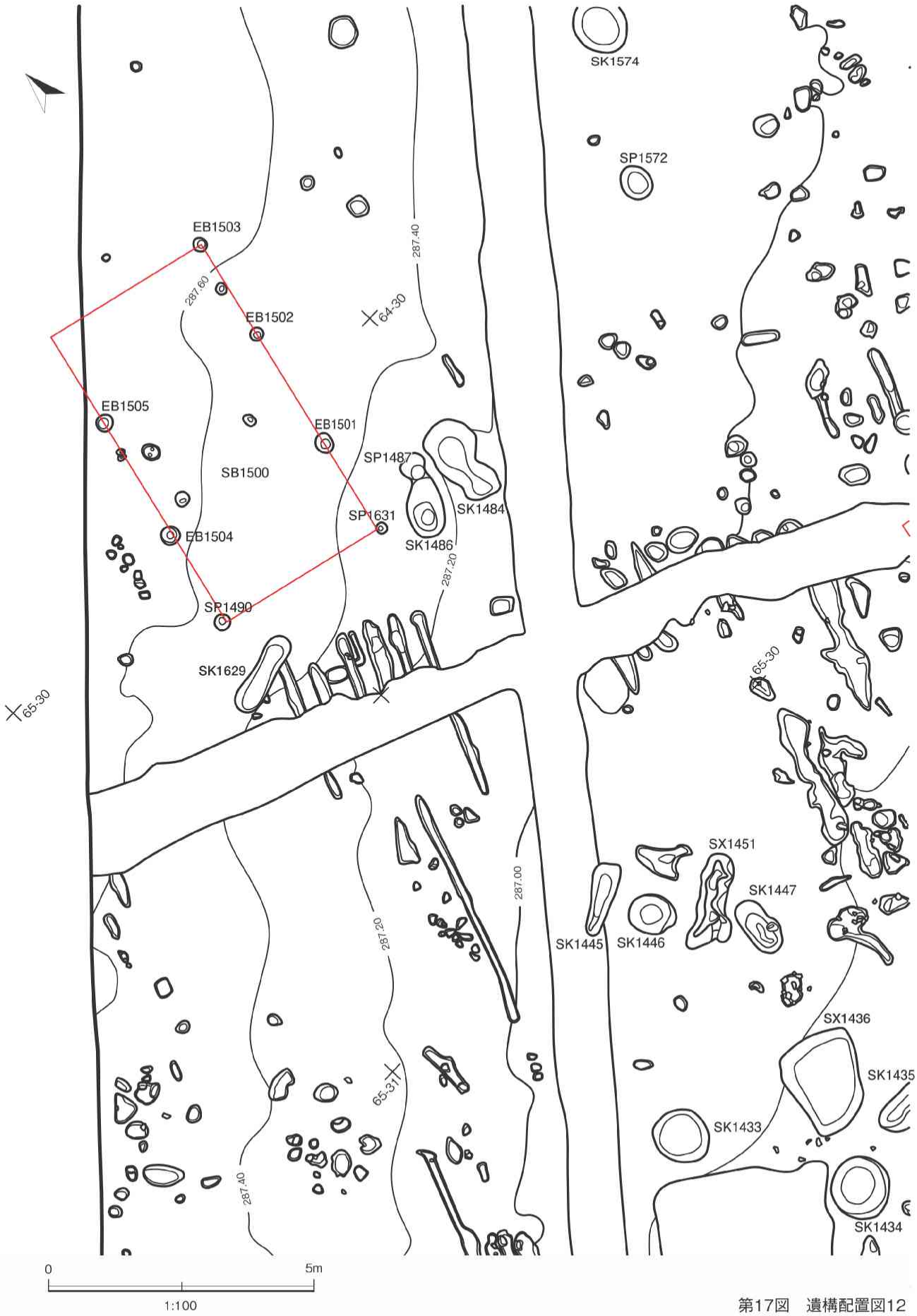

67-31


68-31
SB99
SX1263
SP1261
SK1262
68-32
286.00
285.60
0
5m
1:100

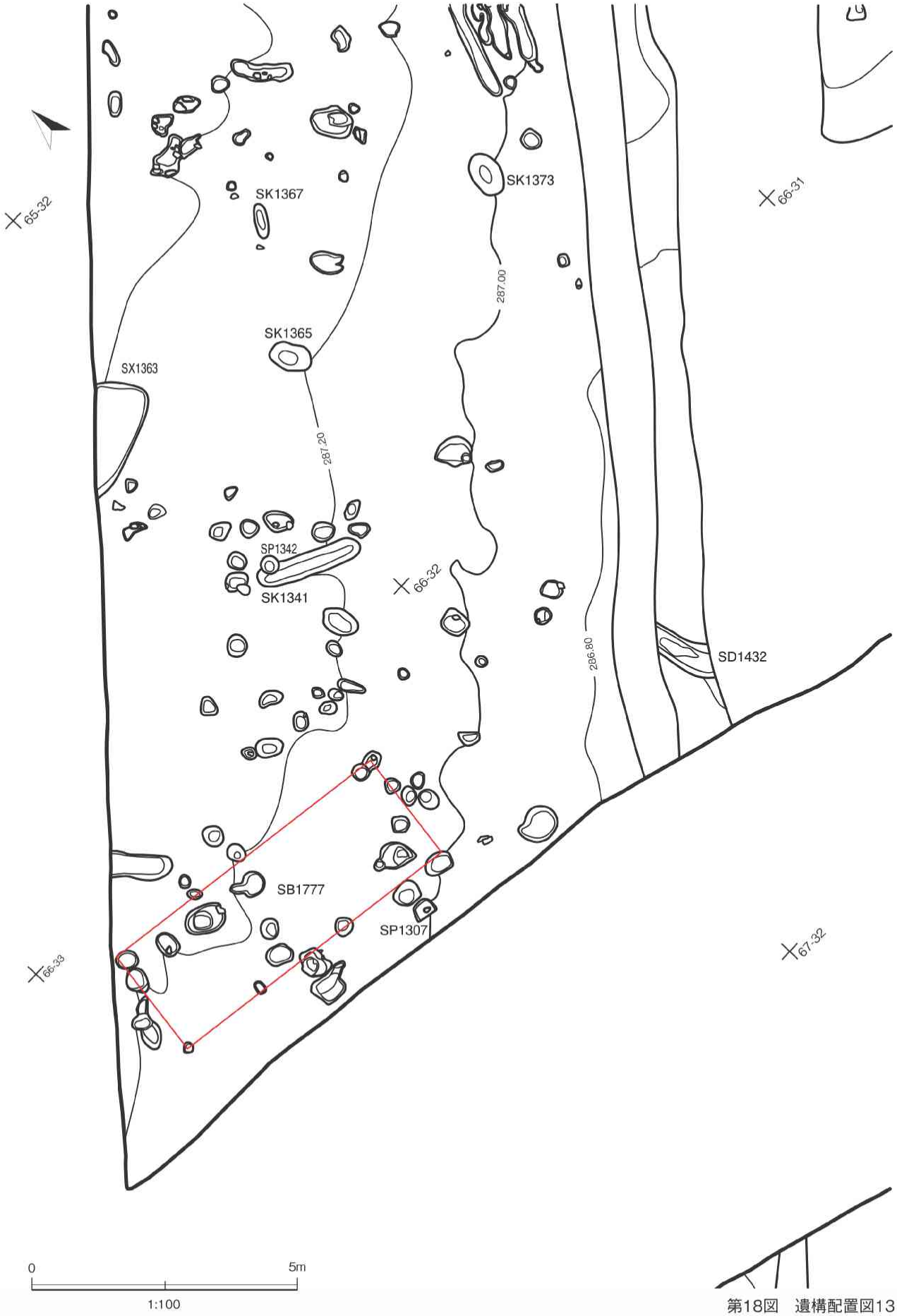
第14図　遺構配置図9

第15図　遺構配置図10

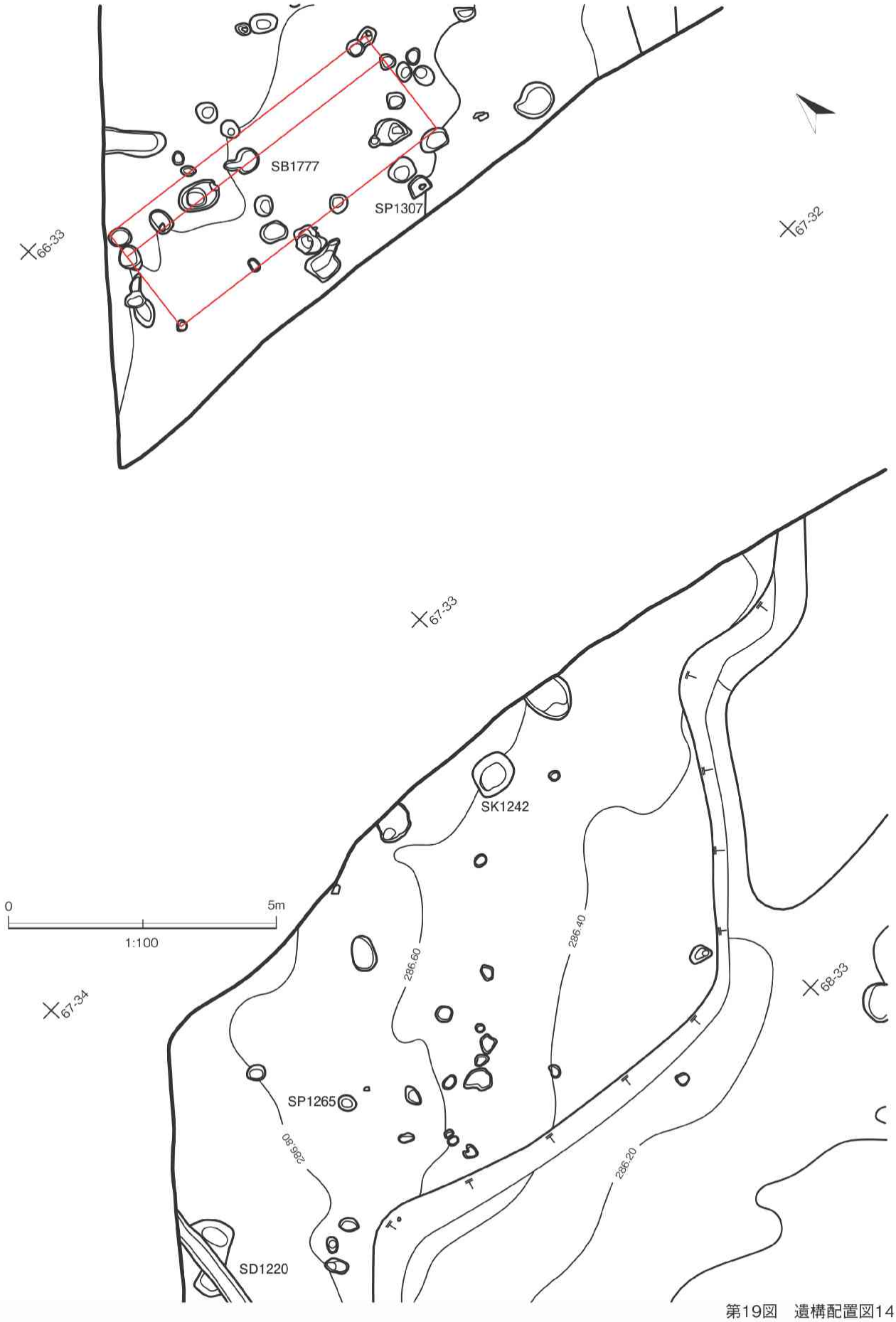
第16図　遺構配置図11



第17図　遺構配置図12



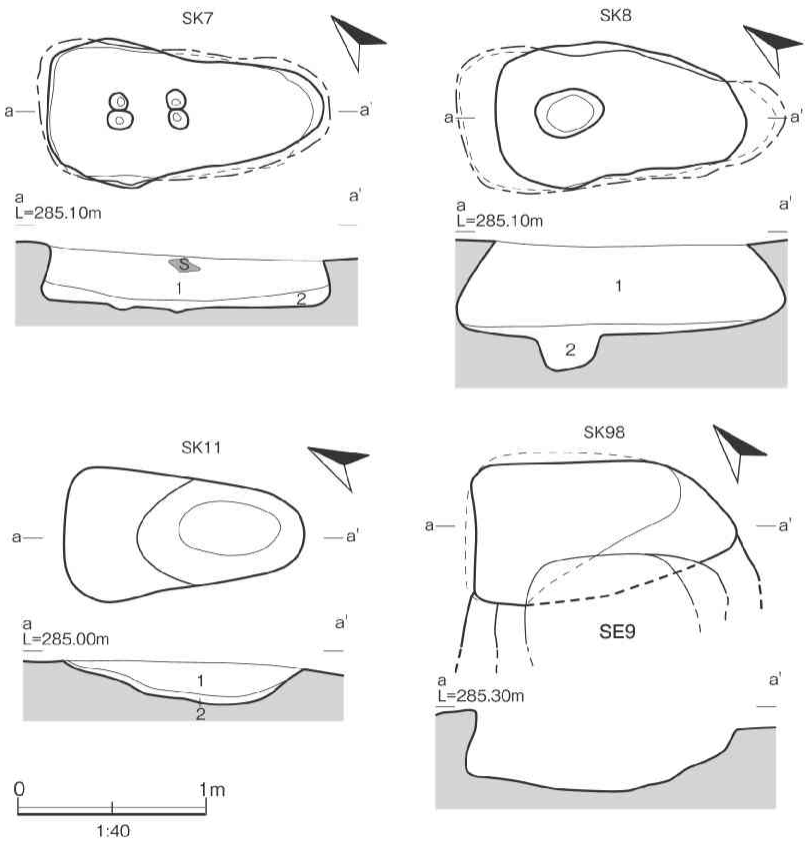
第18図　遺構配置図13



第19図　遺構配置図14

0 5m
1:100

第20図　遺構配置図15



SK7

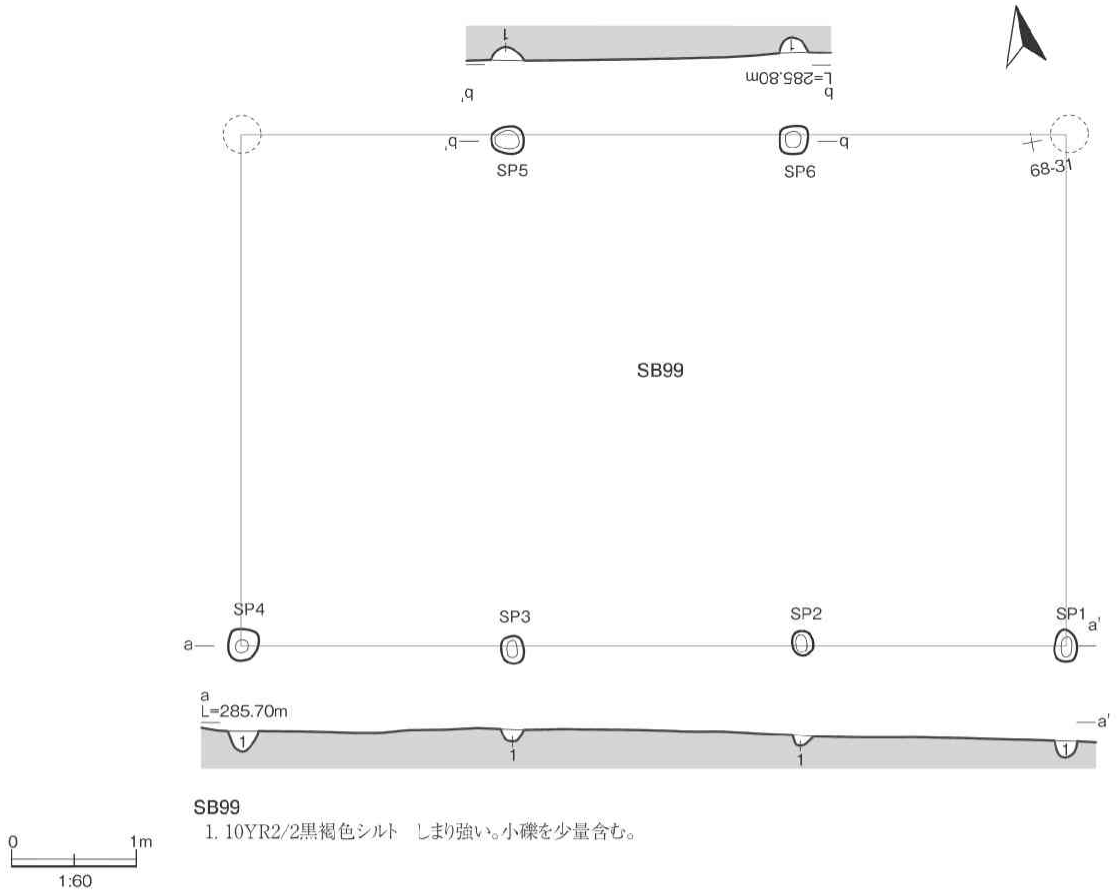
1. 10YR2/1黒色砂混じりシルト　しまりやや強い。風化礫粒を多く含む。10YR3/4暗褐色シルト・礫(Φ20cm)を含む。
2. 10YR2/1黒色砂混じりシルト　しまりやや強い。風化礫粒を多く含む。10YR3/4暗褐色シルト・礫(Φ10cm)を含む。

SK8

1. 10YR2/1黒色砂混じりシルト　しまり強い。礫(Φ10cm)をやや多く含む。10YR3/4暗褐色シルトを含む。
2. 10YR2/1黒色砂混じりシルト　しまり強い。礫(Φ10cm)・10YR3/4暗褐色シルトをやや多く含む。風化礫粒を含む。

SK11

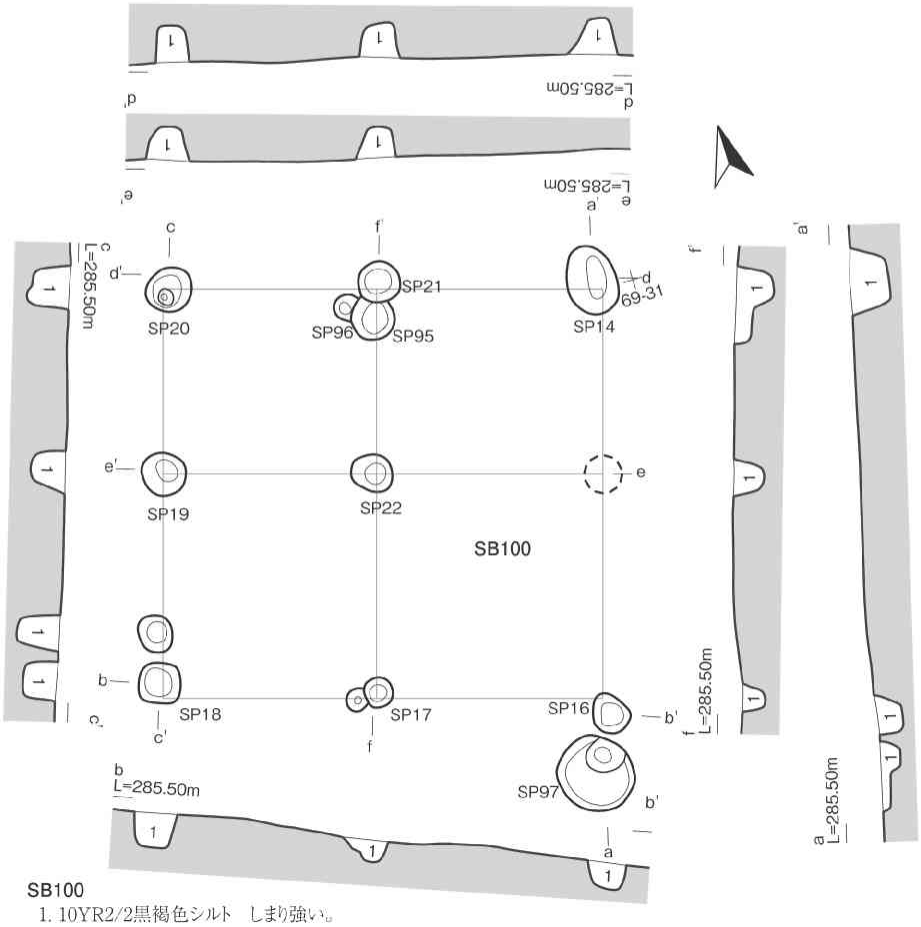
1. 10YR2/1黒色砂混じりシルト　しまり強い。
2. 10YR2/1黒色砂混じりシルト



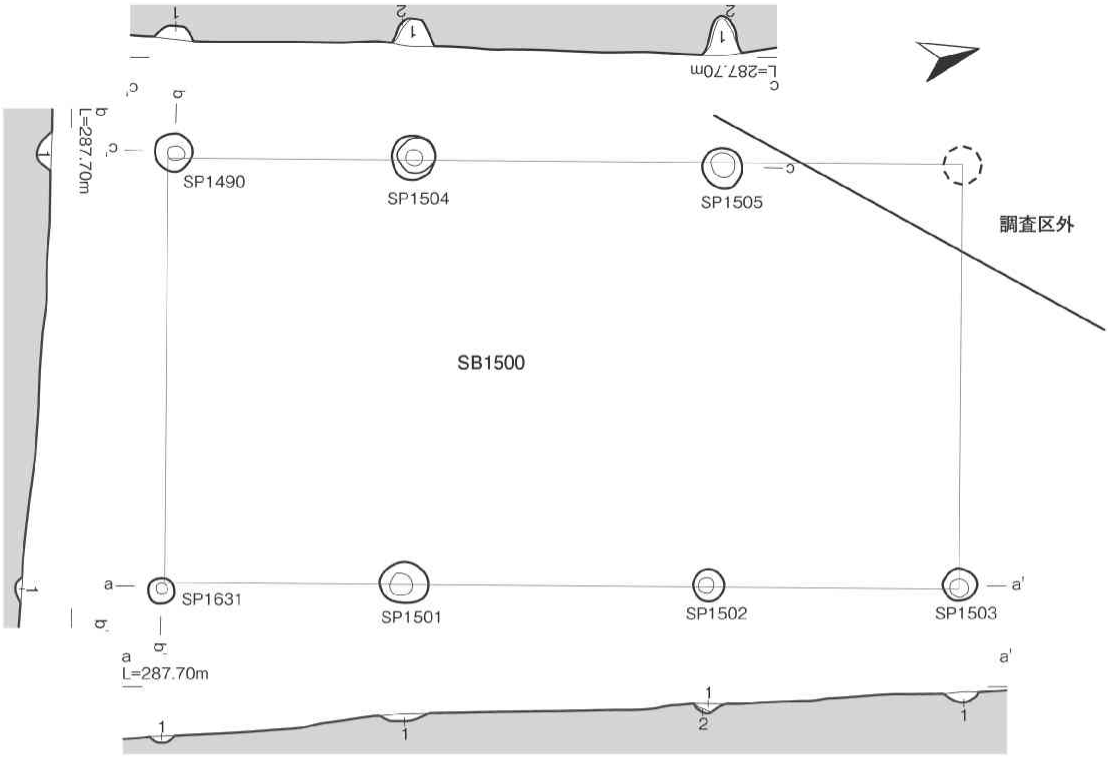
SB99

1. 10YR2/2黒褐色シルト　しまり強い。小礫を少量含む。

第21図　SK7・8・11・98陥穴、SB99掘立柱建物



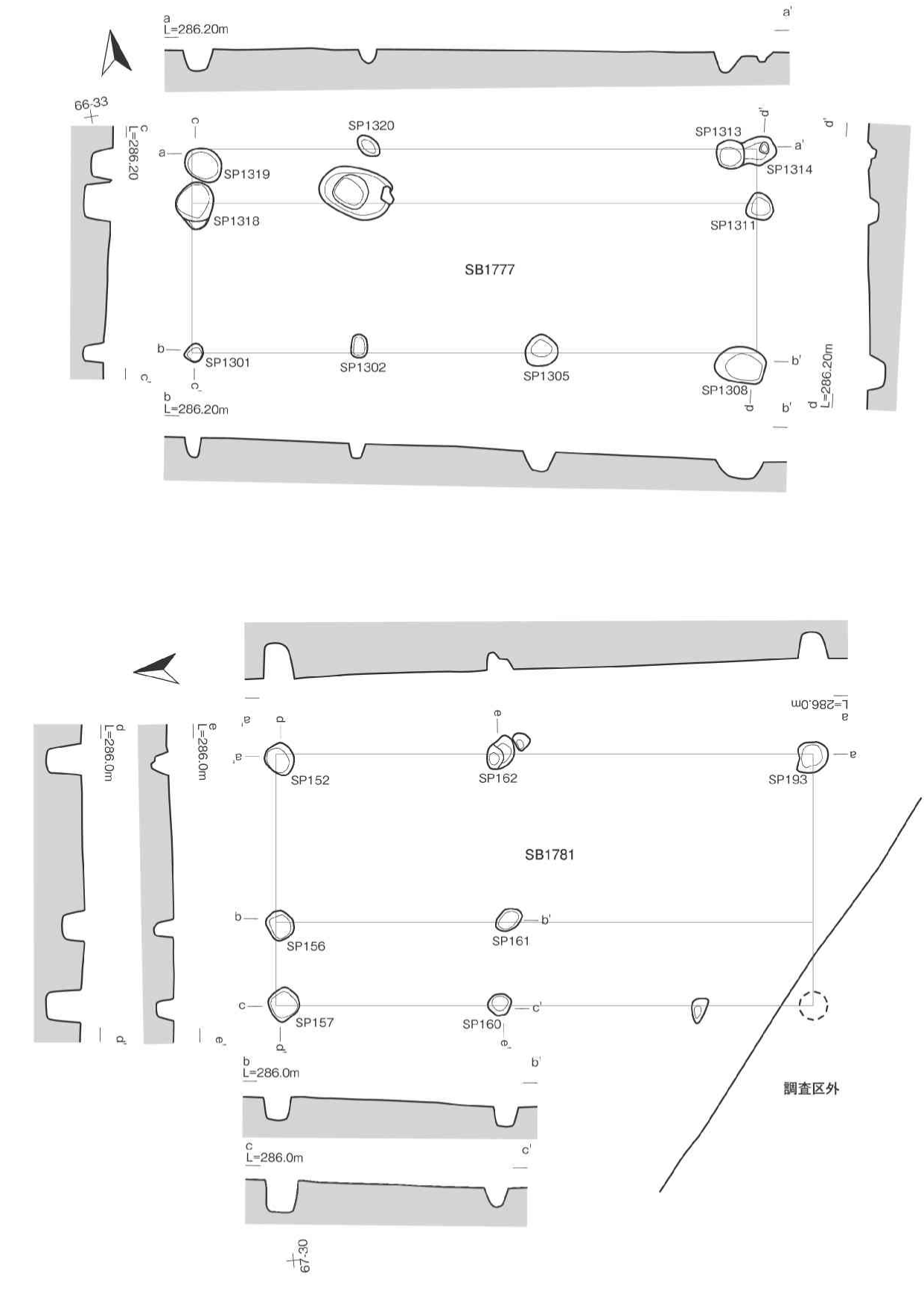
SB100
1. 10YR2/2黒褐色シルト　しまり強い。



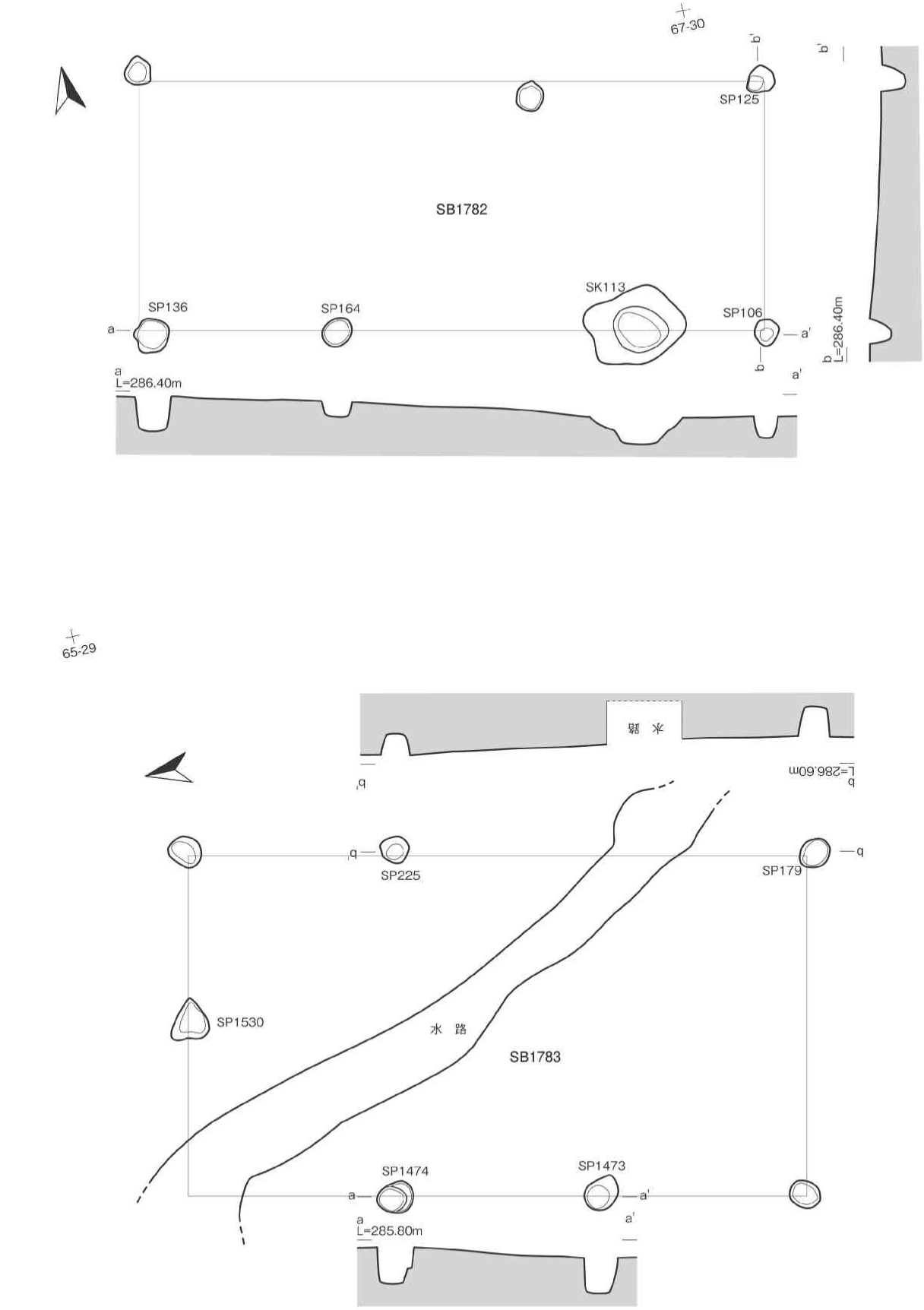
SB1500
1. 10YR2/1黒色シルト　しまり強い。粘性中。
2. 10YR2/1黒色シルト　しまり強い。粘性中。
10YR2/2黒褐色砂混じりシルトを含む。

0　1m
1:60

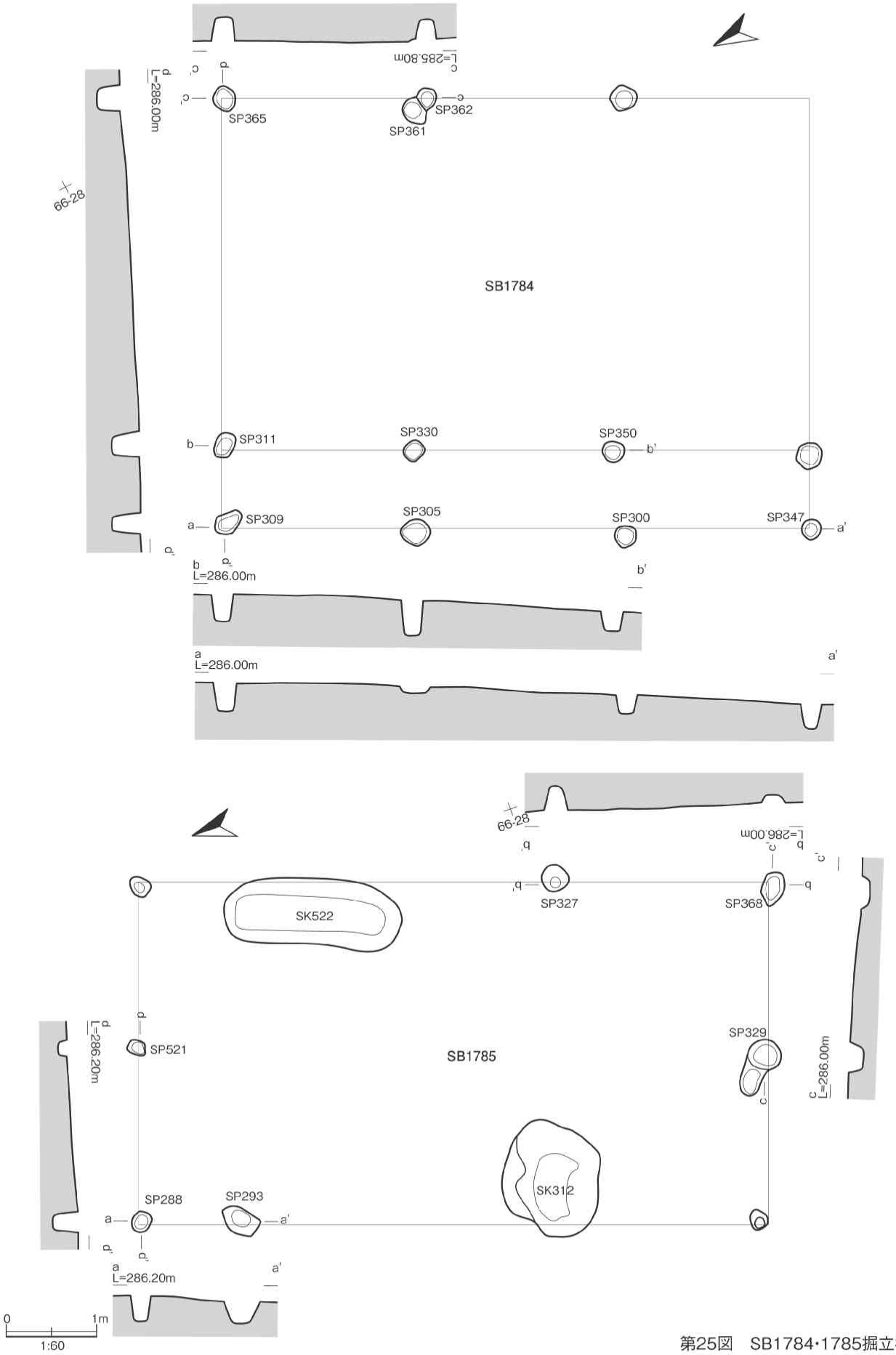
第22図　SB100・1500掘立柱建物



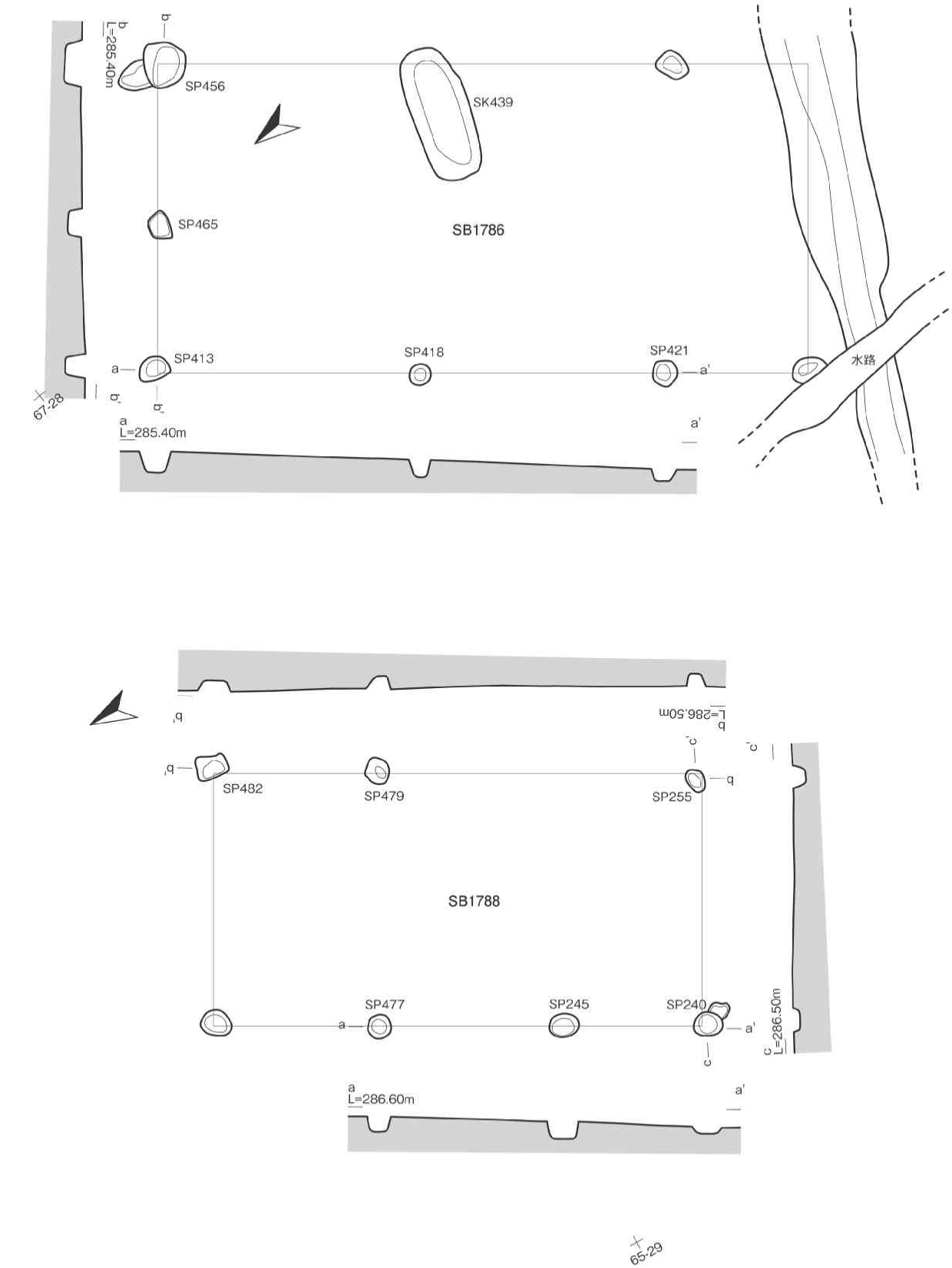
第23図　SB1777・1781掘立柱建物



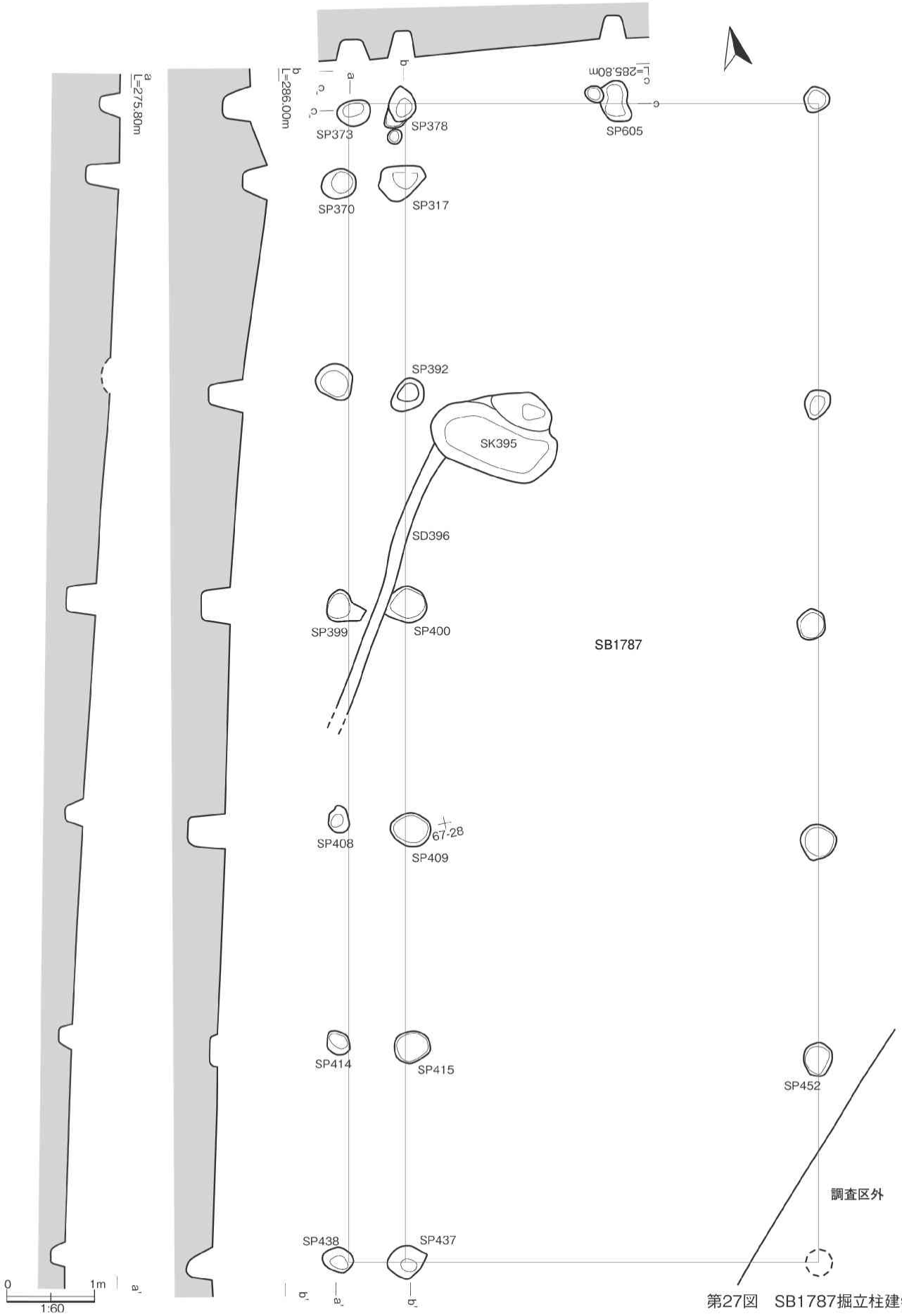
第24図　SB1782･1783掘立柱建物



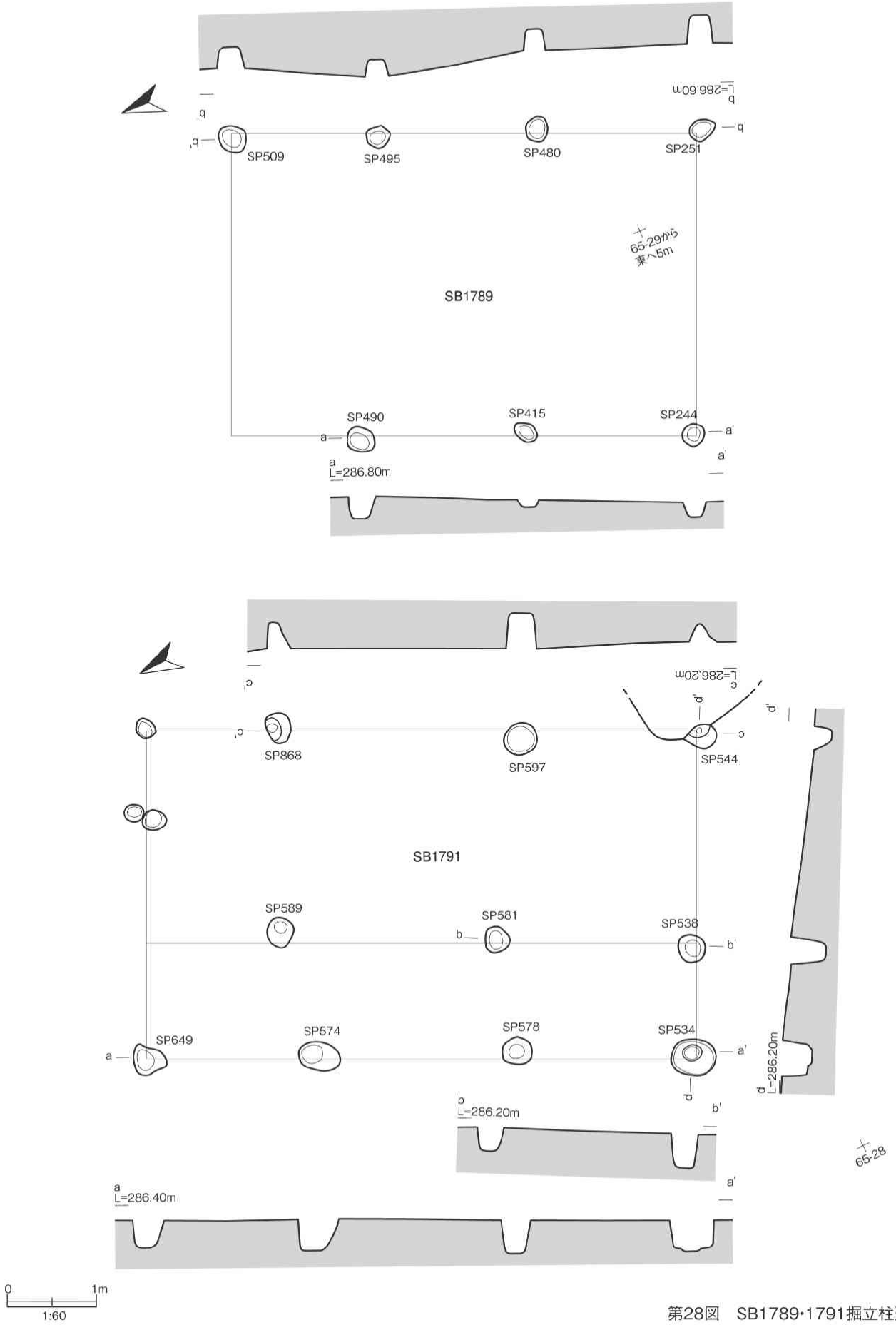
第25図　SB1784･1785掘立柱建物



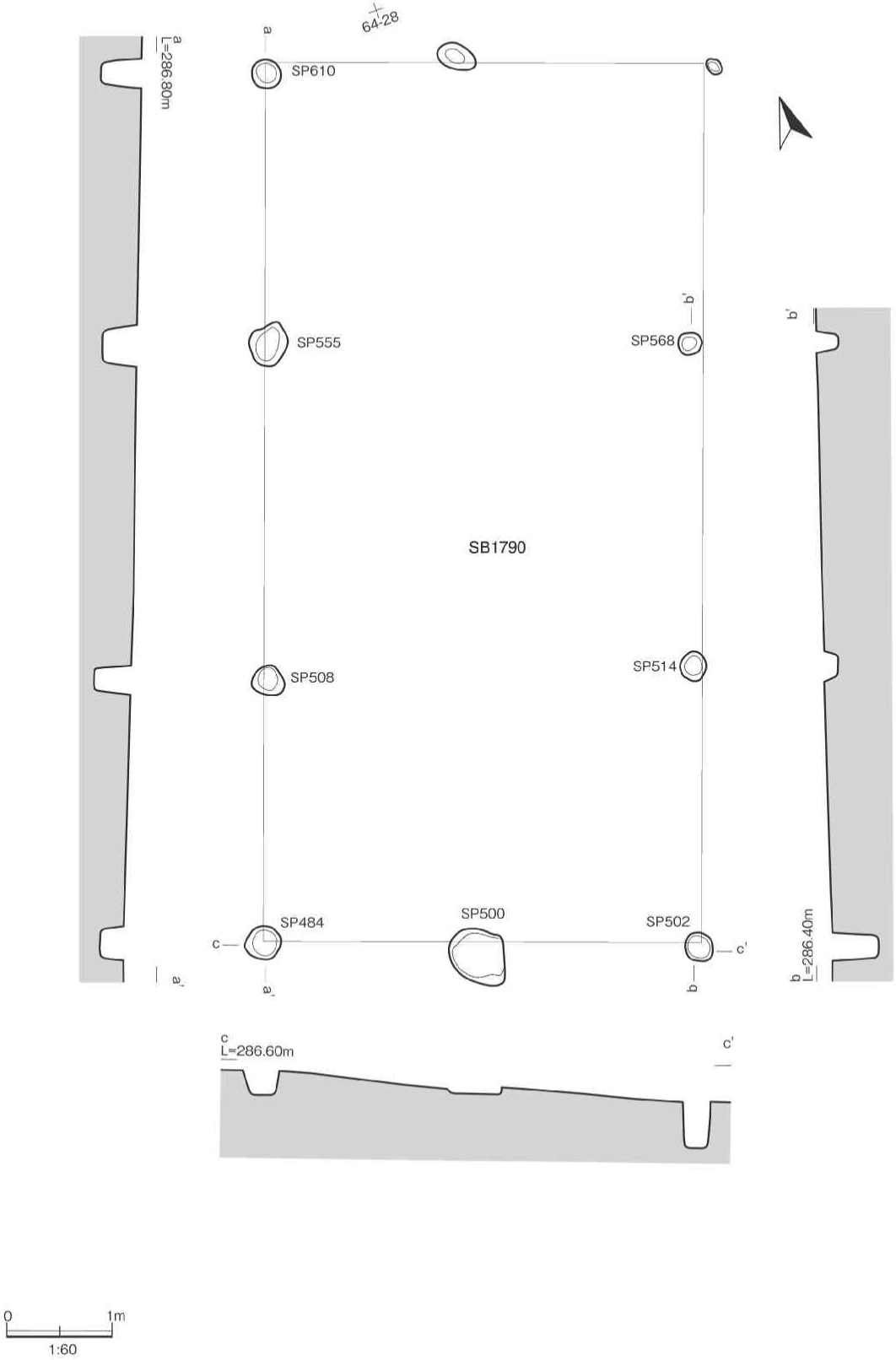
第26図　SB1786･1788掘立柱建物



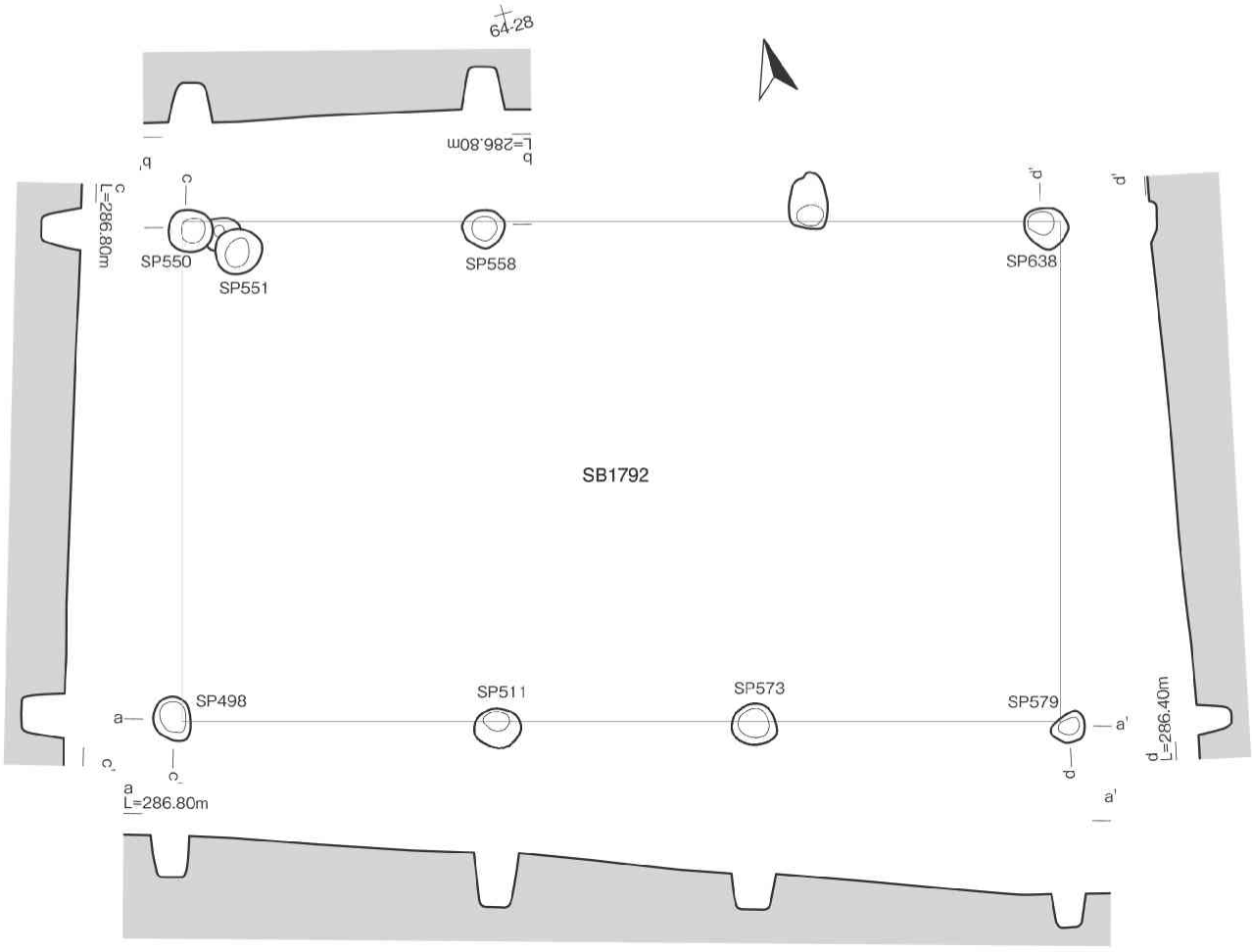
第27図　SB1787掘立柱建物

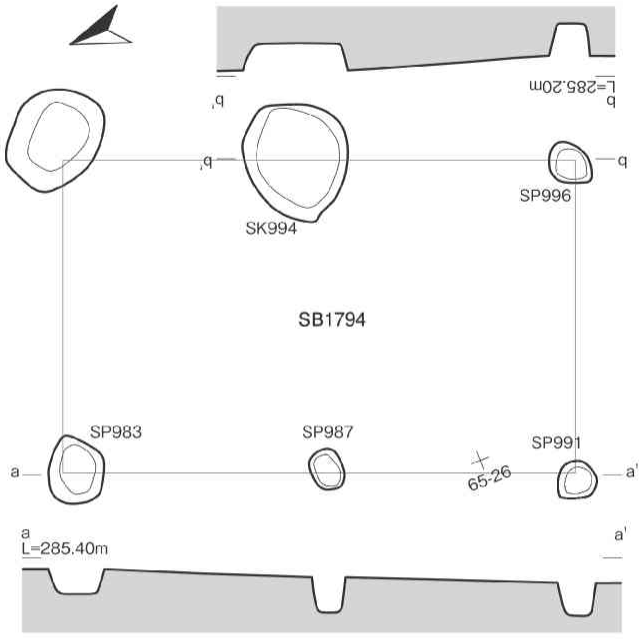


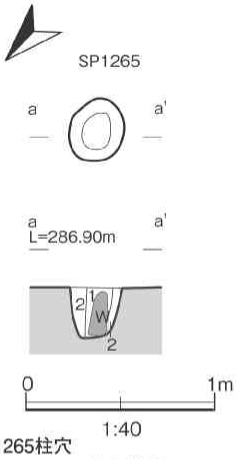
第28図　SB1789･1791掘立柱建物



第29図　SB1790掘立柱建物





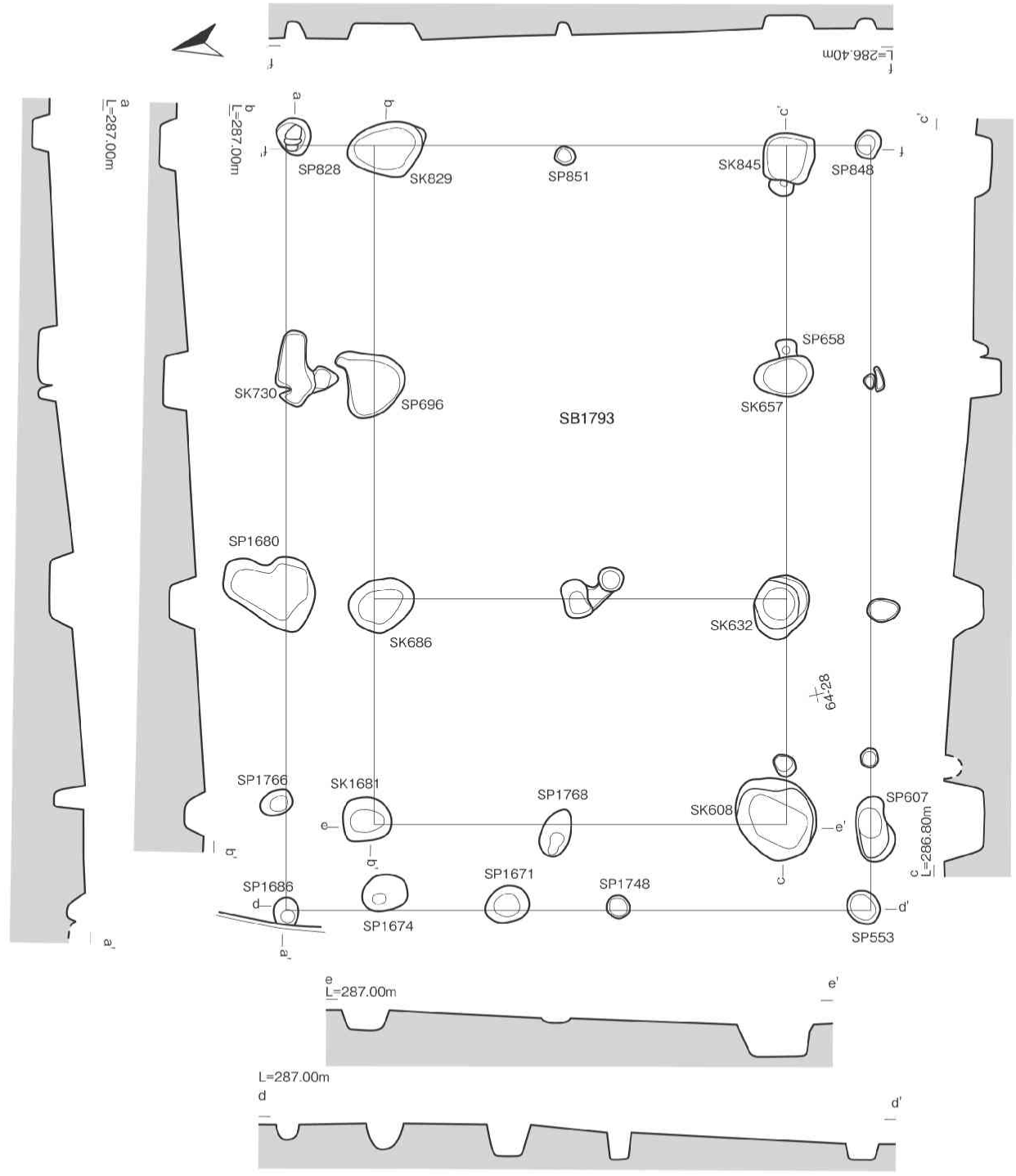


SP1265柱穴

1. 10YR1.7/1黒色粘質シルト　しまり強い。粘性強い。
2. 10YR1.7/1黒色粘質シルト　しまり強い。粘性強い。風化礫粒を少量含む。

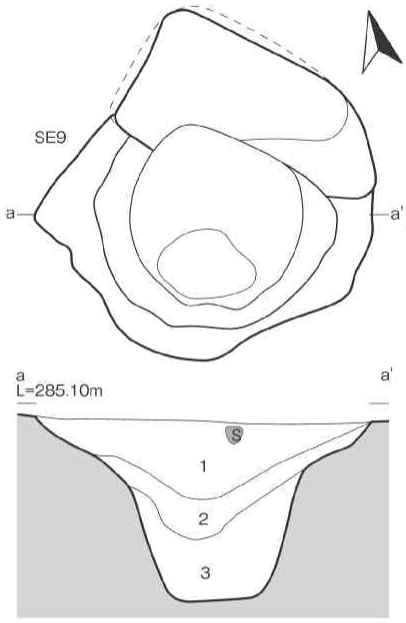
0　1m
1:60

第30図　SB1792・1794掘立柱建物、SP1265柱穴



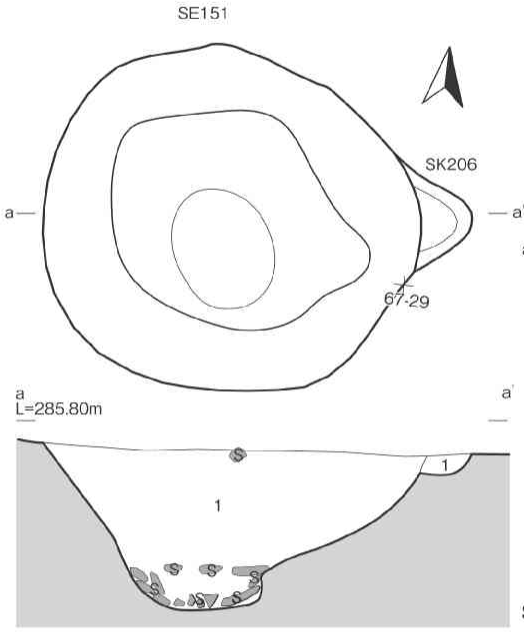
0 2m
1:80

第31図　SB1793掘立柱建物



SE9

1. 10YR2/1黒色シルト　しまり強い。粘性やや強い。小礫粒を多く含む。礫(Φ15～20cm)を含む。
2. 10YR2/1黒色粘質シルト　しまり強い。粘性強い。小礫粒を多く含む。礫(Φ15～20cm)を含む。
3. 10YR3/1黒褐色粘質シルト　しまりやや強い。粘性強い。砂質シルトを含む。

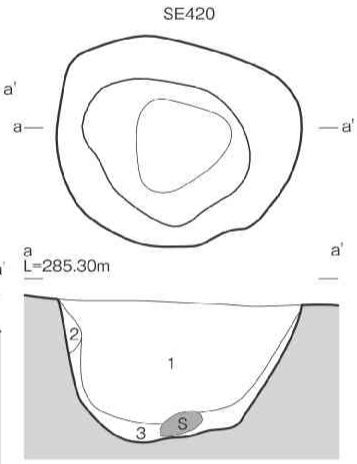


SE151

1. 10YR2/1黒色砂混じりシルト　しまり強い。検出面に茶褐色シルトおよび炭化物を含む帯があり、礫(Φ10cm程度)を少量含む。底面に礫が敷かれる。

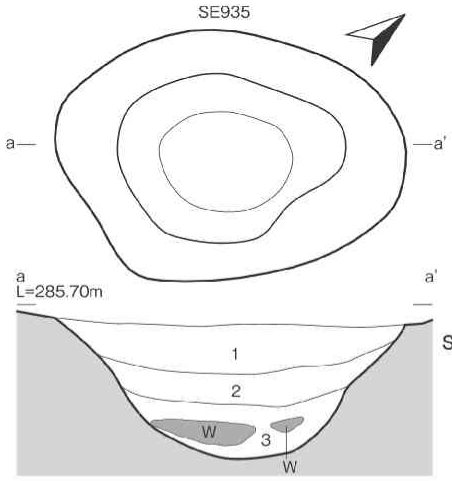
SK206

1. 10YR2/1黒色砂混じりシルト　やや黒褐色(10YR2/2)に近い。



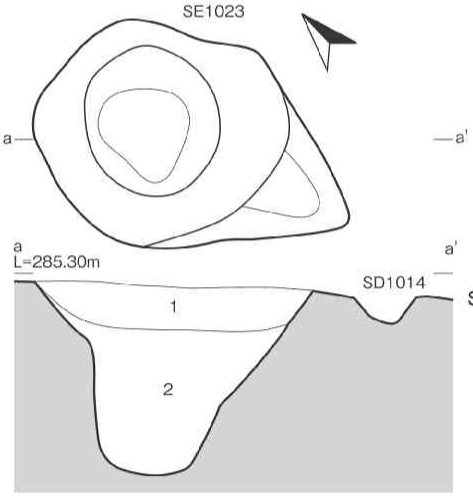
SE420

1. 10YR1.7/1黒色シルト　しまり強い。粘性やや強い。風化礫をやや多く含む。
2. 10YR1.7/1黒色粘質シルト　しまり強い。粘性強い。
3. 10YR2/1黒色砂質シルト　風化礫を少量含む。



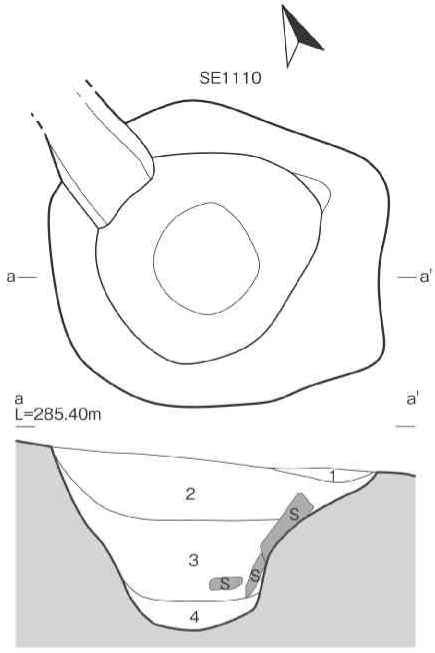
SE935

1. 10YR1.7/1黒色シルト　しまり強い。砂が少量混じる。
2. 10YR2/1黒色シルト　しまり強い。砂が少量混じる。
3. 10YR1.7/1黒色シルト　しまり強い。木片、ヨシ等を多く含む。



SE1023

1. 10YR1.7/1黒色シルト　しまり強い。砂が少量混じる。
2. 10YR1.7/1黒色シルト　しまり強い。

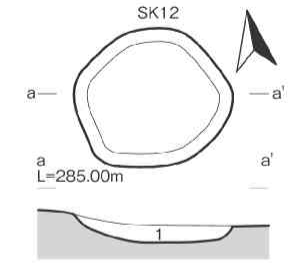


SE1110

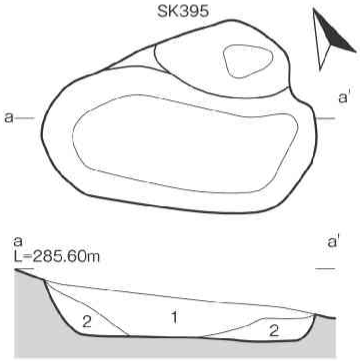
1. 10YR2/1黒色シルト　しまり強い。下層に10YR2/2黒褐色砂質シルトを含む。
2. 10YR2/2黒褐色砂混じりシルト　しまり強い。風化礫粒をやや多く含む。
3. 10YR1.7/1黒色シルト　しまり強い。
4. 10YR1.7/1黒色シルト　しまり強い。木片、ヨシ等を多く含む。

0　1m
1:40

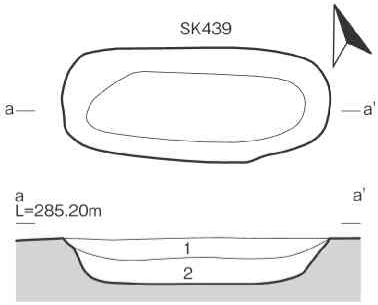
第32図　SE9・151・420・935・1023・1110井戸



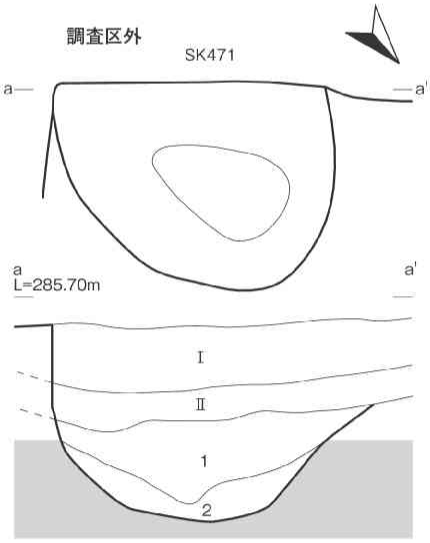
SK12
1. 10YR1.7/1黒色砂混じりシルト しまり強い。風化礫粒を多く含む。10YR3/4暗褐色シルトを含む。



SK395
1. 10YR1.7/1黒色砂混じりシルト　しまり強い。粘性やや強い。10YR3/1黒褐色砂が混じる。
2. 10YR3/1黒褐色砂　10YR2/3黒褐色砂が混じる。

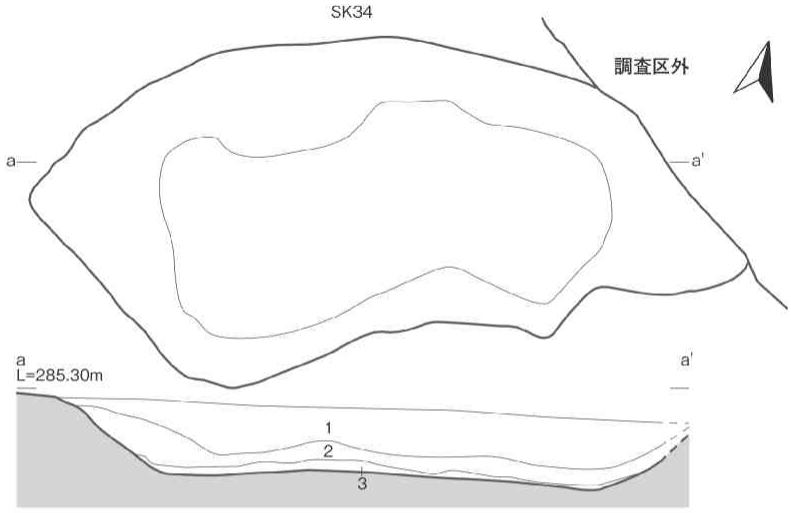


SK439
1. 10YR2/2黒色砂混じりシルト　しまり強い。上層に黒色砂混じりシルトを含む。
2. 10YR3/1黒褐色砂混じり粘質シルト　しまり強い。粘性強い。

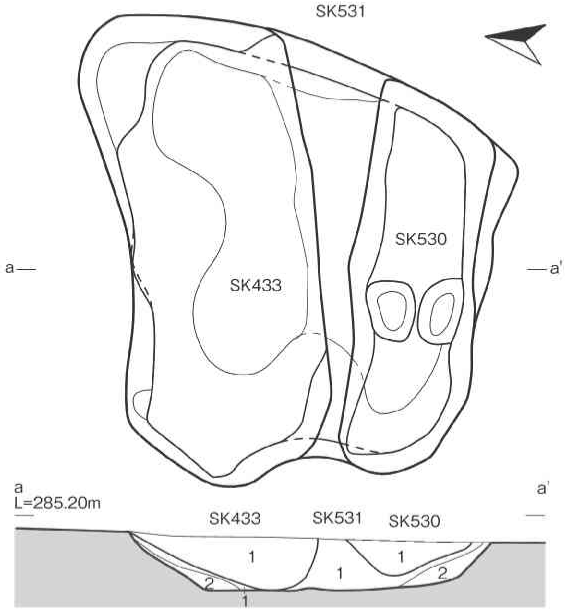


Ⅰ. 10YR3/3黒褐色シルト　しまり強い。砂利を含む。
Ⅱ. 10YR2/2黒褐色シルト　しまり強い。粘性弱い。

SK471
1. 10YR2/1黒色砂混じりシルト　しまり強い。粘性やや強い。風化礫粒をやや多く含む。
2. 10YR3/1黒褐色砂質シルト　しまりやや強い。粘性やや強い。



SK34
1. 10YR1.7/1黒色砂混じりシルト　しまり強い。粘性やや強い。
2. 10YR2/1黒色砂混じりシルト　しまり強い。粘性やや強い。
3. 10YR2/2黒褐色砂質シルト　しまりやや強い。



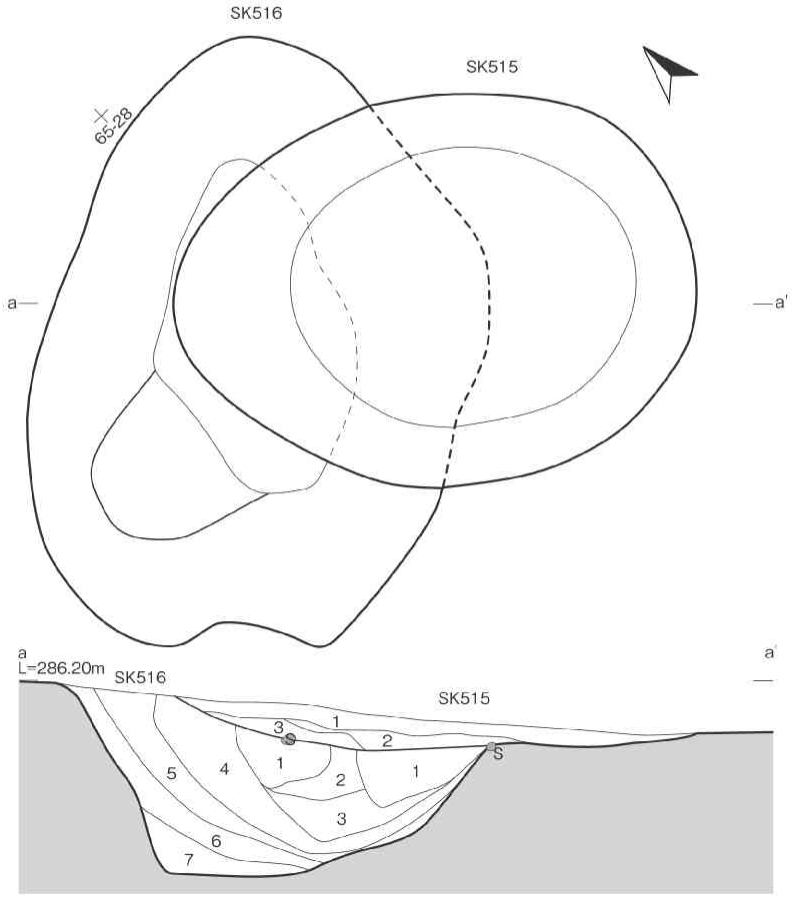
SK433
1. 10YR1.7/1黒色砂混じりシルト　しまり強い。粘性やや強い。風化礫粒をやや多く含む。

SK530
1. 10YR2/1黒色シルト　しまり強い。粘性やや強い。風化礫粒をやや多く含む。

SK531
1. 10YR3/2黒褐色砂　しまり強い。粘性弱い。上層に黒色シルトが混じる。
2. 10YR1.7/1黒色砂混じり粘土　しまり強い。粘性強い。

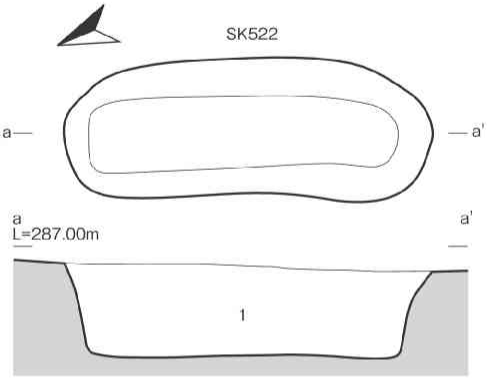
0　1m
1:40

第33図　SK12・34・395・433・530・531・439・471土坑

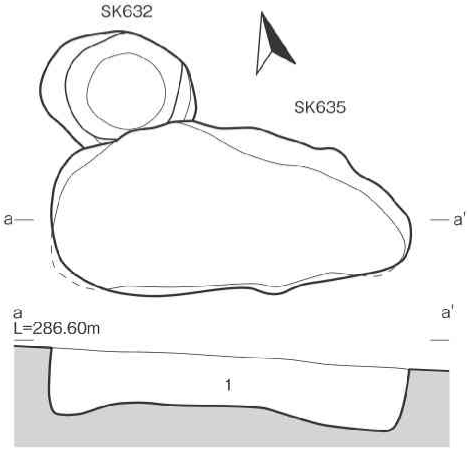


SK515
1. 10YR2/1黒色砂質シルト　しまりやや弱い。炭化物を表層に含む。
2. 10YR3/3暗褐色砂　10YR2/1黒色シルトを含む。
3. 10YR2/1黒色シルト　しまりやや弱い。炭化物を上層に含む。

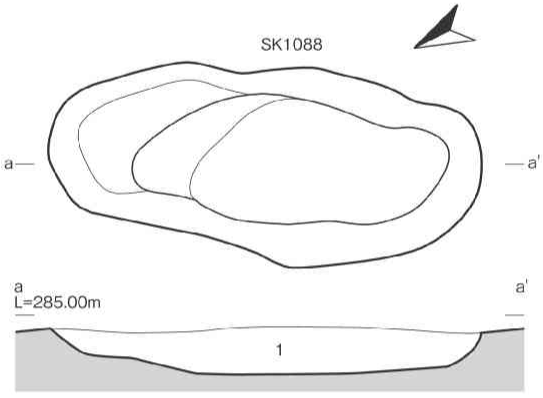
SK516
1. 10YR1.7/1黒色砂混じりシルト　しまり強い。風化礫、風化礫粒含む。
2. 10YR1.7/1黒色砂混じりシルト　しまり強い。一部に黒褐色砂含む。
3. 10YR3/4暗褐色砂質シルト　しまり強い。上部に礫を含む。
4. 10YR2/2黒褐色砂質シルト　しまり強い。下部に暗褐色砂質シルトを多く含む。
5. 10YR3/4暗褐色砂　しまり弱い。粘性弱い。風化礫粒を多く含む。
6. 10YR1.7/1黒色シルト　しまり強い。風化礫粒を多く含む。
7. 10YR2/3黒褐色シルト　しまり強い。粘性やや強い。風化礫粒を多く含む。



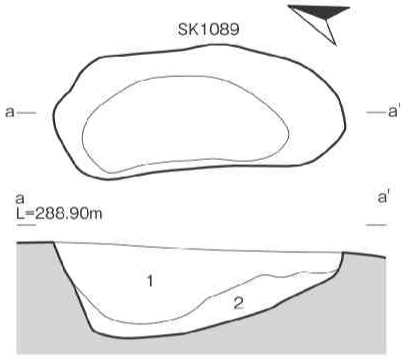
SK522土坑
1. 10YR1.7/1黒色砂混じりシルト　しまり強い。礫(Φ3cm)、風化礫粒を多く含む。



SK635
1. 10YR1.7/1黒色シルト　しまり強い。風化礫粒を多く含む。風化礫を底部に多く含む。



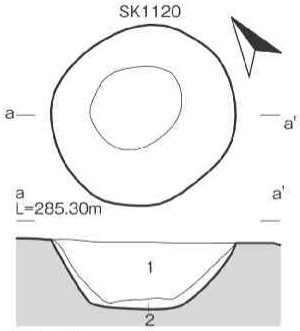
SK1088
1. 10YR1.7/1黒色シルト　しまり強い。



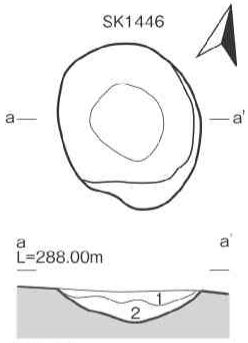
SK1089
1. 10YR1.7/1黒色シルト　しまり強い。風化礫・風化礫粒を多く含む。
2. 10YR3/2黒褐色シルト　しまり強い。粘性やや強い。

0　1m
1:40

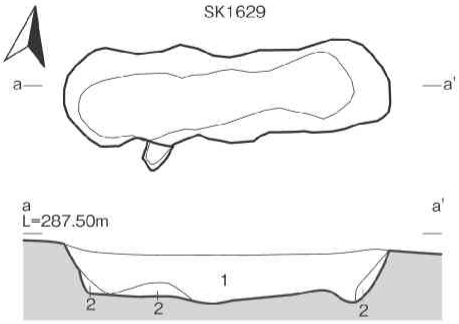
第34図　SK515・516・522・635・1088・1089土坑



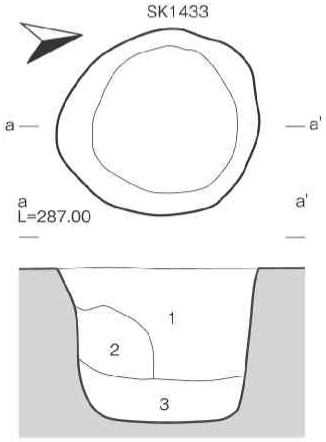
SK1120
1. 10YR2/1黒色シルト　しまり強い。風化礫粒を含む。
2. 10YR2/2黒褐色砂



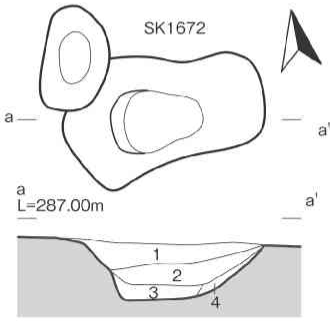
SK1446
1. 10YR2/1黒色シルト
2. 10YR2/2黒褐色砂混じりシルト 黒色シルト含む。



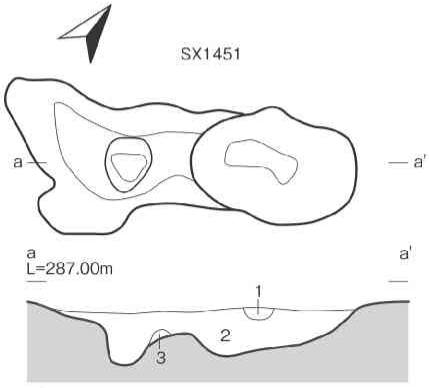
SK1629
1. 10YR2/1黒色シルト　しまり強い。風化礫粒をやや多く含む。
2. 10YR2/2黒褐色シルト　しまり強い。風化礫粒を少量含む。



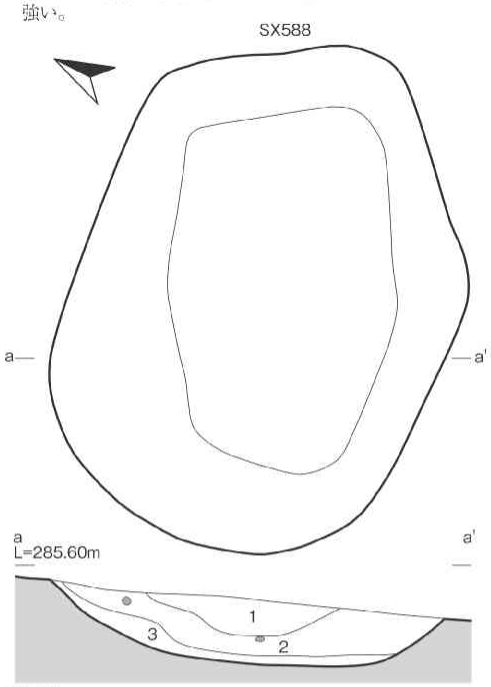
SK1433
1. 10YR2/1黒色シルト　しまりやや強い。粘性やや強い。
2. 10YR2/1黒色シルト　しまりやや強い。粘性強い。暗褐色粘土のブロックを含む。
3. 10YR3/4暗褐色砂混じりシルト　しまり強い。



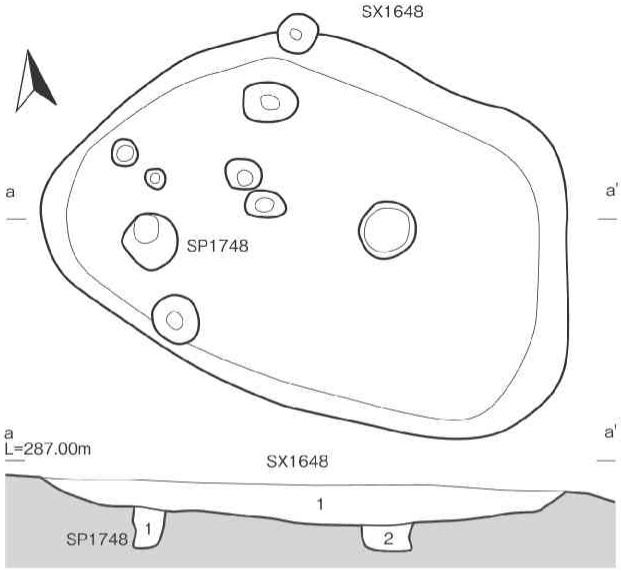
SK1672
1. 10YR2/1黒褐色シルト　粘性やや強い。
2. 10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強い。
3. 10YR2/2黒褐色シルト　粘性強い。
4. 10YR3/3暗褐色シルト



SX1451
1. 10YR3/4暗褐色シルト
2. 10YR2/2黒褐色シルト
3. 10YR3/4暗褐色砂



SX588
1. 10YR2/2黒褐色砂質シルト　しまりやや強い。粘性弱い。10YR3/1黒褐色砂質シルトを含む。
2. 10YR2/1黒色シルト　しまり強い。粘性やや強い。礫を少量含む。
3. 10YR2/2黒褐色砂　しまり強い。粘性弱い。

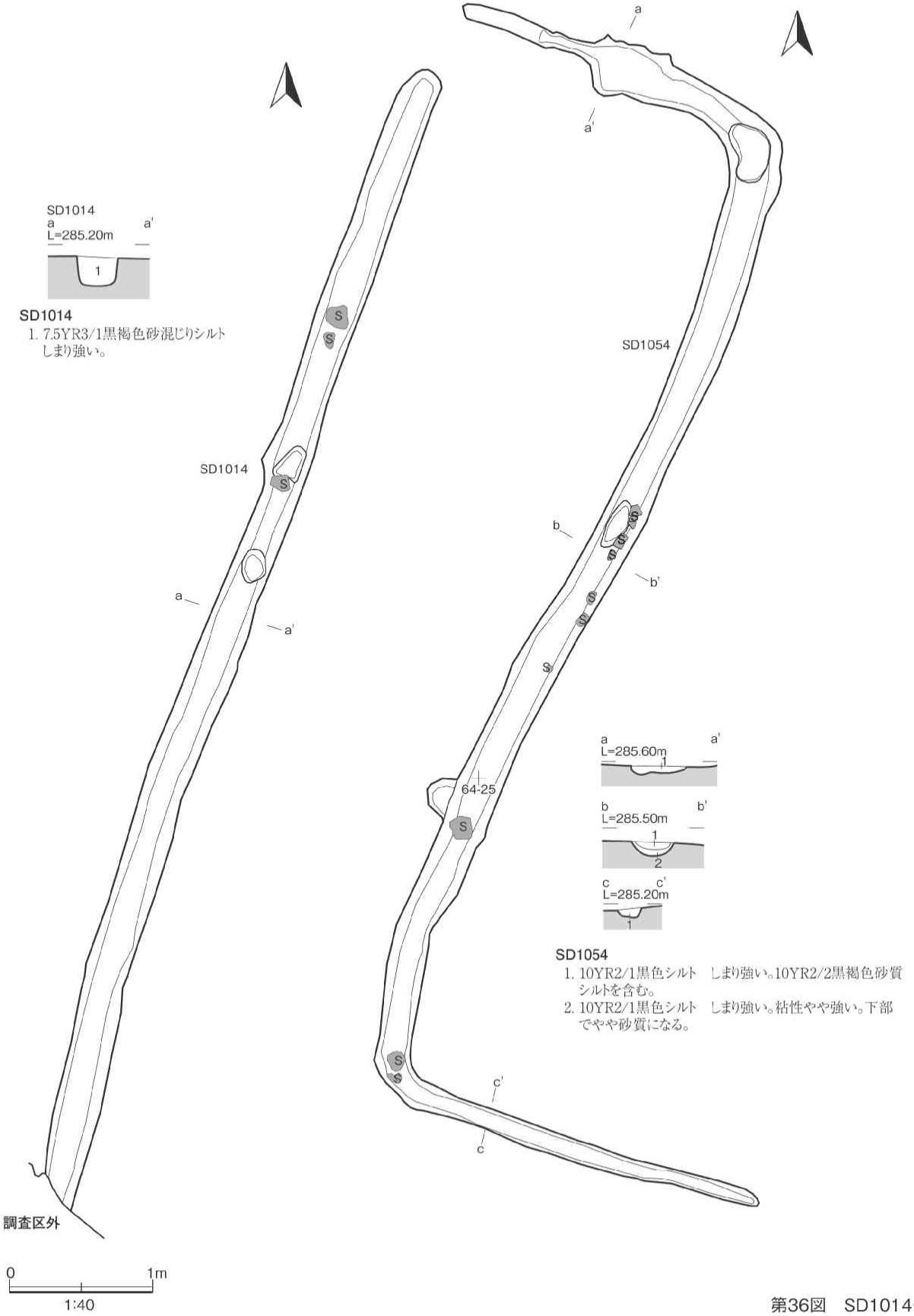


SX1648
1. 10YR2/1黒色シルト　しまり強い。風化礫をやや多く含む。
2. 10YR2/2黒褐色シルト　しまり強い。風化礫を少量含む。

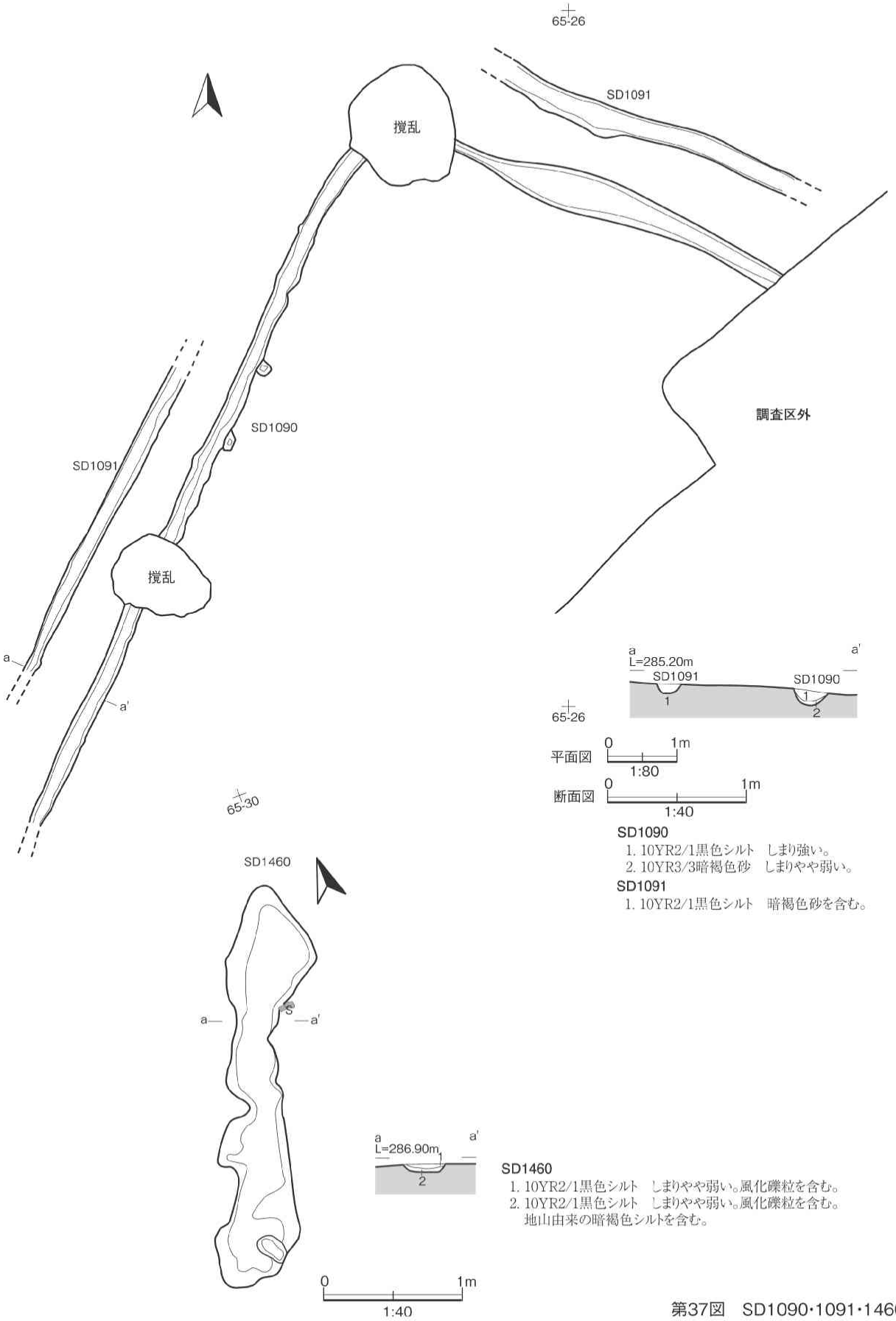
SP1748
1. 10YR2/2黒褐色シルト　しまり強い。風化礫を少量含む。

0　1m
1:40

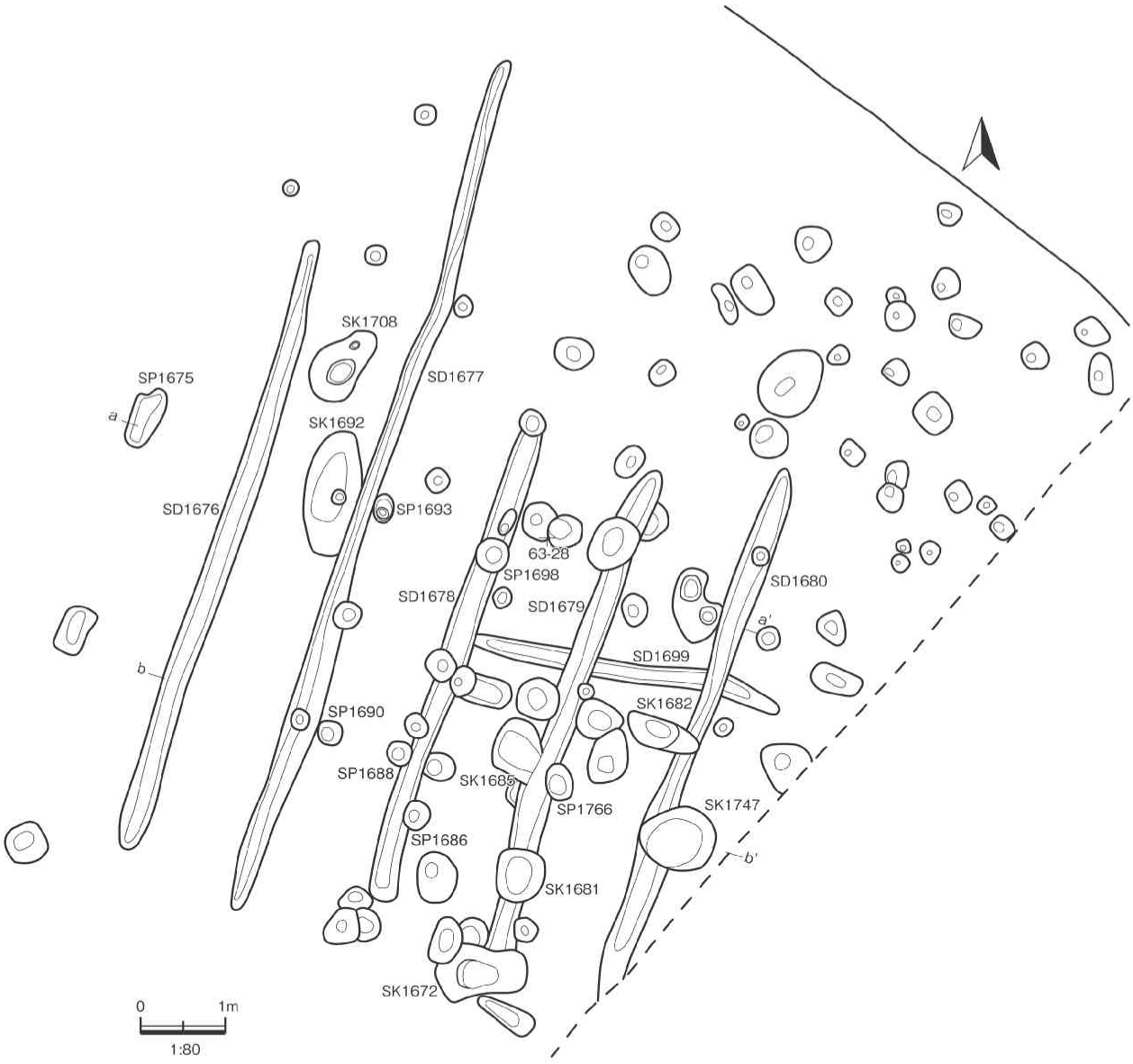
第35図　SK1120・1433・1446・1629・1672土坑、SX588・1451・1648性格不明遺構

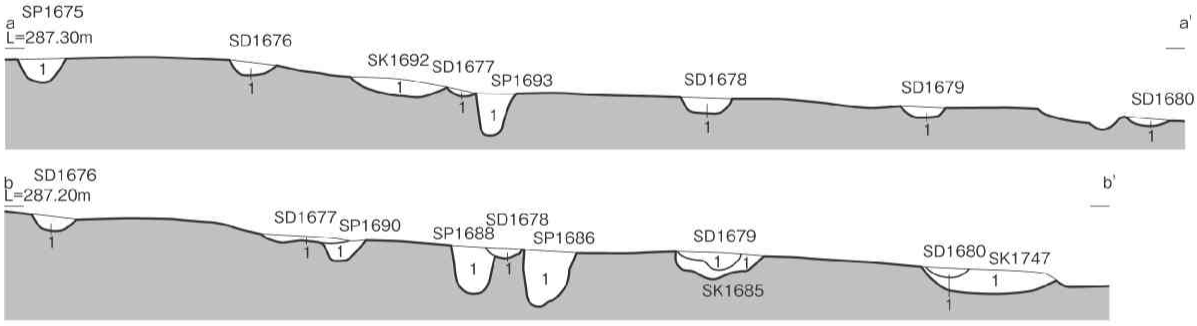


第36図　SD1014・1054溝



第37図　SD1090・1091・1460溝





SD1676・1677・1678・1679・1680
1. 10YR2/2黒褐色砂質シルト　風化礫を含む。

SP1675
1. 10YR2/2黒褐色砂質シルト

SK1685
1. 10YR2/3黒褐色シルト

SP1686
1. 10YR2/3黒褐色シルト

SP1688
1. 10YR2/3黒褐色シルト

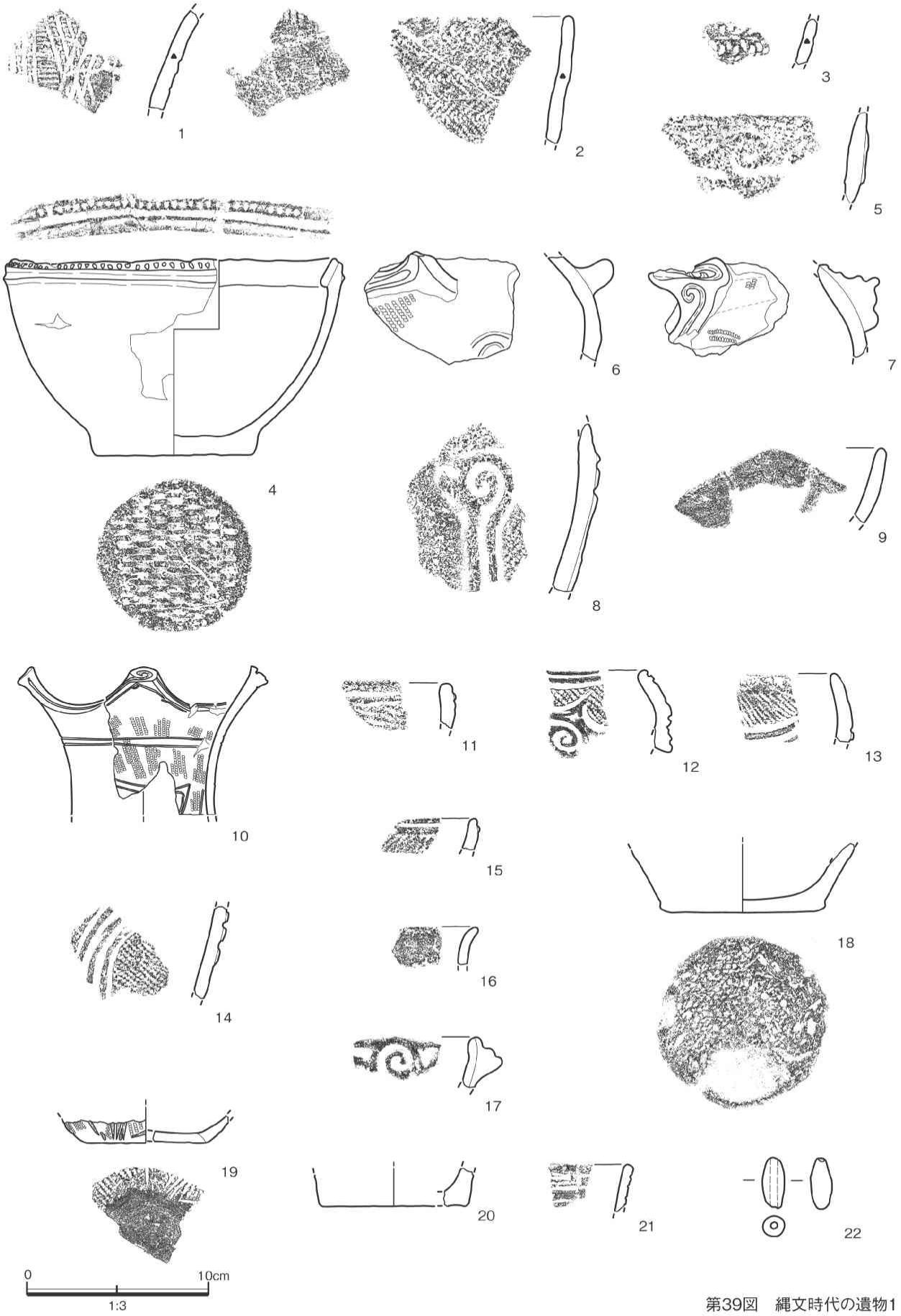
SP1690
1. 10YR2/1黒色砂質シルト

SK1692
1. 10YR2/3黒褐色シルト

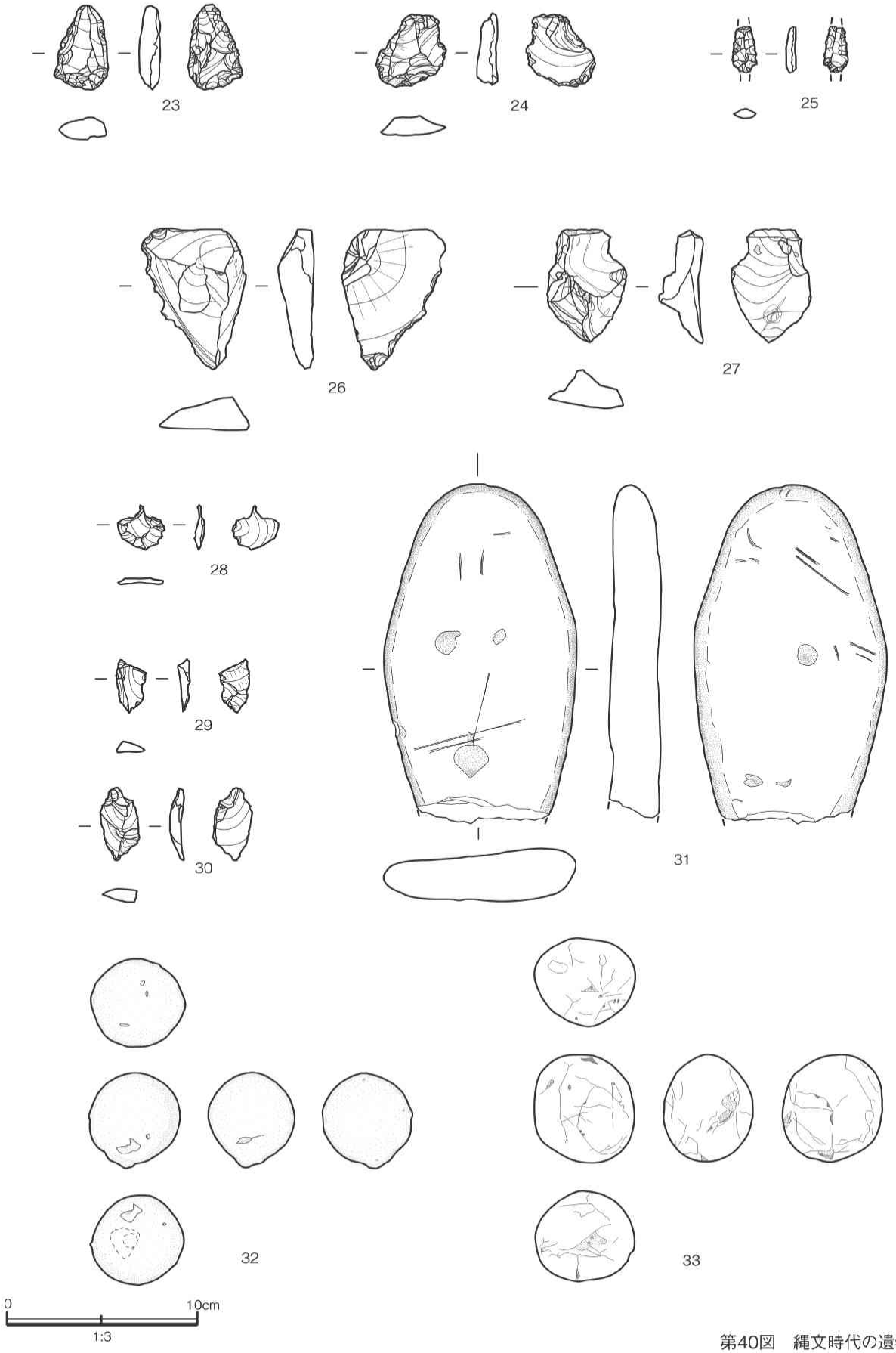
SP1693
1. 10YR2/3黒褐色シルト

SK1747
1. 10YR1.7/1黒色シルト

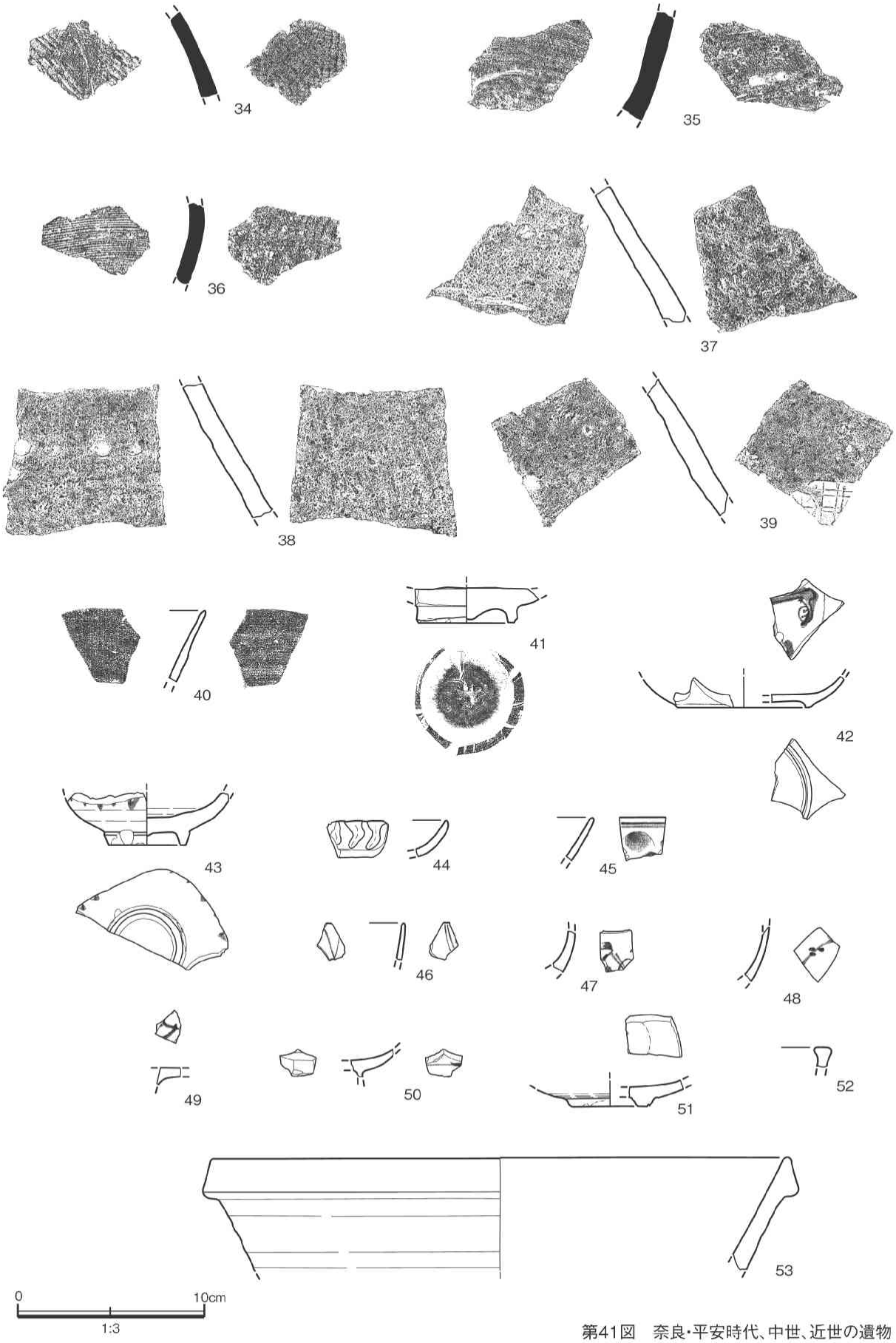
第38図　SD1676～1680・1699溝他



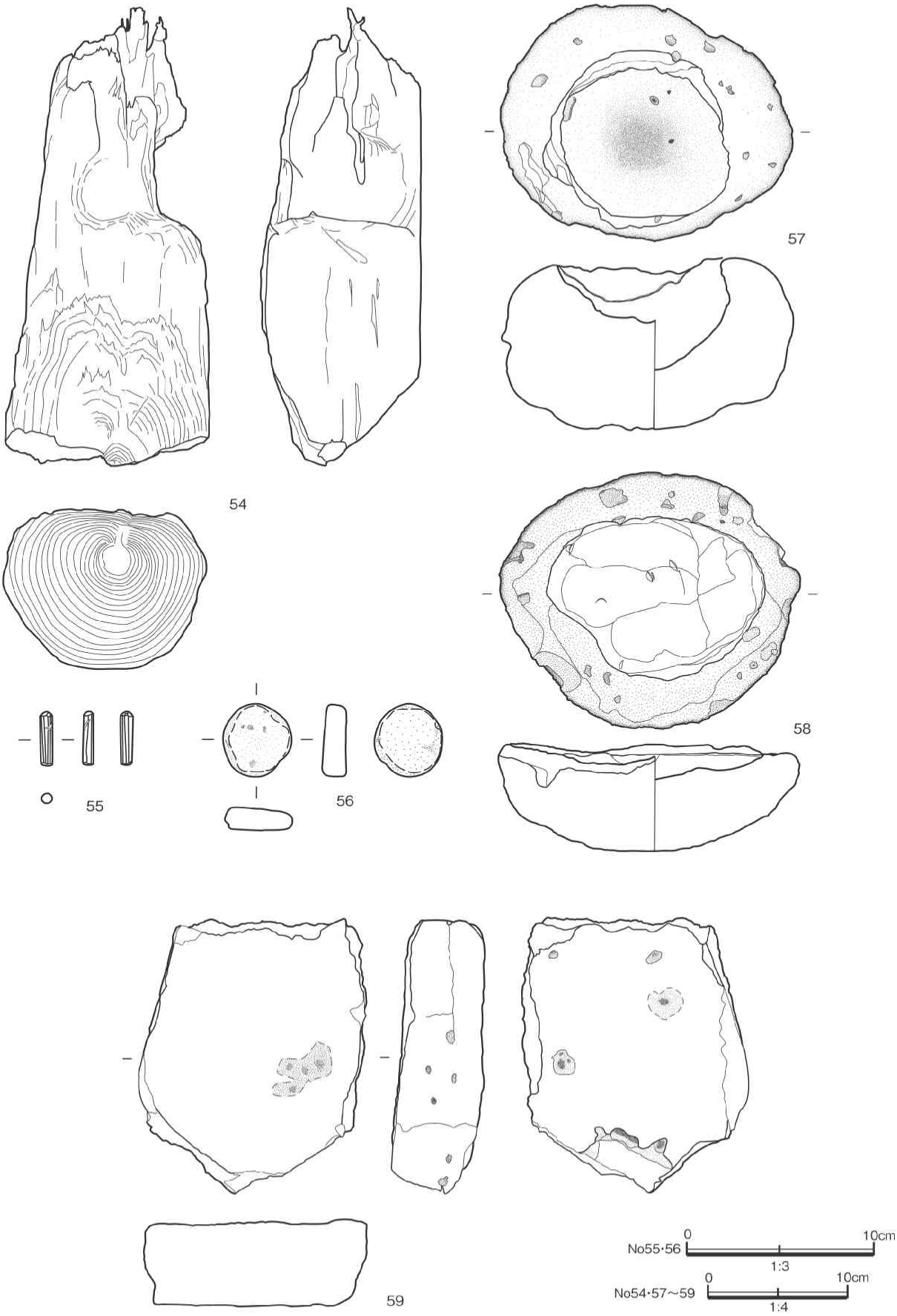
第39図　縄文時代の遺物1



第40図　縄文時代の遺物2



第41図　奈良・平安時代、中世、近世の遺物



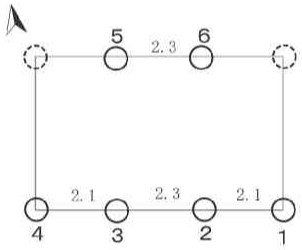
第42図　その他の遺物

※掘立柱建物観察表注

1．位置：検出グリッド
2．規模：梁と桁の長さから算出
3．構造：柱配置からの間取り
4．略図縮尺：1／200
5．柱間寸法：m

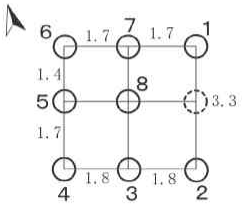
表1　掘立柱建物観察表（1）

遺構番号　SB99
図版番号　第21図
位　　置　68-32NE
長軸方向　N-80°-W
規　　模　26.65㎡
構　　造　1×3間
備　　考



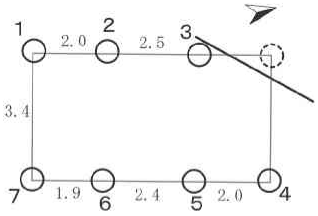
No.	柱穴番号	柱穴平面形	長軸cm	短軸cm	深さcm
1	SP1	楕円形	25	18	12
2	SP2	円形	20	17	10
3	SP3	楕円形	22	18	10
4	SP4	隅丸方形	25	23	16
5	SP5	楕円形	26	22	11
6	SP6	隅丸方形	23	22	15

遺構番号　SB100
図版番号　第22図
位　　置　69-32NE
長軸方向　N-18°-E
規　　模　11.88㎡
構　　造　2×2間　総柱
備　　考



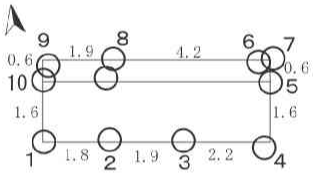
No.	柱穴番号	柱穴平面形	長軸cm	短軸cm	深さcm
1	SP14	楕円形	55	40	30
2	SP16	隅丸方形	33	26	25
3	SP17	円形	25	25	16
4	SP18	隅丸方形	33	33	28
5	SP19	円形	38	33	26
6	SP20	円形	40	35	33
7	SP21	円形	34	34	25
8	SP22	楕円形	35	30	—

遺構番号　SB1500
図版番号　第22図
位　　置　63-31SE
長軸方向　N-14°-E
規　　模　21.42㎡
構　　造　1×3間
備　　考



No.	柱穴番号	柱穴平面形	長軸cm	短軸cm	深さcm
1	SP1490	円形	30	27	13
2	SP1504	円形	37	34	23
3	SP1505	円形	35	27	32
4	SP1503	円形	25	20	7
5	SP1502	円形	23	20	8
6	SP1501	円形	40	30	5
7	SP1631	円形	22	22	5

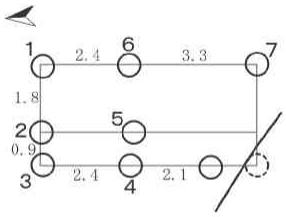
遺構番号　SB1777
図版番号　第23図
位　　置　66-33
長軸方向　N-81°-W
規　　模　9.44㎡(13.10㎡)
構　　造　1×3間　廂有り
備　　考



No.	柱穴番号	柱穴平面形	長軸cm	短軸cm	深さcm
1	SP1301	円形	20	20	21
2	SP1302	楕円形	24	17	15
3	SP1305	円形	32	32	22
4	SP1308	楕円形	53	37	18
5	SP1311	円形	27	27	9
6	SP1313	円形	37	37	20
7	SP1314	円形	40	40	9
8	SP1320	楕円形	25	18	14
9	SP1319	円形	30	30	22
10	SP1318	円形	38	38	25

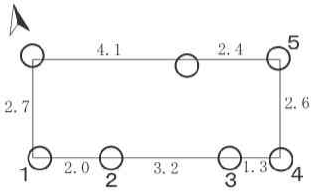
表２　掘立柱建物観察表（２）

遺構番号　SB1781
図版番号　第23図
位　　置　67-30NW
長軸方向　N-５°-E
規　　模　10.26㎡(15.39㎡)
構　　造　1×3間 廂有り
備　　考



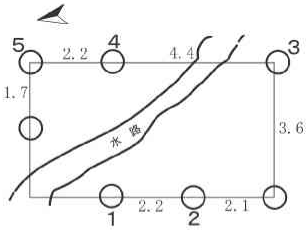
No.	柱穴番号	柱穴平面形	長軸cm	短軸cm	深さcm
1	SP152	円形	30	30	37
2	SP156	隅丸方形	30	26	23
3	SP157	円形	30	30	34
4	SP160	円形	24	24	17
5	SP161	楕円形	28	20	19
6	SP162	円形	25	25	17
7	SP193	円形	32	32	25

遺構番号　SB1782
図版番号　第24図
位　　置　66-31SE
長軸方向　N-11°-E
規　　模　17.55㎡
構　　造　1×3間
備　　考



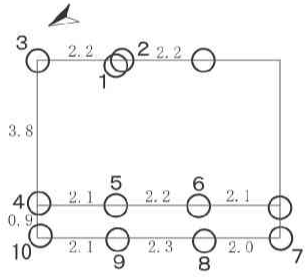
No.	柱穴番号	柱穴平面形	長軸cm	短軸cm	深さcm
1	SP136	円形	30	30	35
2	SP164	円形	32	27	15
3	SK113	不整形	90	67	28
4	SP106	円形	25	25	22
5	SP125	円形	22	22	24

遺構番号　SB1783
図版番号　第24図
位　　置　65-30
長軸方向　N-12°-E
規　　模　23.76㎡
構　　造　2×3間
備　　考



No.	柱穴番号	柱穴平面形	長軸cm	短軸cm	深さcm
1	SP1474	楕円形	44	30	38
2	SP1473	楕円形	35	31	38
3	SP179	円形	30	30	31
4	SP225	円形	30	28	21
5	SP1530	不整形	45	32	6

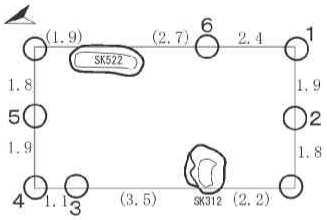
遺構番号　SB1784
図版番号　第25図
位　　置　66-29NE
長軸方向　N-27°-E
規　　模　24.32㎡(30.08㎡)
構　　造　1×3間 廂有り
備　　考



No.	柱穴番号	柱穴平面形	長軸cm	短軸cm	深さcm
1	SP361	円形	22	20	26
2	SP362	円形	21	18	22
3	SP365	円形	26	22	25
4	SP311	円形	28	22	29
5	SP330	円形	23	23	38
6	SP350	円形	22	22	21
7	SP347	円形	25	25	27
8	SP300	円形	33	30	20
9	SP305	円形	22	18	7
10	SP309	円形	22	22	31

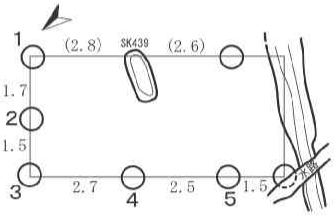
表３　掘立柱建物観察表（３）

遺構番号　SB1785
図版番号　第25図
位　　置　65-29SE
長軸方向　N-19°-E
規　　模　25.53㎡
構　　造　2×3間
備　　考



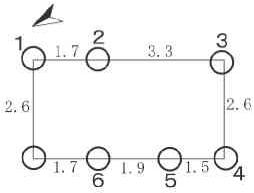
No.	柱穴番号	柱穴平面形	長軸cm	短軸cm	深さcm
1	SP368	楕円形	33	23	8
2	SP329	円形	33	30	14
3	SP293	円形	42	28	21
4	SP288	円形	22	20	26
5	SP521	円形	17	14	9
6	SP327	円形	30	30	26

遺構番号　SB1786
図版番号　第26図
位　　置　67-29NE
長軸方向　N-40°-E
規　　模　21.44㎡
構　　造　2×3間
備　　考



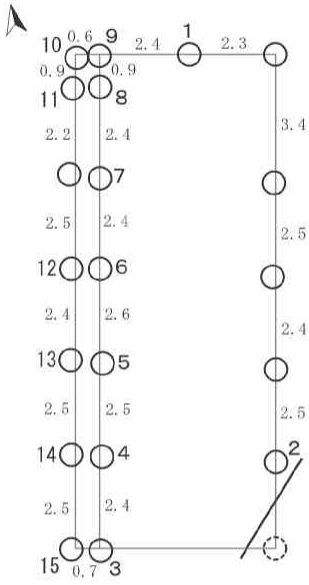
No.	柱穴番号	柱穴平面形	長軸cm	短軸cm	深さcm
1	SP456	隅丸方形	55	26	18
2	SP465	隅丸方形	22	18	17
3	SP413	円形	32	25	21
4	SP418	円形	20	20	17
5	SP421	円形	24	24	12

遺構番号　SB1788
図版番号　第26図
位　　置　64-29SW
長軸方向　N-28°-E
規　　模　13.26㎡
構　　造　1×3間
備　　考



No.	柱穴番号	柱穴平面形	長軸cm	短軸cm	深さcm
1	SP482	隅丸方形	32	23	10
2	SP479	円形	23	23	13
3	SP255	楕円形	24	16	13
4	SP240	円形	16	16	6
5	SP245	円形	25	25	18
6	SP477	円形	25	25	16

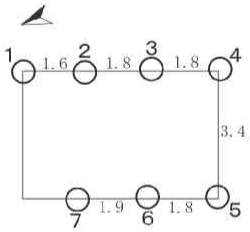
遺構番号　SB1787
図版番号　第27図
位　　置　66-28W
長軸方向　N-11°-E
規　　模　62.04㎡(69.84㎡)
構　　造　2×6間　廂有り
備　　考



No.	柱穴番号	柱穴平面形	長軸cm	短軸cm	深さcm
1	SP605	隅丸方形	27	22	26
2	SP452	円形	37	30	25
3	SP437	円形	32	32	30
4	SP415	円形	24	10	8
5	SP409	円形	42	36	41
6	SP400	円形	48	38	31
7	SP392	円形	45	40	39
8	SP317	楕円形	32	21	27
9	SP378	円形	26	26	30
10	SP373	円形	30	25	22
11	SP370	円形	38	30	37
12	SP399	円形	42	32	32
13	SP408	円形	28	23	20
14	SP414	円形	26	26	14
15	SP438	円形	16	16	16

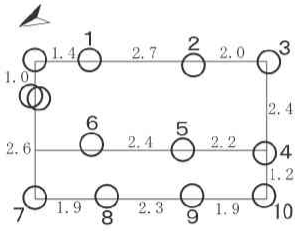
表４　掘立柱建物観察表（４）

遺構番号　SB1789
図版番号　第28図
位　　置　64-29S
長軸方向　N-20°　-E
規　　模　17.68㎡
構　　造　1×3間
備　　考



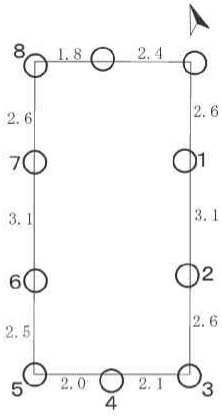
No.	柱穴番号	柱穴平面形	長軸 cm	短軸 cm	深さ cm
1	SP509	円形	30	25	24
2	SP495	円形	37	23	19
3	SP480	円形	25	25	24
4	SP251	楕円形	26	22	31
5	SP244	円形	22	22	16
6	SP415	楕円形	24	10	8
7	SP490	円形	31	26	24

遺構番号　SB1791
図版番号　第28図
位　　置　64-28S
長軸方向　N-26°　-E
規　　模　14.64㎡(21.96㎡)
構　　造　2×3間？ 廂有り
備　　考



No.	柱穴番号	柱穴平面形	長軸 cm	短軸 cm	深さ cm
1	SP868	楕円形	—	—	28
2	SP597	円形	35	35	40
3	SP544	楕円形	52	42	19
4	SP538	円形	30	30	38
5	SP581	円形	26	26	26
6	SP589	円形	—	—	—
7	SP649	楕円形	33	35	30
8	SP574	楕円形	40	32	35
9	SP578	円形	31	26	37
10	SP534	円形	45	42	34

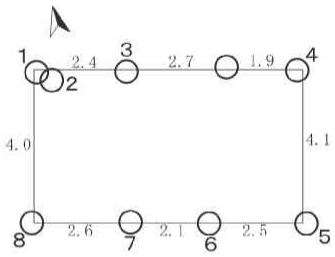
遺構番号　SB1790
図版番号　第29図
位　　置　64-29E
長軸方向　N-19°　-E
規　　模　35.28㎡
構　　造　2×3間
備　　考



No.	柱穴番号	柱穴平面形	長軸 cm	短軸 cm	深さ cm
1	SP568	円形	24	24	21
2	SP514	円形	26	23	13
3	SP502	円形	25	25	43
4	SP500	楕円形	70	50	7
5	SP484	円形	32	32	23
6	SP508	円形	30	30	34
7	SP555	楕円形	43	30	32
8	SP610	円形	30	30	38

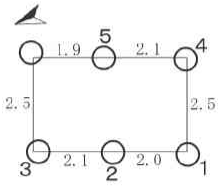
表５　掘立柱建物観察表（５）

遺構番号　SB1792
図版番号　第30図
位　　置　64-29NE
長軸方向　N-76°　-W
規　　模　28.80㎡
構　　造　1×3間
備　　考



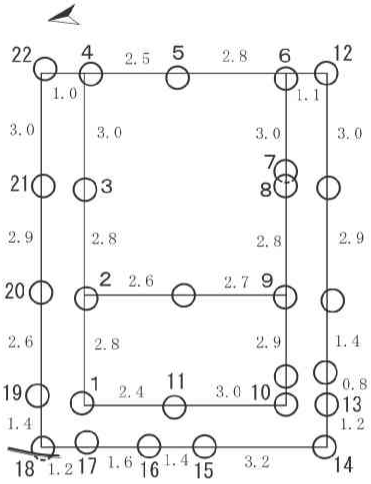
No.	柱穴番号	柱穴平面形	長軸cm	短軸cm	深さcm
1	SP550	円形	34	30	32
2	SP551	円形	38	38	36
3	SP558	円形	35	30	35
4	SP638	円形	32	32	6
5	SP579	円形	25	25	27
6	SP573	円形	35	32	31
7	SP511	円形	37	33	44
8	SP498	円形	35	35	33

遺構番号　SB1794
図版番号　第30図
位　　置　64-26SE
長軸方向　N-21°　-E
規　　模　10.25㎡
構　　造　1×2間
備　　考



No.	柱穴番号	柱穴平面形	長軸cm	短軸cm	深さcm
1	SP991	円形	29	29	25
2	SP987	円形	31	24	28
3	SP983	円形	50	42	19
4	SP996	楕円形	36	30	25
5	SK994	円形	95	95	20

遺構番号　SB1793
図版番号　第31図
位　　置　63-28
長軸方向　N-77°　-W
規　　模　46.44㎡(73.24㎡)
構　　造　2×3間 3面廂
備　　考



No.	柱穴番号	柱穴平面形	長軸cm	短軸cm	深さcm
1	SK1681	円形	58	55	25
2	SK686	楕円形	105	72	33
3	SP696	不整形	－	－	28
4	SK829	楕円形	87	60	21
5	SP851	円形	－	－	16
6	SK845	隅丸方形	65	63	－
7	SP658	円形	26	26	19
8	SK657	楕円形	64	53	38
9	SK632	円形	70	70	38
10	SK608	円形	128	97	42
11	SP1768	円形	16	14	10
12	SP848	円形	40	33	11
13	SP607	楕円形	85	40	38
14	SP553	円形	38	38	19
15	SP1748	円形	102	86	36
16	SP1671	円形	58	50	40
17	SP1674	円形	50	50	36
18	SP1686	不整形	－	－	30
19	SP1766	円形	36	30	38
20	SP1680	円形	30	30	22
21	SK730	不整形	99	36	23
22	SP828	円形	47	41	21

表6　遺物観察表　　縄文土器・土製品

挿図番号	遺物番号	器種	部位	型式	計測値（mm） 口径	底径	器高	器厚	文様	縄文原体	調整技法 外面	内面	底部	出土地点	備考
	1	深鉢	体部	条痕縄文			(61)	8	(外)条痕文 (内)縄文	RL	ナデ	ナデ		SP753	繊維混入
	2	深鉢	口縁部	大木2a			(70)	8	(外)羽状縄文、異原帯、結束あり	LR RL	ナデ	不明		SP70	繊維混入
	3	不明	体部ヵ	大木2a			(25)	6	(外)羽状縄文結束強調	LR RL	ナデ	不明		SD1432	内外面ともにやや摩耗する、繊維混入
	4	鉢	完形	大木8a	176	86	109	5～6.5	(口縁)刺突文、隆線文〈隆帯〉		ナデ	ナデ	網代痕	69-31 RP1	
	5	不明	口縁部ヵ	大木8a			(50)	11	(外)横位渦巻文〈隆帯〉		不明	不明		SX76	内面摩耗
	6	深鉢ヵ	口縁部付近	大木8a			(57)	9	(外)縄文、隆線文、渦巻文〈隆帯〉	LR	不明	不明		SX76	内外面ともに摩耗激しい、キャリパー型深鉢ヵ
	7	深鉢ヵ	口縁部付近	大木8a			(54)	7.2～8.8	(外)縄文、渦	RL	不明	ナデ		SX76	隆帯(粘土紐貼り付け部)　落、外面は摩耗激しい、キャリパー型ヵ
	8	深鉢	体部	大木8b			(92)	11	(外)縄文、渦巻文〈隆帯〉	LR	不明	ナデ		SX76	
	9	深鉢	口縁部	不明			(41)	6.5～7.2			不明	不明		SX76	波状口縁
	10	深鉢	口縁部	大木8b	(120)		(82)	5	(口唇)渦巻文、沈線文 (外)縄文、平行沈線文	LR	ナデ	ナデ		SK113	
39	11	不明	口縁部	大木8			(25)	8	(外)縄文、隆線文〈隆帯〉	LR	ナデ	ナデ		65-30	
	12	浅鉢ヵ	口縁部	大木8b			(45)	7～10.5	(外)縄文、平行沈線文、渦巻沈線文〈隆帯〉	RL	ナデ	ナデ、ケズリ		SK1672	キャリパー型ヵ
	13	深鉢	口縁部	大木8b			(38)	6～10	(外)縄文、隆線文〈隆帯〉、沈線文	RL	ナデ	ナデ		SX1648	隆帯(口縁部)　落
	14	深鉢	体部	大木8b			(49)	7	(外)縄文、隆線文〈隆帯〉	LR	ナデ	不明		SK12	
	15	不明	口縁部	大木8a			(17)	4～6.7	(外)縄文、沈線文、隆線文〈隆帯〉	LR	ナデ	ナデ		SP610	
	16	深鉢	口縁部	不明			(21)	5			ナデ	ナデ		SE935	
	17	深鉢	口縁部	大木8a			(28)	10～18	(外)隆線文、渦巻文〈隆帯〉	LR	ナデ	ナデ		SX1451	
	18	深鉢	底部	不明		90	(38)	5.8～11			ナデ	ナデ	縄文ヵ	SK433 RP3	輪積み部から　落
	19	深鉢	底部	大木8b		(66)	(25)	5～7	(外)縄文、沈線文	LR	ナデ	ヘラナデ	ナデ、ミガキ	SP551	
	20	深鉢	底部	不明		(80)	(21)	8			ナデ	ナデ	ナデ	SK113	
	21	深鉢	口縁部	瘤付土器			(26)	5	(外)沈線文、瘤		ナデ	ナデ		SK1433	
	22	土玉又は土錘					28	12						SD1460	

表７　遺物観察表　　石器

挿図番号	遺物番号	器種	石材	計測値（mm） 長さ	幅	厚さ	重量（g）	破損状況	加工状況	出土地点	備考
40	23	石鏃	頁岩	43.8	28	10.8	13.5	表面先端部、裏面上部、左下部	両面を２次加工	表土	
	24	剥片	頁岩	38	34.5	10.8	13.2	先端部、裏面基部	両面を２次加工	SX1436	
	25	石鏃	石英	(23.8)	12	5	1.6	先端部、基部	両面を２次加工	SD1014 RQ６	
	26	剥片	頁岩	73.5	54.6	18.2	56.2	完形		SP1307	
	27	剥片	石英	58.8	40.2	20.4	34.6	完形		SP1698	ガラス質、白濁・黒濁部あり
	28	剥片	頁岩	23	24.3	3.2	1.3	完形		SD936 (66-28)	
	29	剥片	頁岩	27.5	14.8	5.7	2.0	完形		63-29	
	30	剥片	頁岩	37.5	18	5.8	3.9	完形		SD1090	
	31	凹石	不明	(178)	101.5	28	714.4	基部	表面に２ヶ所、裏面に１ヶ所の窪み	表土	
	32	磨石	多孔質安山岩	5	4.9	4.7	115.2	完形	全面研磨	SK470 RQ５	
	33	磨石	ホルンフェルス	5.7	5.3	4.8	186.2	完形	全面研磨	表土	

表８　遺物観察表　　須恵器

挿図番号	遺物番号	器種	部位	計測値（mm） 口径	底径	器高	器厚	調整技法 内面	外面	底部	胎土・焼成	施釉等	出土地点	備考
41	34	甕	体部			(45)	6.8～8.5	アテ	タタキ		7.5Y R5/1褐灰色、細砂、良、緻密		表土	外面摩耗激しい
	35	こね鉢	体部			(58)	9～12	ロクロナデ	ロクロ		10Y R5/1褐灰色、粗砂(白色)少量、良、緻密		SE1023	
	36	壺	肩部ヵ			(42)	7	ロクロカキメ	不明		2.5Y6/1黄灰色、長石・雲母(少量)、良	(内)自然釉	表土	外面摩耗激しい

表９　遺物観察表　　陶磁器（１）

挿図番号	遺物番号	種別	器種	年代	計測値（mm） 口径	底径	器高	器厚	調整技法 内面	外面	底部	胎土	施釉等	出土地点	備考
41	37	瓷器系陶器	甕	13～14C				9～12	指頭痕・ナデ	ナデ		2.5Y5/1黄灰色、長石・石英・雲母、良(堅)		SP1087	五頭山麓古窯に近似
	38		甕	13～14C				10～11	指頭痕・ナデ	ナデ		2.5Y5/1黄灰色、長石・石英・雲母、良(堅)		SP1087	五頭山麓古窯に近似、断面合成
	39		甕	13～14C				9～12	指頭痕・ナデ	押印・ナデ		2.5Y5/1黄灰色、長石・石英・雲母、良(堅)		65-27	五頭山麓古窯に近似、断面合成
	40	かわらけ		15C				1.8～4.6	ロクロナデ	ロクロナデ		10YR7/4にぶい黄橙色、良(堅)		SP634	
	41	青磁	碗	15C		54	(19)	9.5～1.7	ロクロナデ	ロクロナデ	切り離し高台	2.5Y6/1黄灰色、良(堅)、緻密	2.5GY6/1オリーブ灰色	69-32	龍泉窯 高台露胎、兜巾高台
	42	青花	皿	16C後半		70	(16.5)	2.7～5.0	ロクロ	ロクロ		2.5Y8/1灰白色、良、緻密	内外あり	表土	景徳鎮 切り離し高台、砂目積み痕、〈内・見込み〉圏線・不明文、〈外・高台付近〉圏線
	43	肥前磁器	碗	17C中		42			ロクロ	ロクロ・草花文ヵ	切り離し高台	N8/0灰白色、良、緻密	内外あり、貫入あり	SD424 RP２	高台露胎、兜巾高台
	44		皿	17C初			(19.5)	4.2	ハケ	ロクロ		10YR8/1灰白色、良、緻密	内外あり	TT	
	45		碗	17C末～18C初				2.5～3.5	ロクロ	ロクロ		N8/0灰白色、良、緻密	内外あり	69-33	二重圏線・草花文

表10　遺物観察表　　陶磁器（２）

挿図番号	遺物番号	種別	器種	年代	計測値（mm） 口径	底径	器高	器厚	調整技法 内面	外面	底部	胎土	施釉等	出土地点	備考
41	46	肥前磁器	碗	17C末～18C初			(20)	2～2.8	ロクロ	ロクロ		2.5Y8/1灰白色、良、緻密	内外あり	暗渠	〈内〉網目文 〈外〉二重網目文
	47		碗	18C			(22)	4～6.5	ロクロ	ロクロ		7.5Y8/1灰白色、良、緻密	内外あり	暗渠	〈外〉植物文ヵ
	48		碗	18C			(29)	3.2～4.8	ロクロ	ロクロ		10YR8/1灰白色、良、緻密	内外あり	67 28	〈外〉草花文
	49		碗	18C			(9)	6	ロクロ	ロクロ		10YR8/1灰白色、良、緻密	内外あり	TT	〈内・見込〉貫入あり
	50		碗	17C			(15)	5	ロクロ	ロクロ		10YR8/1灰白色、良、緻密	内外あり	SX1363	〈内〉圏線 〈外〉圏線、 〈高台部〉圏線
	51	肥前陶器	碗	19C		42	(19)	4.8～6.2	ロクロ	ロクロ		2.5Y7/1灰白色、やや不良、緻密	内外あり（高台内露胎）	SX1363	〈見込み部〉 重ね焼き痕、施釉なし (内)銅緑釉 (外)灰釉
	52	岸	香炉	17C中～18C前			(10)	6～9.5	ロクロ	ロクロ		7.5YR4/2灰褐色、良、緻密	内外あり	SX1363	(体部) 鉄釉7.5YR2/2黒褐色 (口縁部) 灰釉2.5YR5/3黄褐色
	53	会津本郷	擂鉢	18C	(310)		(60)	8.3～15.5	ロクロナデ	ロクロナデ		10YR6/4にぶい黄橙色、細砂、良、緻密	内外あり	SK1692	鉄釉10R4/1 暗赤灰色

表11　遺物観察表　　木製品

挿図番号	遺物番号	種類	計測値（mm） 長さ	幅	径	形状・加工状況　他	出土地点	備考
42	54	柱材（マツ）	328	145	114	先端部、胴部に加工痕あり	SP1265	13C末～14C末

表12　遺物観察表　　石製品

挿図番号	遺物番号	器種	計測値（mm） 長さ	幅	厚さ	重量（g）	破損状況	出土地点	備考
42	55	石墨状石製品	28.6	6.2	5.6	2.0	完形	SD1054	断面が円形になるように加工
	56	円盤状石製品	38.6	36	11～13	17.9	完形	SK395 RQ4	正面・裏面を平坦に加工
	57	石鉢	168	208	123	2600	完形	SP342	卵形の石の中央を球形に掘り込んで整形
	58	石皿ヵ	183	214	76	2200	完形	XO	自然剥離の可能性もあり
	59	石製品	197	158	60	2700	一部割れあり	SE151	炉に使用された石ヵ

写真図版

Ａ区完掘状況（北から）

Ｂ区完掘状況（南から）

C区完掘状況（北から）

D区完掘状況（西から）

Ａ区層序（東から）

Ｃ区層序（東から）

Ｄ区層序（東から）

ＳＫ７土層断面（南から）

ＳＫ７完掘状況（西から）

ＳＫ11土層断面（南から）

ＳＫ98完掘状況（南から）

ＳＫ８完掘状況（西から）

ＳＫ11完掘状況（北西から）

ＳＫ７・８・11・98完掘状況（北から）

ＳＢ99完掘状況（東から）

ＳＢ99－ＳＰ１土層断面（南から）

ＳＢ99－ＳＰ２土層断面（南から）

ＳＢ99－ＳＰ３土層断面（南から）

ＳＢ99－ＳＰ４土層断面（南から）

ＳＢ99－ＳＰ５土層断面（北から）

ＳＢ99－ＳＰ６土層断面（南から）

ＳＢ100完掘状況（南から）

ＳＰ14土層断面（東から）

ＳＰ16土層断面（東から）

ＳＰ17土層断面（西から）

ＳＰ18土層断面（東から）

ＳＰ19土層断面（北東から）

ＳＰ20土層断面（北東から）

ＳＰ21・95土層断面（東から）

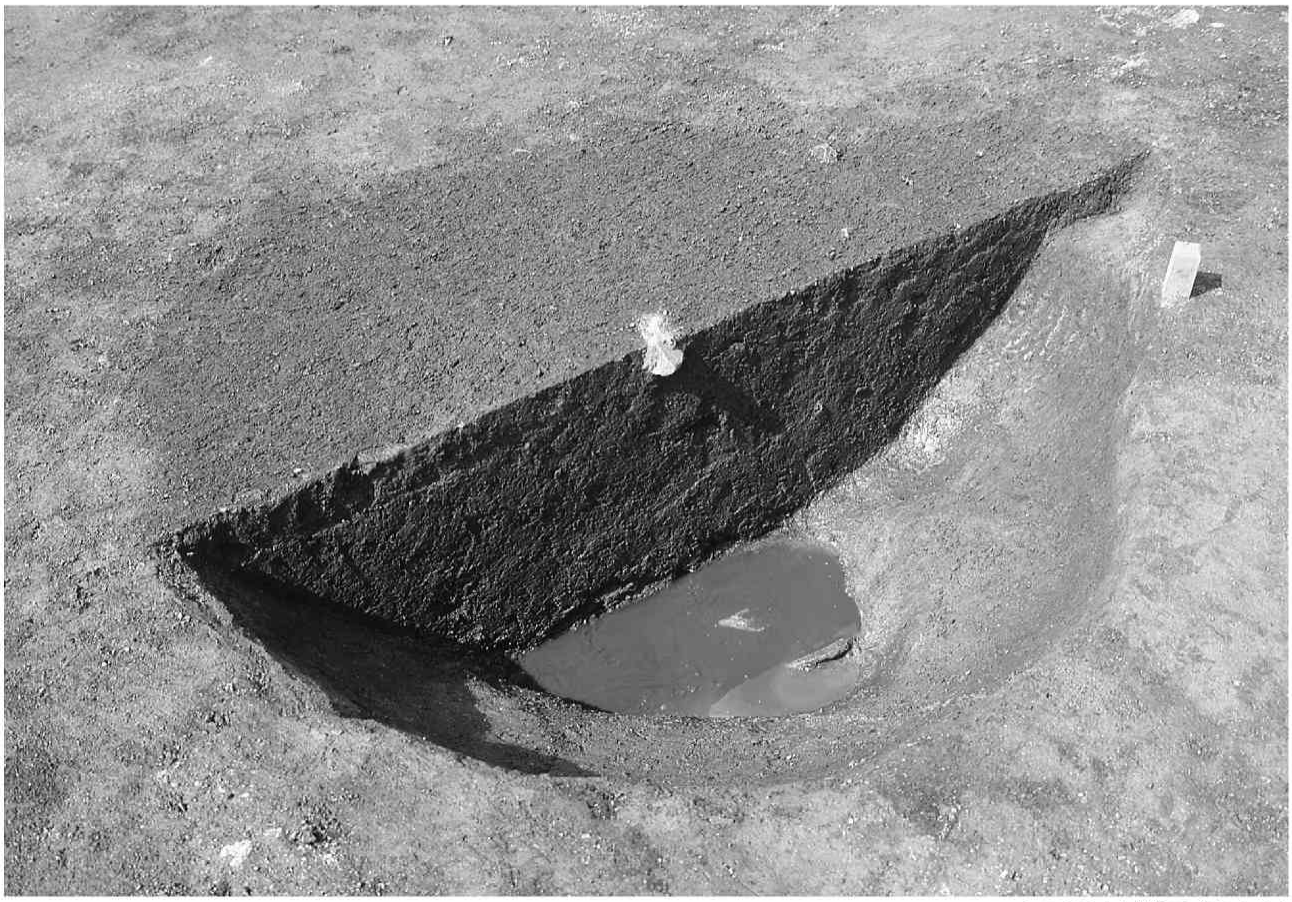
ＳＰ22土層断面（南から）

ＳＢ1500完掘状況（南から）

ＳＢ1793西半完掘状況（北から）

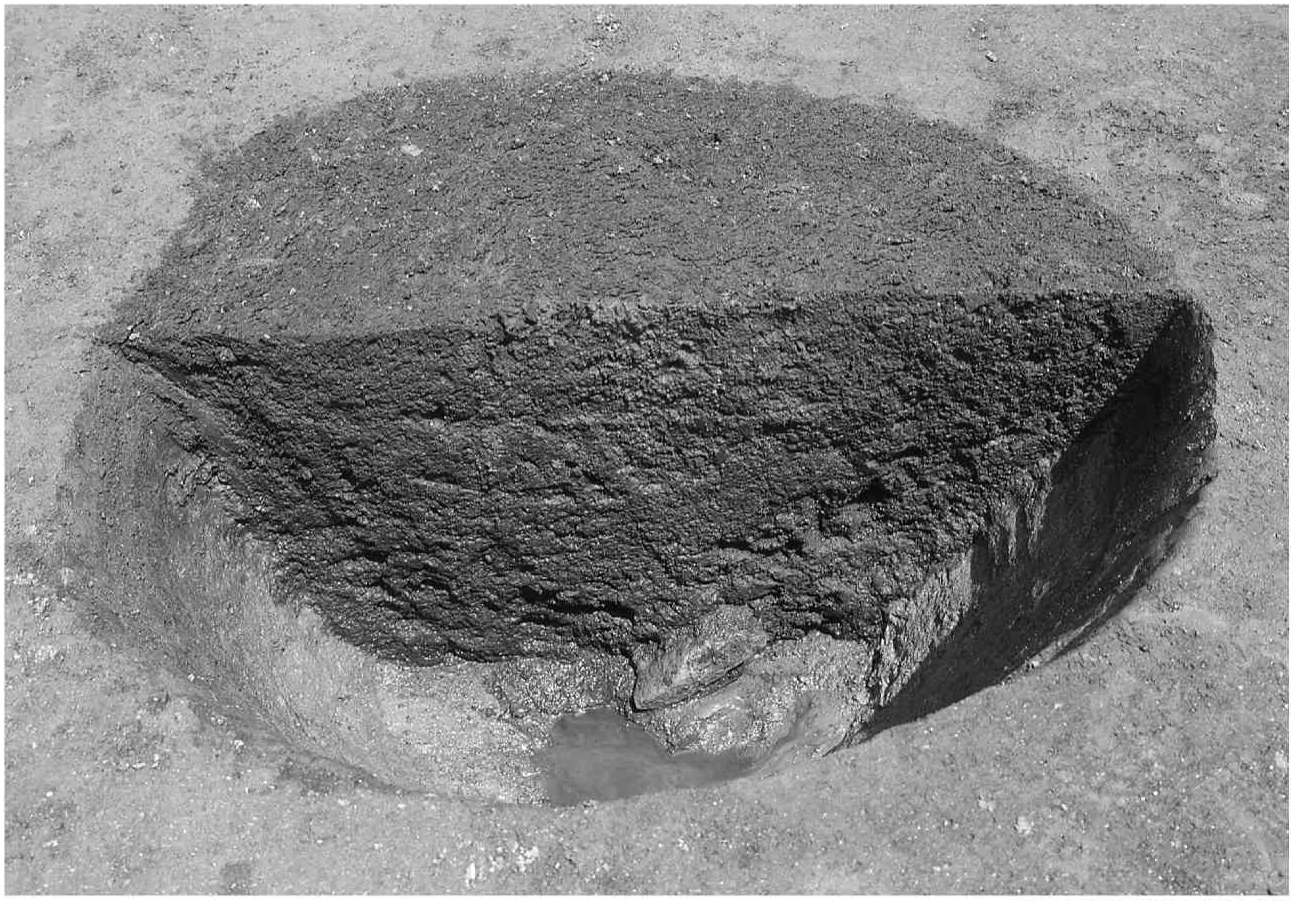
ＳＥ９土層断面（南から）

ＳＥ９完掘状況（南から）



ＳＥ151土層断面（南から）

ＳＥ151完掘状況（南から）

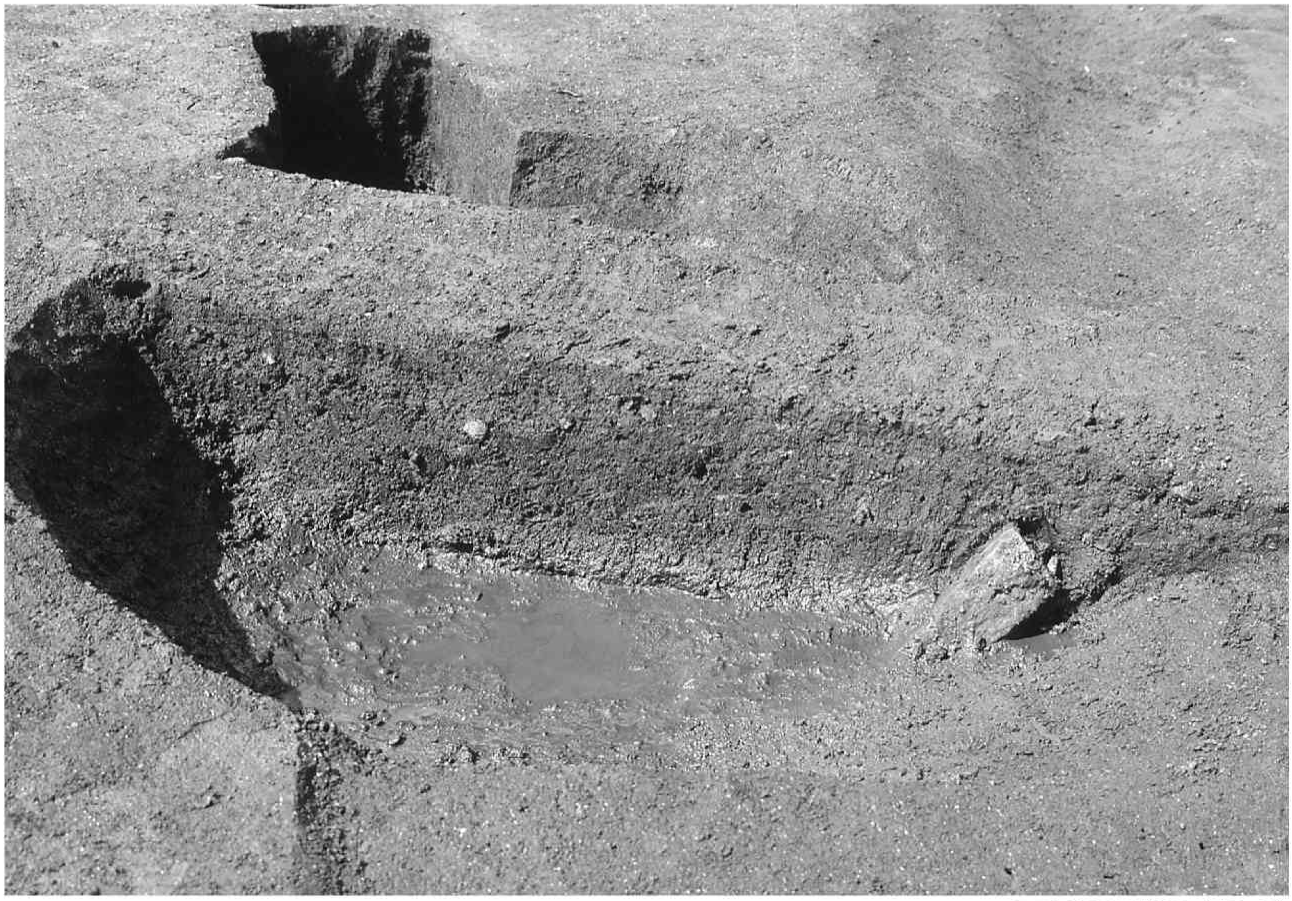


ＳＥ420土層断面（西から）

ＳＥ420完掘状況（西から）

ＳＥ935土層断面（東から）

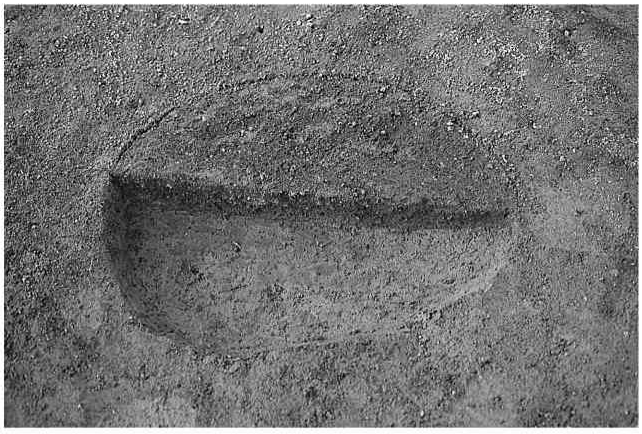
ＳＥ935完掘状況（北から）



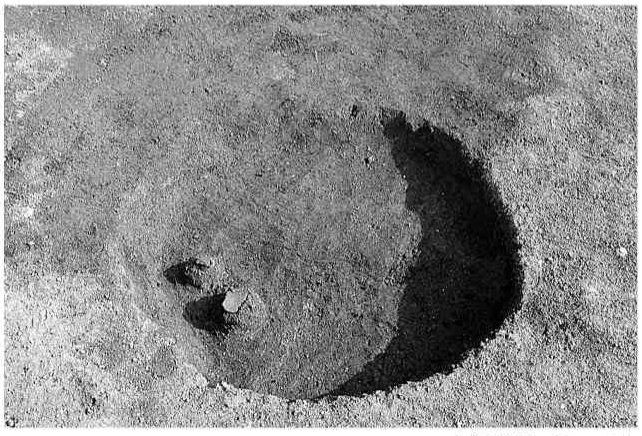
ＳＥ1110土層断面（南から）

ＳＥ1110完掘状況（南から）

ＳＥ1023完掘状況（北から）

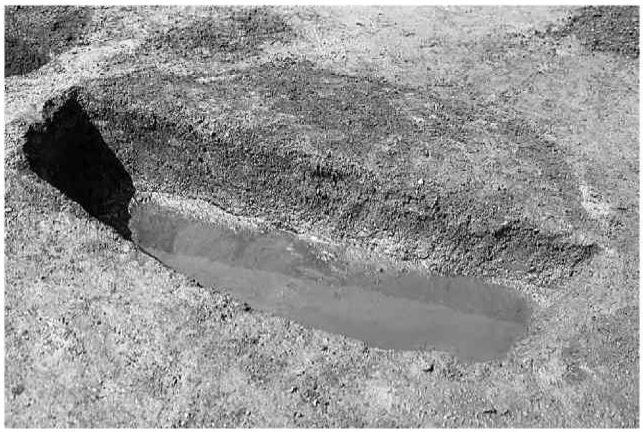


ＳＫ12土層断面（南から）



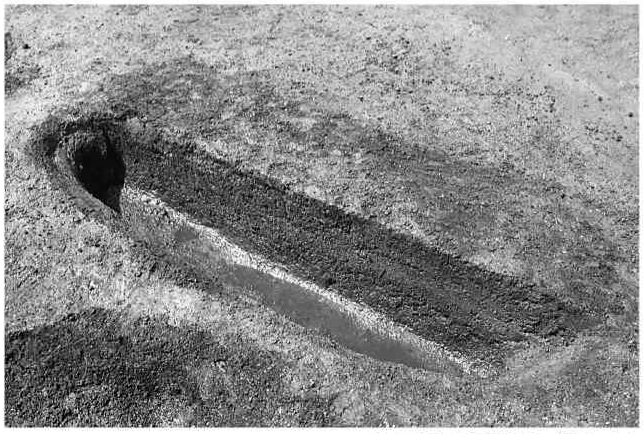
ＳＫ12完掘状況（北から）

ＳＫ34完掘状況（南西から）



ＳＫ395土層断面（南から）

ＳＫ395完掘状況（北東から）



ＳＫ439土層断面（南から）

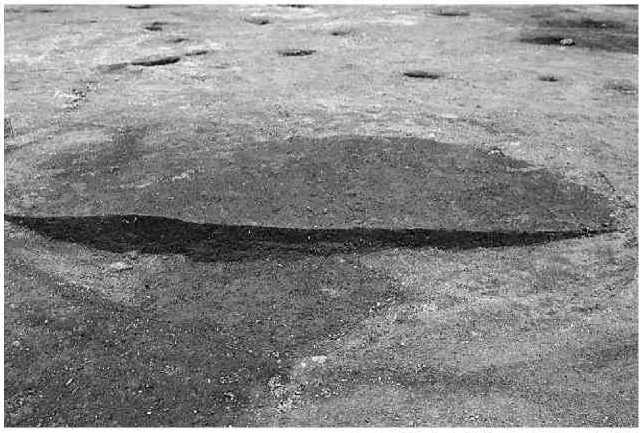
ＳＫ471土層断面（東から）

ＳＫ439完掘状況（東から）

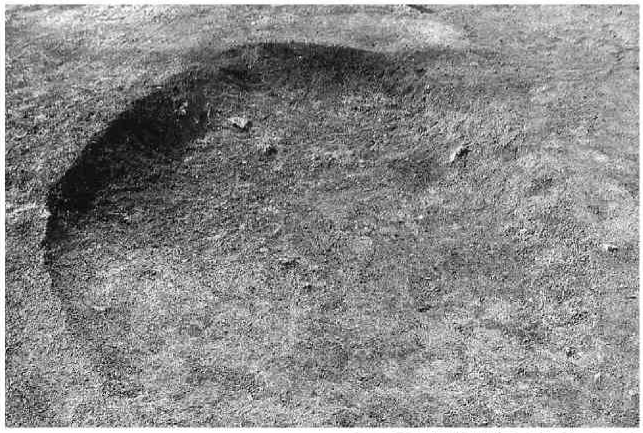
ＳＫ471完掘状況（南東から）

ＳＫ433・530・531土層断面（西から）

ＳＫ433・530・531完掘状況（西から）



ＳＫ515土層断面（南西から）

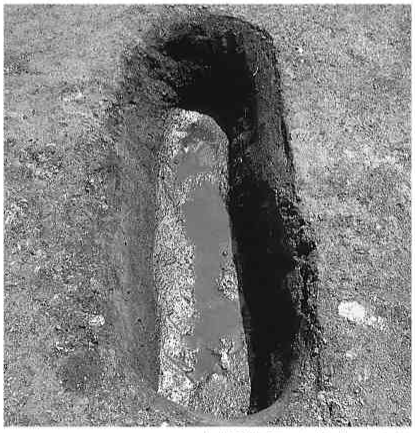


ＳＫ515完掘状況（南東から）

ＳＫ516土層断面（北から）

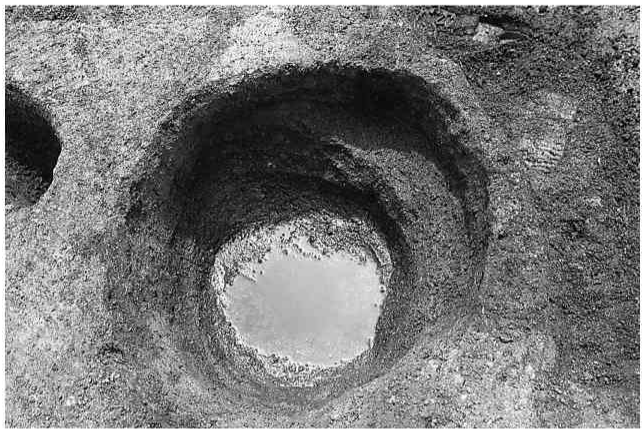
ＳＫ516完掘状況（南から）

ＳＫ522土層断面（北から）



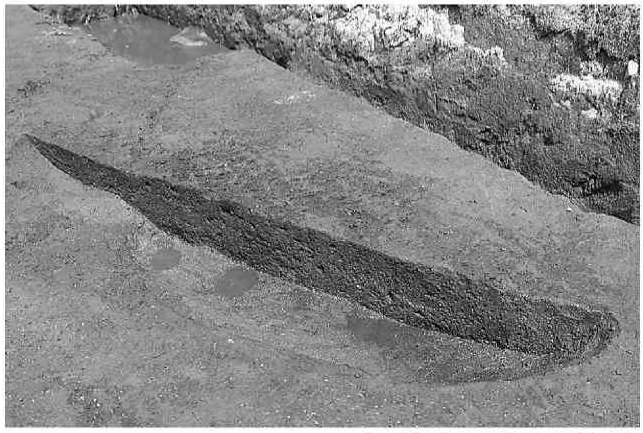
ＳＫ522完掘状況（北東から）

ＳＫ632土層断面（南から）



ＳＫ632完掘状況（西から）

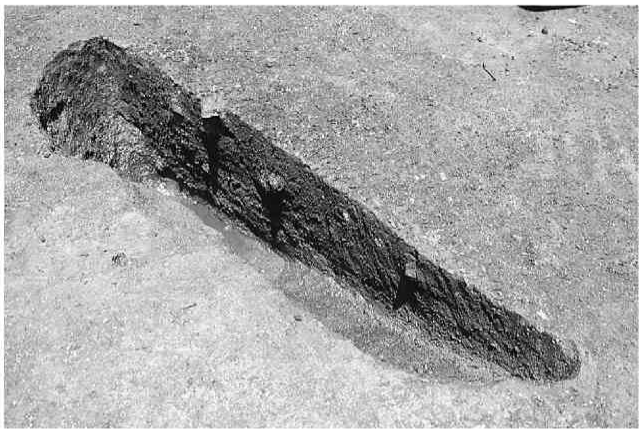
ＳＫ635土層断面（南から）



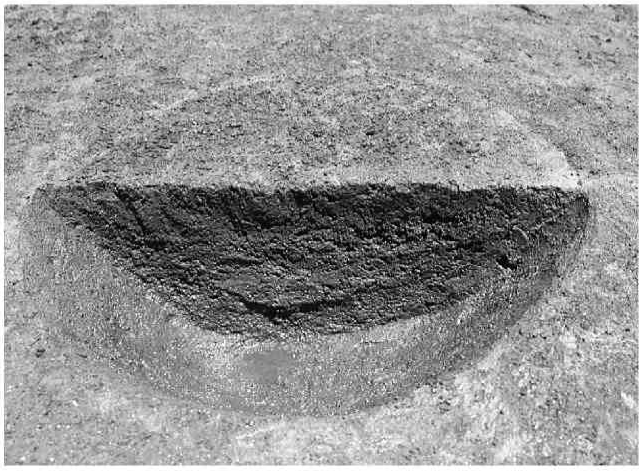
ＳＫ1088土層断面（西から）

ＳＫ635完掘状況（西から）

ＳＫ1088完掘状況（南西から）

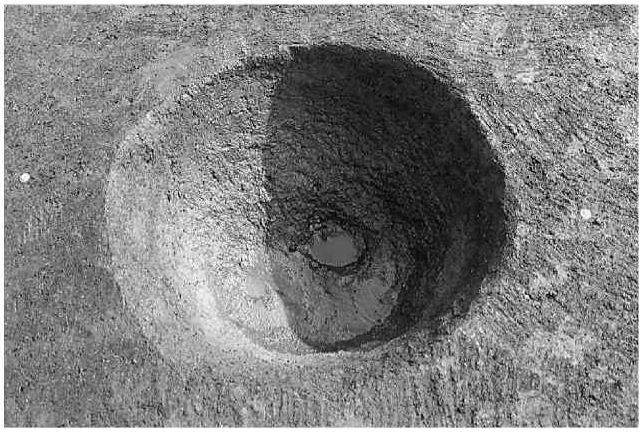


ＳＫ1089土層断面（南から）

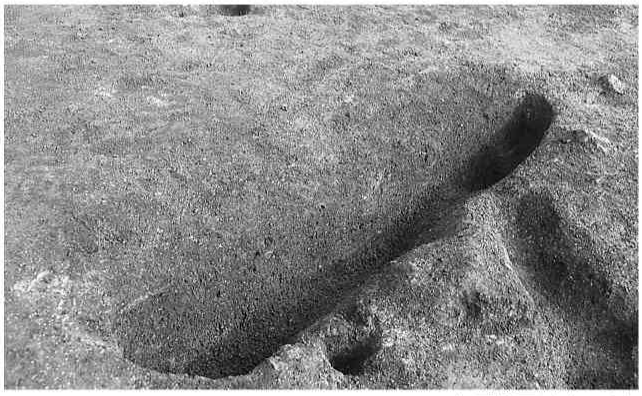


ＳＫ1120土層断面（南から）

ＳＫ1089完掘状況（南東から）



ＳＫ1120完掘状況（北から）



ＳＫ1629土層断面（南から）

ＳＫ1629完掘状況（西から）

ＳＫ1446土層断面（東から）

ＳＫ1672土層断面（東から）

ＳＫ1446完掘状況（南から）

ＳＫ1672完掘状況（東から）

ＳＫ1433土層断面（東から）

ＳＫ1433完掘状況（北から）

ＳＸ1648土層断面（南から）

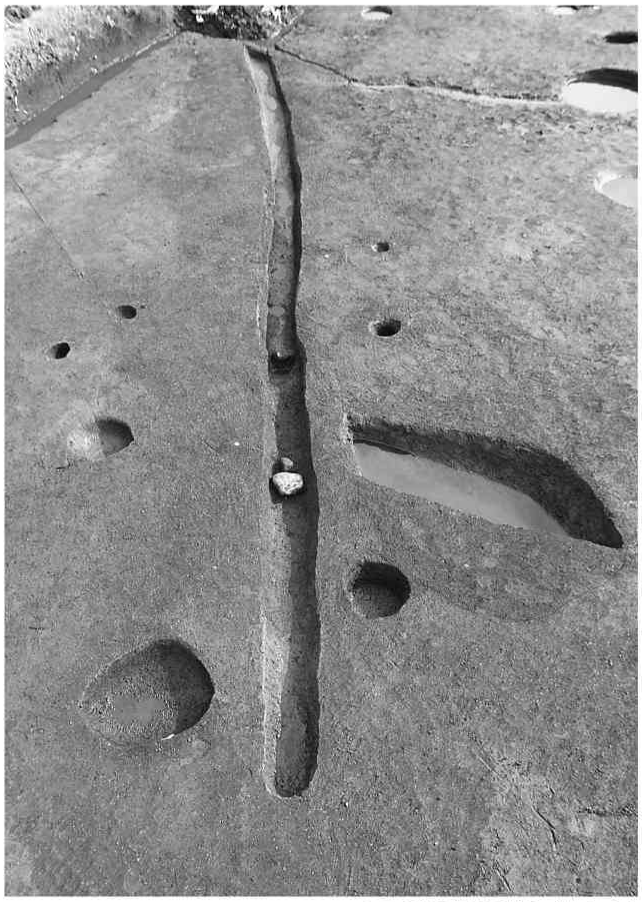
ＳＸ1451土層断面（東から）

ＳＸ588土層断面（西から）

ＳＸ1451完掘状況（東から）

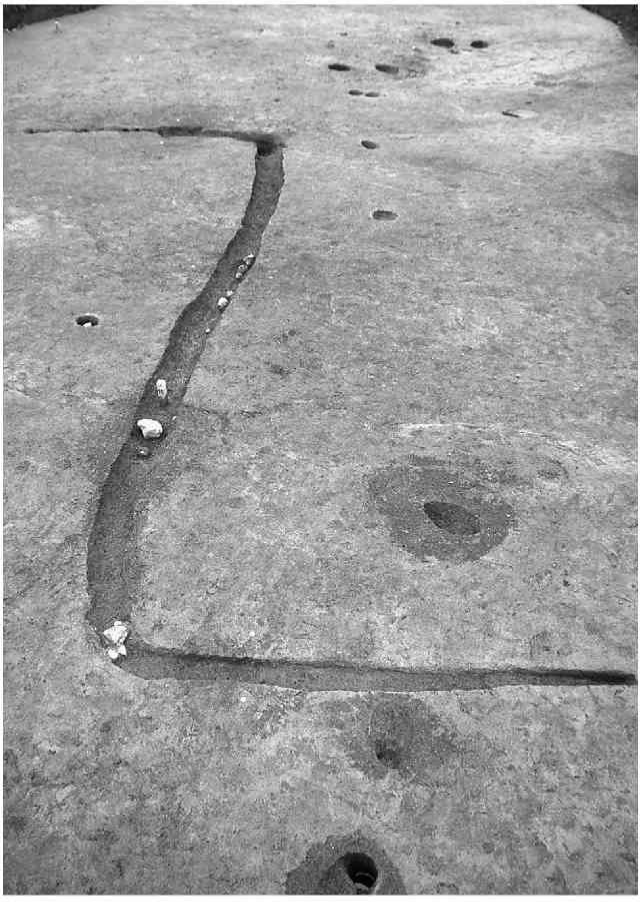
ＳＸ588完掘状況（北東から）

ＳＤ1675～1680他完掘状況（北から）



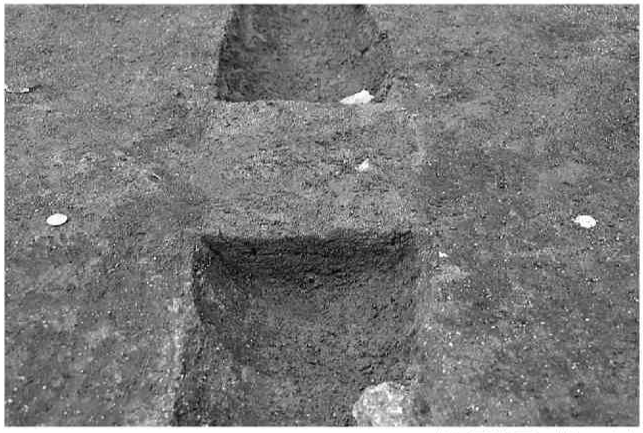
ＳＤ1014完掘状況（北から）

ＳＤ1014土層断面（南から）



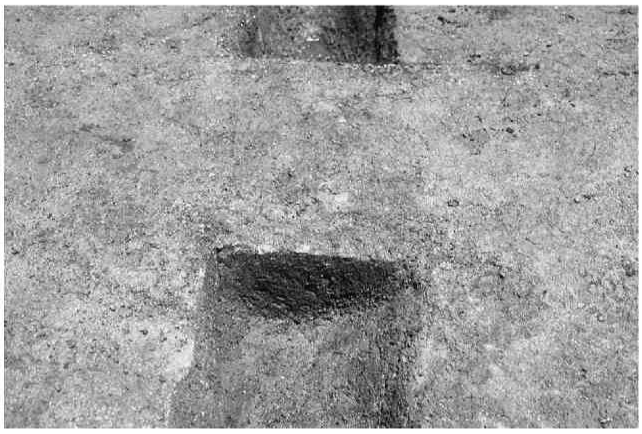
ＳＤ1054完掘状況（南から）

ＳＤ1054ａ－ａ'土層断面（西から）

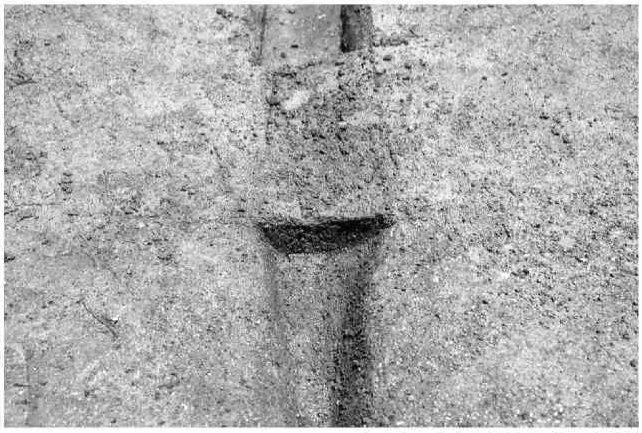


ＳＤ1054ｂ－ｂ'土層断面（南から）

ＳＤ1054ｃ－ｃ'土層断面（東から）

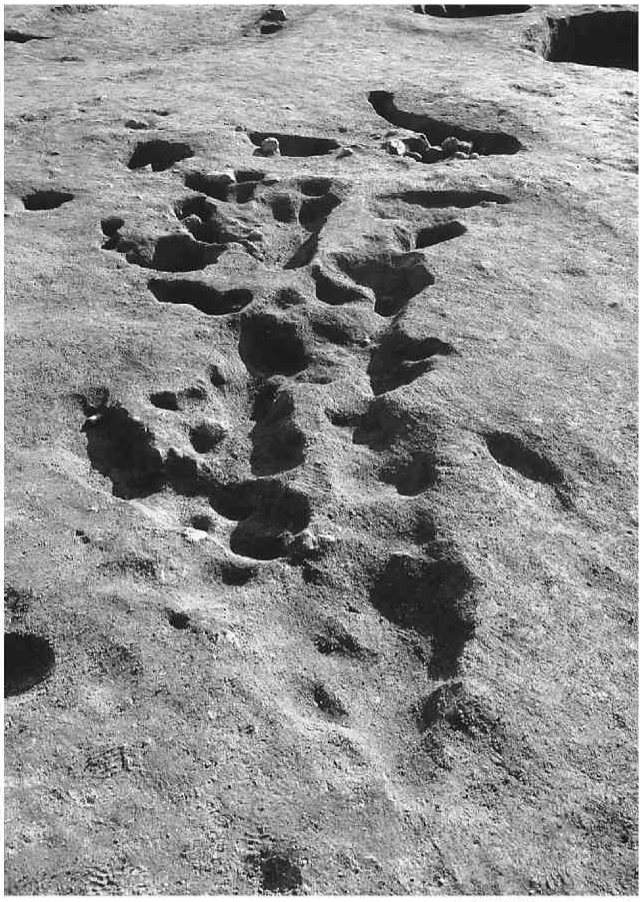


ＳＤ1090土層断面（南から）



ＳＤ1091土層断面（南から）

ＳＤ1090・1091完掘状況（南から）



ＳＤ1460完掘状況（北から）

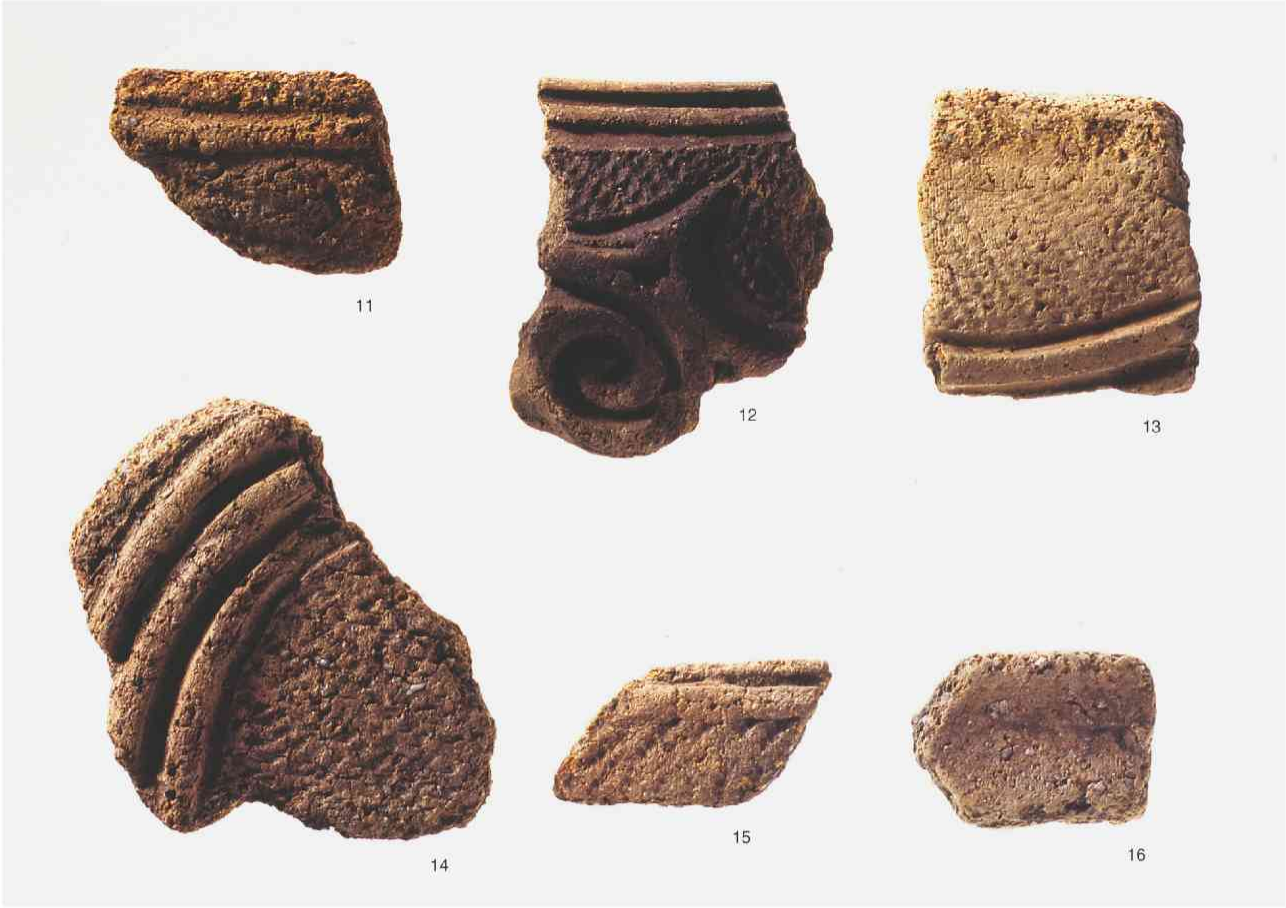
ＲＰ１出土状況
（西から）

ＲＰ３出土状況
（北西から）

ＲＱ４出土状況
（南から）

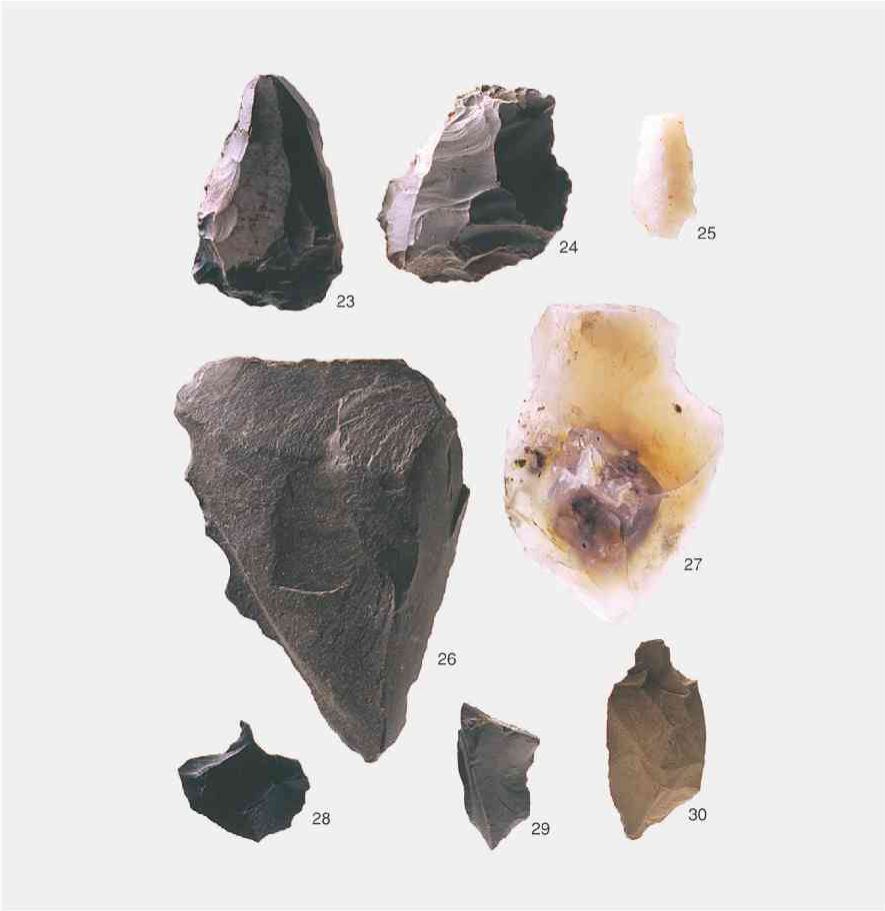
ＲＱ５出土状況
（西から）

縄文時代の遺物 1

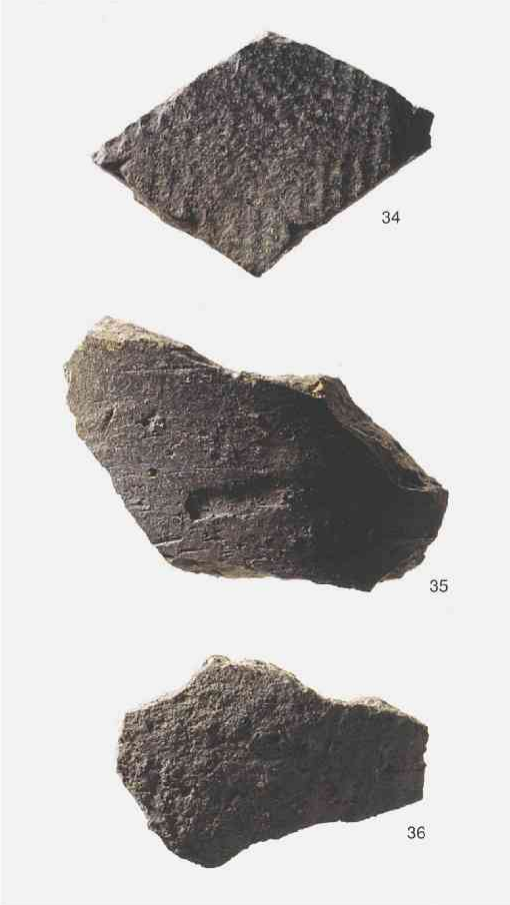


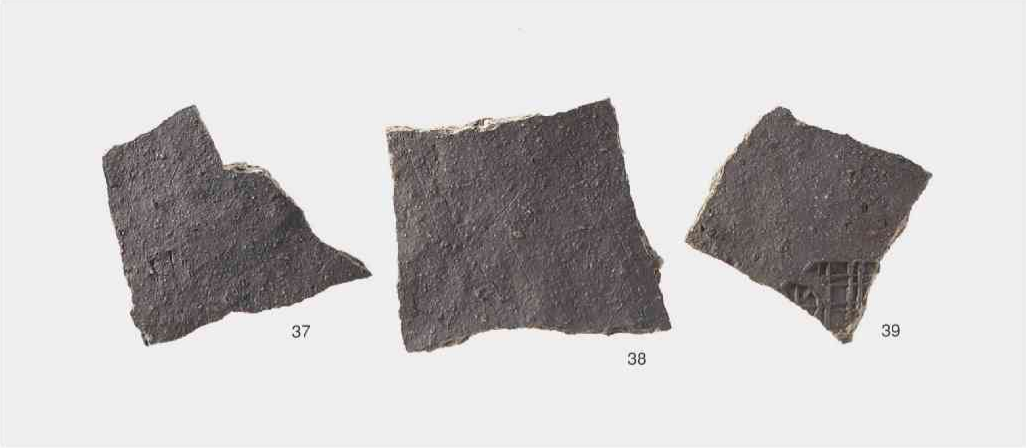
縄文時代の遺物 2

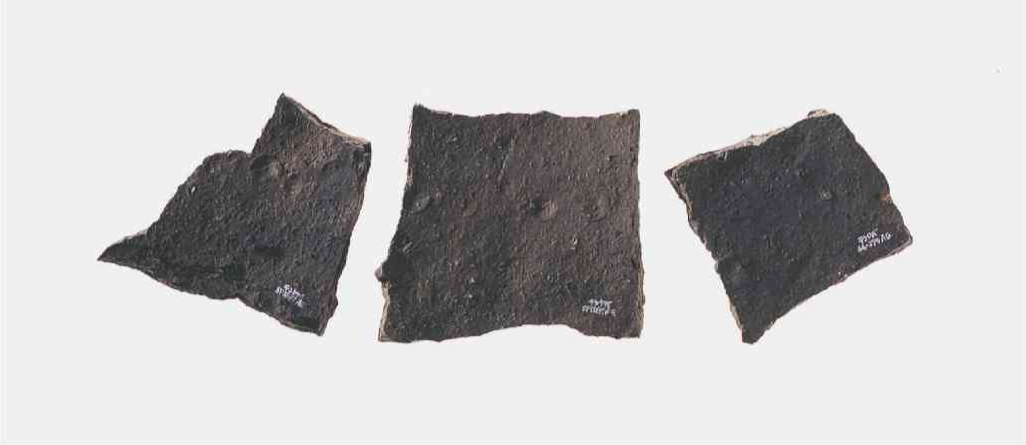
縄文時代の遺物 3



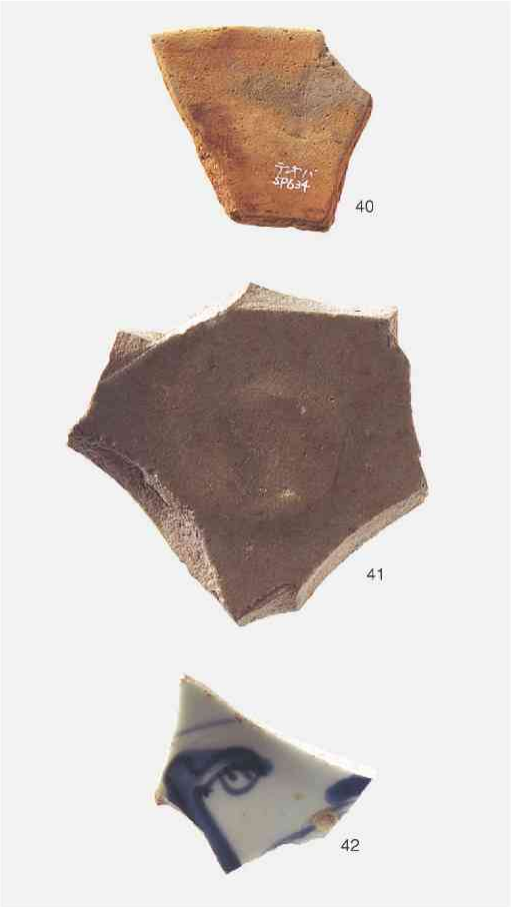
縄文時代の遺物 4



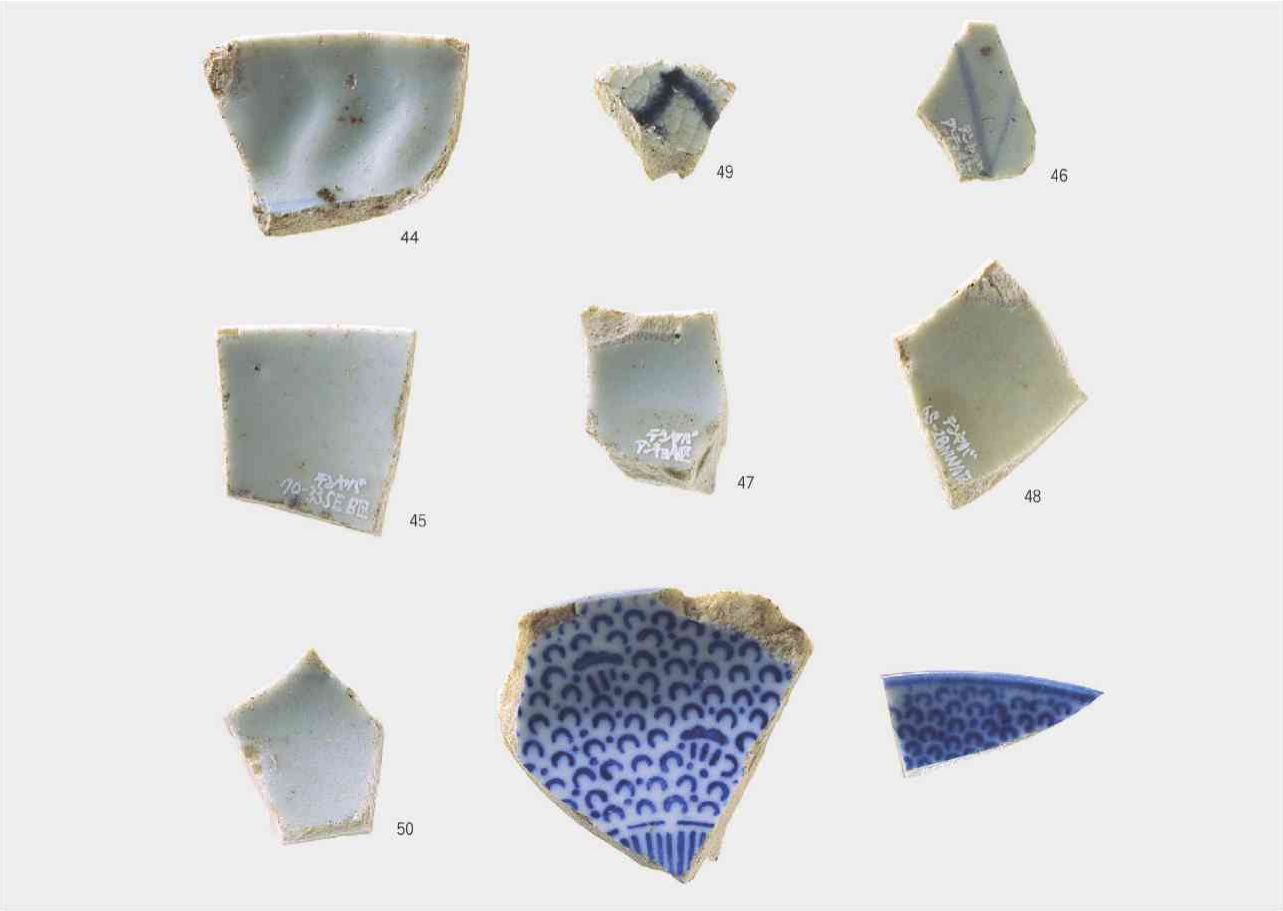


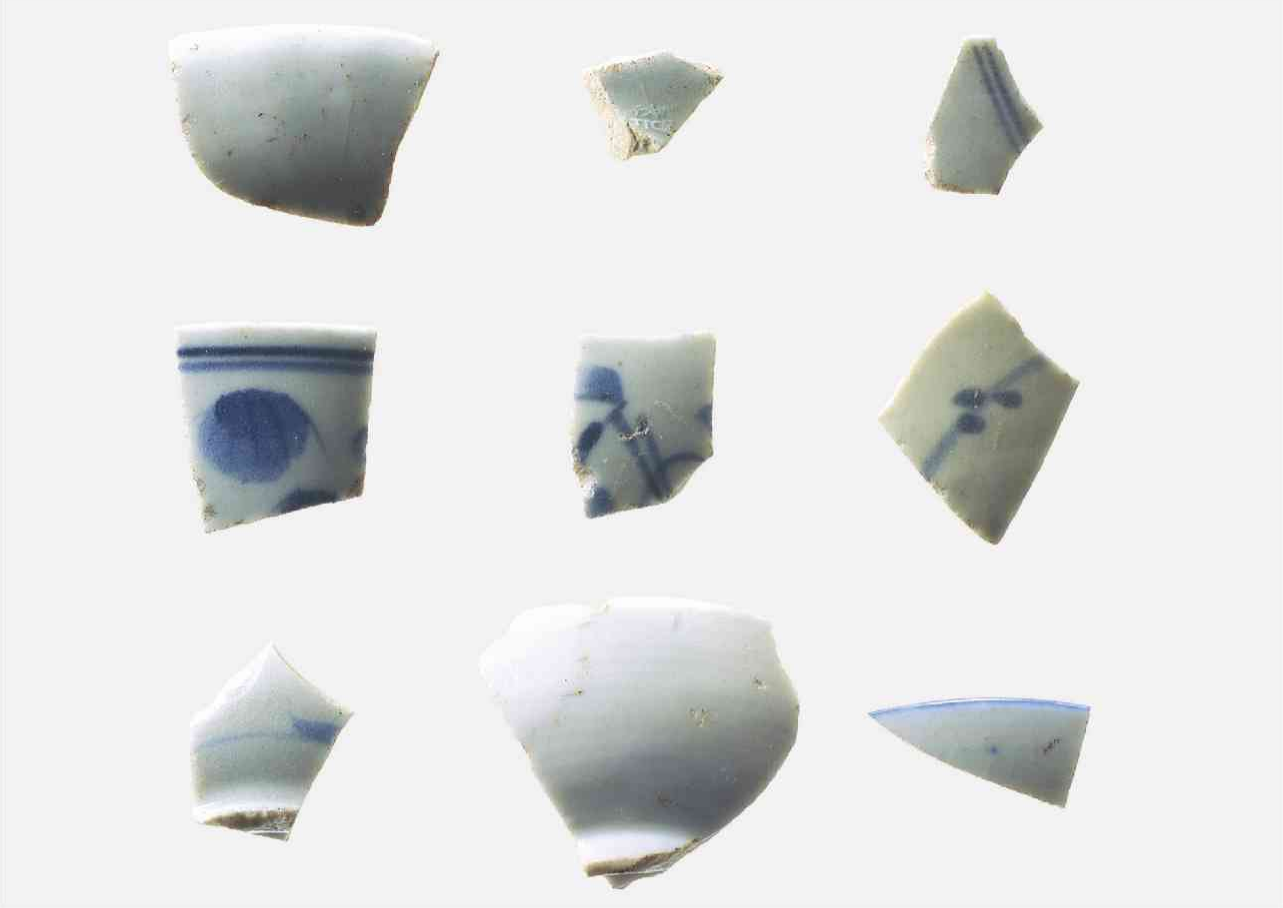


奈良・平安時代、中世の遺物



中世・近世の遺物





近世の遺物

近世・その他の遺物

57

58

59

その他の遺物

山形県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第174集付図　天矢場遺跡遺構配置図

報告書抄録

ふ り が な	てんやばいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	天矢場遺跡発掘調査報告書
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第174集
編 著 者 名	須藤孝宏　氏家信行　伊藤純子
編 集 機 関	財団法人山形県埋蔵文化財センター
所　在　地	〒999-3161　山形県上山市弁天二丁目15番１号　ＴＥＬ　023-672-5301
発行年月日	西暦2009年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °　′　″	東経 °　′　″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
てんやばいせき 天矢場遺跡	やまがたけん 山形県 なんようし 南陽市 おおあざかわとい 大字川樋 あざてんやば 字天矢場	6213	平成18年度 登録	38°05′27″	140°11′25″	20070517 ～ 20070717 20071001 ～ 20071106	4500m²	一般国道13号 上山バイパス 改築事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
てんやばいせき 天矢場遺跡	狩猟場	縄文時代	陥穴　4	縄文土器 土製品 石器 石製品	縄文時代と中世･近世の複合遺跡。縄文時代は、陥穴が４基検出され、早期末葉から後期後葉にわたる土器が出土している。中世･近世については､18棟の掘立柱建物をはじめ、これに伴う井戸や溝が多数検出された。 （文化財認定箱数：10）
		奈良時代 平安時代		須恵器	
	集落跡		掘立柱建物　18	陶磁器	
		中世	井戸　6	木製品	
		近世	土坑 溝	石製品	

要　　約	白鷹丘陵と出羽山地に囲まれた谷状の地形の西側に立地する遺跡である。縄文時代には狩猟場の一部であったと推測される直線状に並ぶ陥穴が見つかった。隣接する加藤屋敷遺跡でも縄文時代後期の住居が検出されていることから関連が考えられる。 中世以降では、13～17世紀頃に建てられたと考えられる建物が検出され、主軸方向などから４時期に大別されると思われる。また、出土遺物から福島や北陸、九州地方の他、中国大陸との物資の交流の一端がうかがえる。

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第174集

天矢場遺跡発掘調査報告書

2009年３月31日発行

発行　財団法人　山形県埋蔵文化財センター
〒999-3161　山形県上山市弁天二丁目15番１号
電話　023-672-5301
印刷　アベ印刷株式会社
〒990-0894　山形県山形市大字船町82番地
電話　023-681-1951